

絆をつないで

被災地での奉仕活動の記録・提言集



2021年12月

一般社団法人 岡山経済同友会

絆をつないで

被災地での奉仕活動の記録・提言集



2021年12月

一般社団法人 岡山経済同友会

表紙の制作者

岡山県立大学デザイン学部3年

小川 桃子 (おがわ・ももこ)、小川 桜子 (おがわ・さくらこ)

〈制作者からのコメント〉

●表紙の「青空のデザイン」

「ガーベラの花言葉に希望などの意味があり、復興のシンボルとされていることを知りました。

ボランティアの方々と被災地の方々による絆のつながりを希望の象徴であるガーベラの花畑で表しています。その絆のつながりが積み重なり未来につながっているということを、若者たちが明日の空を見上げている様子で表現しました」

●大扉の「手のデザイン」

「東日本大震災から10年、熊本地震から5年という長い年月の中で、人と人とが紡いできた思いが絆として育っていく様子を表現しています。人とのぬくもりが感じられるように温かみのあるビジュアルを意識して制作しました」



目次

口 絵	6
-----	---

はじめに	10
------	----

一般社団法人岡山経済同友会 代表幹事 宮長 雅人	10
一般社団法人岡山経済同友会 代表幹事 梶谷 俊介	11
大学コンソーシアム岡山 会長（岡山県立大学学長） 沖 陽子	12
特定非営利活動法人AMDAグループ 代表 菅波 茂	13

6年間の軌跡	16
--------	----

被災地奉仕活動の記録	16
元岡山県産業振興財団産業プロモータ 高木 二三男	19
岡山商科大学学長 井尻 昭夫	20
岡山商科大学特別顧問 大崎 紘一	20
一般社団法人岡山経済同友会教育・社会貢献委員会副委員長 黒住 宗道	23
大学コンソーシアム岡山事務局 事務長 矢延 里織	27
元大槌町桜木町自治会長 中村 盛観	30

2011年（平成23年）※かっこ内は派遣当時の大学・学年	33
------------------------------	----

元一般社団法人岡山経済同友会専務理事・事務局長 金森 満廣（故人）	35
元一般社団法人岡山経済同友会教育問題委員会委員長 原 憲一	37
常浦 あいり（環太平洋大学1年）	38
炭田 優也（環太平洋大学2～3年）	40
石川 和樹（川崎医療福祉大学3年）	41
宮前 祐喜子（岡山大学3年）	42
RSK山陽放送報道部記者 森脇 大陸	43
リョービツアーズ岡山支店観光事業部マネージャー 高田 昌弘	45

2012年（平成24年）	49
--------------	----

片岡 大輔（吉備国際大学大学院1年）	51
久見 新吉（吉備国際大学2～3年）	53
岡山理科大学名誉教授 木村 宏	54

目 次

2013年（平成25年）————— 58

元島 千晶（倉敷芸術科学大学3年）	60
横山 すみ玲（美作大学4年）	61
植田 好智（岡山商科大学2年）	63
佐藤 明（倉敷芸術科学大学3年）	64
出射 茉実（川崎医療福祉大学2年）	65
五藤 拓也（環太平洋大学2年）	66
松尾 涼児（環太平洋大学2年）	68
岡山理科大学名誉教授 堂田 周治郎	69

2014年（平成26年）————— 72

秋山 南美（ノートルダム清心女子大学3年）※2年時も	74
山崎 彪香（中国学園大学1年）	75
安積 弘也（環太平洋大学2～4年）	76
藤井 友里（就実短期大学1年）	78
ノートルダム清心女子大学名誉教授 加藤 正春	79

2015年（平成27年）————— 82

藤原 康史（川崎医療福祉大学1年）	84
森部 葵（就実大学1年）	85
中本 千晴（川崎医療福祉大学1年）	87
岡馬 凜太郎（山陽学園大学1年）	88
山陽新聞社赤磐支局長 水野 雅文	90

2016年（平成28年）————— 93

清水 響（岡山県立大学4年）	95
廣畑 利季（就実大学2年）	96
田部 修一（美作大学4年）	98
秋山 広司（岡山理科大学2年）	99
特定非営利活動法人AMDА 理事 難波 妙	100
山陽学園大学地域マネジメント学部教授 澁谷 俊彦	102
元萩原工業顧問 横山 博	104



防災・減災のために ————— 112

自 助 —————	112
共 助 —————	115
第21回教育フォーラムから —————	117
岡山経済同友会の取り組みと、AMDAとの連携 —————	120

あ と が き ————— 121

一般社団法人岡山経済同友会教育・社会貢献委員会委員長 日下 知章

編集者より —————

この冊子には、編集者を除き、計46人の方から、寄稿をいただきました。

ボランティア活動に参加した元学生の皆さんには、①派遣で学んだこと・当時の思い出、②その体験を踏まえて、現在、ご自身で心がけていること、③今後の自然災害で被害を最小限に食い止めるための提言、アイデアの3点を盛り込んでいただくよう、お願いしました。

名前、() 内で当時、在籍した大学・学年、当時の肩書に続いて、現職を掲載していますが、現職については、本人の希望で伏せた場合もあります。

表記については、『記者ハンドブック 第13版 新聞用字用語集』（一般社団法人共同通信社編著、2020年）に基づき、漢字や仮名遣いを統一しました。



黙とうをささげて作業に入る学生たち
＝2011年8月26日、岩手県大槌町



第1回の派遣を前に行われた事前研修会＝
2011年8月7日、岡山国際交流センター



大槌町の仮設校舎で開かれた
バーベキュー大会＝2012年
8月24日



大槌稲荷神社の前に集
合した参加者＝2012年
8月25日、大槌町



土砂を撤去する学生たち
＝2013年8月25日、石
巻市雄勝町



被災当時の話を真剣な表情で聴く学生たち
＝2013年8月26日、岩手県山田町



岡山市営駅南駐車場で行われた
出発式＝2014年8月23日、木村
宏氏提供

炎天下での草取り＝2014年8月
24日、石巻市雄勝町



吉里吉里海岸での集合写真
＝2015年8月23日、大槌町



小雨の中で行われた清掃作業
＝2015年8月23日、大槌町の
吉里吉里海岸



熊本県益城町へ向かうバスの中であいさつする
黒住宗道団長＝2016年5月3日、澁谷俊彦氏
提供



活動を終えて広安小学校を離
れる参加者を見送るAMDAの
スタッフ＝2016年5月5日、
澁谷俊彦氏提供

地域連携で防災・減災を

みやなが まさと
宮長 雅人 一般社団法人岡山経済同友会 代表幹事



東日本大震災から10年という節目の年を迎え、「全国経済同友会 東日本大震災10周年追悼シンポジウム」が被災地である宮城県仙台市において2021年7月に開催された。岡山経済同友会代表幹事として私も現地に赴く予定であったが、新型コロナウイルスの影響でやむなくオンライン参加となった。

シンポジウムを通し、被災地では官民の懸命な努力により、インフラ整備や住宅再建等ハード面の復旧は着実に進んでいることが確認できたものの、一方で地域コミュニティの再建や農業・漁業の風評被害の鎮静化等、ソフト面の復興には課題が山積していることもうかがえ、復興への道のりはいまだ半ばであるという印象を強く持った。

残念ながら現地を訪れて追悼することはできなかったが、あらためて犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

われわれ岡山経済同友会と東日本大震災との関わりを振り返ってみると、震災から5年間にわたり当会の教育問題委員会（現、教育・社会貢献委員会）が中心となり、大学コンソーシアム岡山と、特定非営利活動法人で国際医療ボランティア団体のアムダ（以下、AMDA）のご協力のもと、被災地への大学生ボランティアの派遣を実施したことである。さらにこの経験を生かし、6年目は熊本地震への復旧支援活動を行い、6年間で延べ217人の大学生ボランティアの派遣を行い、被災地復興に関わらせていただいた。

今後、南海トラフ地震等の発生が懸念されていることもあり、教育・社会貢献委員会の発案で、このたび復興支援ボランティアに関わる記録と当時参加された方々へ寄稿をお願いし冊子にまとめることとなった。当時の経験を通して得た思いや教訓を、風化させることなく記録として残し継承していくことは、私自身大変有意義なことだと考えている。

2020年3月に当会が発表した提言書「地域全体で取り組むSDGs先進県へ」に基づき、産・官・学・金・言・民の連携によるSDGsの推進に当会では取り組んでいる。その中で「災害対応に対するレジリエンスの向上」は活動テーマの一つになっており、近年多発する多様な災害に対応するため、防災・BCP委員会が中心となりBCPをはじめとしたさまざまな取り組みを行っている。気候変動対策は今や世界的な課題であり、SDGsが目指す経済・社会・環境のバランスの取れた成長のためには、過去の体験と



教訓を生かしつつ地域連携により防災・減災に一層取り組むことが必要で、本冊子が再認識のきっかけになれば幸いである。

最後に、学生ボランティアの窓口として取りまとめにご協力いただいた大学コンソーシアム岡山関係者のみなさま、被災地での活動支援の指導をしていただいたAMDA関係者のみなさま、被災地でのボランティア活動に参加された当時大学生だったみなさま、そして本冊子の企画・寄稿等に尽力された教育・社会貢献委員会関係者のみなさまにあらためて感謝とお礼を申し上げます。

大きな気づきと学び

かじたに しゅんすけ
梶谷 俊介 一般社団法人岡山経済同友会 代表幹事



東日本大震災から10年、熊本地震からも5年が経過し、岡山においてはいずれも記憶が薄れようとしています。岡山経済同友会がAMDAと大学コンソーシアム岡山と協力して2011年から2016年にかけて行った、大学生ボランティア団の活動の記録を取りまとめて、後世に残すことといたしました。災害から得た学びを次に生かすことにつながれば幸いです。

この取り組みは、2011年6月に岡山経済同友会教育問題委員会で提案され、AMDAと大学コンソーシアム岡山の協力を得て実現したものです。以後、5年間にわたり、夏休みに学生を岩手県大槌町などに派遣し、ボランティア活動を行いました。そして東日本大震災から5年がたち、活動を終了した翌2016年に熊本地震が発災し、この年は熊本にボランティアを派遣しました。初年度は提案から実施まで2カ月足らずという、大変短い期間でしたが、大学コンソーシアム岡山を通じて岡山県内全大学の学生に呼びかけることができました。

被災地を支援するボランティア活動ではありますが、事前研修を行い、複数の大学の学生と一緒に被災地でボランティア活動を行うと同時に、被災者の皆様からも話を聞くという教育的意味合いの強い活動です。ボランティアに参加した学生にとって、普通では得ることのできない大きな気づきと学びがあったことと思います。また、ボランティア活動を通じて得たことをそれぞれの大学で報告したり、岡山経済同友会の

教育フォーラムのテーマとしても取り上げたりして、岡山県に住む私たち自身の課題として深めていくことを併せて行いました。教育的視点に加えて、地域や地域連携の在り方を考える視点からも大変意義のあることでした。

この活動が生まれた背景には、岡山に本部を置く特定非営利活動法人AMDAの存在と、2006年に設立された大学コンソーシアム岡山の存在があります。岡山経済同友会は大学コンソーシアム岡山の設立に関わり、会員として運営委員会に参加し、代表幹事はコンソーシアムの副会長を務めています。このような関係があったからこそ生まれた活動であり、準備期間が短い中でも実行でき、継続した活動とすることができました。この記録と提言集には当時の学生がどんな学びをし、それが今にどう生かされているかが多数掲載されています。あらためて学生時代の経験がその後の人生を左右することを感じるとともに、経済界と大学の面的な連携が次世代の育成の面でも、危機対応や地域の持続可能性の面からも大変重要なことがわかります。今後も大学コンソーシアム岡山のさらなる発展を共に目指してまいりたいと思います。

最後になりましたが、今なお途上にある被災地の一刻も早い復興と被災された皆様の幸せ、犠牲になられた方々のご冥福をお祈りし申し上げます。

あや 絆が綾なす10年間の重み

おき ようこ
沖 陽子 大学コンソーシアム岡山 会長・岡山県立大学学長



わが国は災害の多い国として位置づけられています。自然災害は、地震、津波、豪雨、洪水、高潮、暴風、噴火など異常な自然現象により生ずる被害で、近年、気候変動による自然災害が各地で多発しています。阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震など巨大地震による被害も多く、地震の発生率は世界で4位です。日本列島はプレート境界の上に存在しているので致し方ないかもしれません。特に東日本大震災は国内観測史上最大の巨大地震で、地震・津波による被害は甚大でしたが、それ以外に原子力発電所事故による人為災害まで引き起こしてしまいました。

大切な人を失い、ライフラインが止まり、震災後の不自由な生活を強いられた被災地の方々に何かお手伝いできないかという思いから、東北から遠く離れた岡山の若者



たちがボランティア活動に携われたのは、不思議な縁であり絆です。この絆を紡いでくださった岡山経済同友会の教育問題委員会（現 教育・社会貢献委員会）並びに特定非営利活動法人AMDAの各位に深く感謝致します。そして、参加する大学並びに大学生との橋渡し役を「大学コンソーシアム岡山」が務めさせていただきましたことは、社会貢献や教育的な視点からありがたい活動であったと感じ入っております。

「大学コンソーシアム岡山」は「時代に合った魅力ある高等教育の創造」と「活力ある人づくり・街づくりへの貢献」を目指して2006（平成18）年4月に設立されました。岡山県内の18大学・5短大等と岡山経済同友会、岡山県を正会員とし、高等教育機関の連帯と地域社会および産業界との連携推進を進めている組織です。従いまして、「被災地奉仕活動」の6年間、毎年約12大学から40人近くの学生たちが参加してくれた功績は本会の歴史に素晴らしい実績を残してくれました。

しかしながら、被災地にて経験された学生たちのボランティア活動は良くも悪くも大変な思いをされたと拝察致します。被災者への気遣いから始まり、自分の力で変えられないことも学ばれたでしょう。また、被災地からの学びだけではなく、共同生活によるチームワークの強みを身に付けられたと思います。何事にも代えがたい体験知と記憶の継承は、若者たちのその後の人生に大きな影響を与えたであろうと推察しております。今回、発刊される小冊子にはその経験知と人生観等、すなわち絆が綾なす10年間の重みが満載されることでしょう。

気候変動が激しくなってきた昨今、自然災害の発生数も増加すると思われます。常に古い絆を大切に、そして新しい絆を紡ぐ姿勢で、防災、減災、ボランティア活動に活躍する若者たちの育成に、今後も力を注ぎたいと考えます。

末筆ながら、犠牲になられた方々のご冥福といまだ道半ばの被災地の復興並びに被災された方々の安心安全をお祈り申し上げます。

経験が知識を^{ち え}智慧に昇華する

すがなみ しげる
菅波 茂 特定非営利活動法人AMDAグループ代表



「かわいい子には旅をさせろ」。「獅子は我が子を谷から突き落とす」。いずれも先人

による有名なことわざです。知識の限界を示唆しています。知識とはどこまで追求しても他人の経験です。

人生100年の時代が近いと言われています。充実した人生を送るためには生きがいの源となる意欲（問題意識）形成とそれを解決する知識を超えた智慧が必要と思います。そのためには良き経験を重ねることが大切です。

大学コンソーシアム岡山に所属する学生の方々が、東日本大震災復興のため、東北でボランティア活動をされる際、2011年から2015年まで毎年、AMDAが調整と現地受け入れを担当しました。さらには、2016年4月に発生した熊本地震被災者支援では、AMDAと共に活動をしてくれました。貴重な経験の場です。参加した学生の方々は被災地の現場で被災経験者から何を学び、どのような智慧を体得されたのでしょうか。本当に関心があります。なお、この次世代教育の機会を創^{つく}っていただいている岡山経済同友会にはこの紙面を借りてあらためて心から感謝いたします。

AMDAは1984年に設立されました。2006年に国連諸機関に政策提言のある国連経済社会総合協議資格を137番目に認定され、世界の32カ国に支部がある団体です。現在でも認定団体数は150未満です。国際赤十字委員会、国境なき医師団、Save the Children、ロータリーインターナショナル等々です。国内では4団体です。

過去37年間に59カ国において236件の災害被災者に対する緊急支援活動を実施することにより得た多くの貴重な智慧をコンセプトとして下記のようにまとめました。AMDAの「人道支援三原則」および「行動三原則」です。AMDAのアイデンティティーはこの6原則に象徴され、AMDAの人道支援活動はすべてこの6原則に基づいて組み立てられています。

最初に「人道支援三原則」を紹介します。

- 1) 誰でも他人の役に立ちたい気持ちがあります。
- 2) この気持ちの前には宗教、民族、文化の壁はありません。
- 3) 援助を受ける側にもプライドがあります。

次に「行動三原則」を紹介します。

- 1) 開かれた相互扶助。所属する共同体を超えて助け合うことです。
- 2) パートナリーシップ。困難を共に解決する人間関係です。
- 3) ローカルイニシアチブ。被災地の人たちの価値判断を最優先することです。

国際社会では「何故^{なぜ}あなたが私を助けるのですか」と問われます。人道支援三原則を明示すると受け入れてもらえます。どのように支援を実施するのか。行動三原則を説明するとさらに積極的に支援を受け入れてもらえます。支援を受け入れてもらって初めて活動開始です。

最初の記念すべき支援活動は1995年5月に発生したサハリン地震の被災者支援でし



た。私たちの医療チームが飛行機でユジノサハリンスク空港に着いた時、サハリン州政府の役人が言いました。「サハリンには医師や看護師など医療従事者や医薬品は十分にあります。医療支援は必要ありません」と。私たちの医療チームのリーダーが返答しました。「わずか4カ月前の阪神大震災の時にあなた方は神戸の被災者に緊急支援をしてくださいました。そのお礼として、医療支援だけでなく、どのようなお返しができるのかと神戸の人たちが私たちに調査をお願いしています」と。これに対して彼らはAMDAの医療チームを800km離れた被災地に飛行機で搬送してくれました。「相互扶助」のコンセプトが当時のロシアの鉄の門を開けた瞬間でした。ちなみに、AMDAの医療チームが北海道にある女満別空港からサハリンに向けて飛び立つ映像はCNNで25分間ごとに世界に放映されました。

6月には岡山空港から航空機で、8月には神戸港から船でサハリンの被災者が必要とする物資を届けました。岡山県民あげての温かいご支援には心からの感謝のみでした。それぞれの国や地域には文化があります。文化とは集団の価値判断ともいえます。日本の文化の大切な徳目として不言実行があります。一方、ユダヤ教、キリスト教およびイスラム教など一神教徒の文化が世界基準になっている現代の国際社会で行動する時の良し悪しを紹介します。最良は有言実行。2番は有言不実行。3番は不言不実行。最悪が不言実行。言とは神からの預言で普遍性を啓示します。実行するのは神の僕^{しもべ}である民です。

その実例は1990年の第1次湾岸戦争の時の自衛隊の派遣でした。国際社会への「何故に派遣か」説明がなく日本の行動が気味悪く思われたのが事実です。

多様性の共存とは相手の価値判断をお互いに尊重することから始まります。そのためには経験により知識を智慧に昇華させることが大切です。

大事なことを繰り返します。経験が知識を智慧に昇華します。「かわいい子には旅をさせろ」。「獅子は我が子を谷から突き落とす」。本当に味わい深いことわざです。

2011→2016

岡山経済同友会 被災地奉仕活動の記録

一般社団法人岡山経済同友会（岡山市北区厚生町）^{※注1}は2011年夏、岡山県内の大学生を集めて東日本大震災の被災地を訪問し、ボランティア活動を行った。震災からの復興に協力するとともに、学生に被災地の現状を知ってもらうのが狙い。同友会の教育問題委員会（現・教育・社会貢献委員会）が中心になり、企画した。国際医療ボランティア団体の特定非営利活動法人AMDA（本部・岡山市北区伊福町）と連携し、AMDAが支援の拠点としている被災地に学生ボランティアを送り込み、清掃活動などを行った。

岡山県内の大学・短大等で構成する「大学コンソーシアム岡山」が窓口となり、各大学・短大を通じて、学生を公募した。

学生の移動は全て、貸し切りバス。滞在中は被災地で宿泊したが、行き帰りの2泊は車中泊だった。学生の参加費は1万円で、車中2泊の間の食費は自己負担。事前研修があり、ボランティアとしての心構えを学んでから、出発した。この支援活動は2016年の熊本地震の被災地支援まで、6年間にわたり、毎年、継続した。

（注1）

2011年当時、正確には「社団法人岡山経済同友会」。一般社団法人に移行したのは、2013年4月から。

【活動年月日と主な派遣先】

2011年（平成23年）8月24日（水）～28日（日） 岩手県大槌町

2012年（平成24年）8月22日（水）～26日（日） 岩手県大槌町

2013年（平成25年）8月24日（土）～28日（水）

宮城県石巻市雄勝町、岩手県大槌町

2014年（平成26年）8月23日（土）～27日（水）

宮城県石巻市雄勝町、岩手県大槌町

2015年（平成27年）8月21日（金）～25日（火） 岩手県大槌町、山田町

2016年（平成28年）5月2日（月）～6日（金） 熊本県益城町

【参加した学生と大学・短大】 年、参加者数^{※注2}、大学・短大数^{※注3}の順

2011年	39人	11大学+1専門学校
2012年	36人	10大学・1短大
2013年	41人	11大学・1短大+1高校



2014年	38人	12大学・2短大
2015年	39人	12大学
2016年	24人	10大学・2短大

合計で参加した学生は延べ217人。男女の内訳は、男子112人、女子105人。

(注2)

参加者数は学生だけに限った数。スタッフや経済同友会のメンバーは入れていない。また、複数年にわたって参加した学生もあり、217人という合計は延べ人数。

(注3)

2011年は、大学コンソーシアム岡山に加盟していない「ベル歯科衛生専門学校」(現・朝日医療大学校)の学生2人も参加しており、同専門学校も加えた数としている。2013年は、AMDA高校生会から参加した高校生1人を加えている。

参加した学生の大学・短大名列記すると、大学コンソーシアム岡山の名簿順で、岡山大学、岡山県立大学、岡山商科大学、岡山理科大学、川崎医療短期大学、川崎医療福祉大学、環太平洋大学、吉備国際大学、倉敷芸術科学大学、くらしき作陽大学、山陽学園大学、山陽学園短期大学、就実大学、就実短期大学、中国学園大学、中国短期大学、ノートルダム清心女子大学、美作大学の計14大学4短大。

【片道の移動距離】

岡山市から岩手県大槌町までは高速道路経由で片道1,225km、所要約15～20時間(※リョービツアーズの高田昌弘氏による)

岡山市から熊本県益城町の広安小学校までは544km、所要6時間40分(※グーグルマップによる)

【募集の要件】

以下の9項目すべての要件に該当する学生を対象に募集した。

- ①大学コンソーシアム岡山加盟校に在籍する学生
- ②事前研修に参加できる学生
- ③心身ともに健康である学生
- ④AMDAと共同したボランティア活動ができる学生
- ⑤往復路およびボランティア活動中に事故などがあった場合、岡山経済同友会が全参加学生に加入するボランティア活動保険天災Aプラン^{※注4}の補償範囲内です了承いただける学生

(注4)

保険加入料は岡山経済同友会が負担した。ただし、同友会が保険に加入したのは2012年からで、初年度の2011年は各大学で保険に加入した。

6年間の軌跡

- ⑥学生班長の指示に従って行動できる学生
- ⑦保護者の承諾をいただき、同意書を提出できる学生
- ⑧期間中の水分補給や準備品を持参できる学生
- ⑨出発場所に時間厳守で、自力で集合できる学生

【事前研修】

ボランティアとして被災地に赴く学生には、事前研修をし、AMDAなどから、心構えを学んだ。その日程と会場は以下のとおり。

- 2011年 8月7日 岡山国際交流センター（岡山市北区奉還町）
- 2012年 8月6日 岡山商工会議所（岡山市北区厚生町）
- 2013年 8月8日 岡山県天神山文化プラザ（岡山市北区天神町）
- 2014年 8月7日 岡山シティホテル厚生町（岡山市北区厚生町）
- 2015年 8月10日 岡山国際交流センター（岡山市北区奉還町）
- 2016年 急な決定により、事前研修はなし

【当時の代表幹事と教育問題委員長】 敬称略

- 2011年度 代表幹事＝中島 基善、泉 史博 委員長＝原 憲一
- 2012年度 代表幹事＝泉 史博、萩原 邦章 委員長＝原 憲一
- 2013年度 代表幹事＝泉 史博、萩原 邦章 委員長＝原 憲一
- 2014年度 代表幹事＝萩原 邦章、松田 久 委員長＝原 憲一
- 2015年度 代表幹事＝萩原 邦章、松田 久 委員長＝原 憲一

※2016年5月の熊本地震の被災地派遣時は2015年度の体制。また、教育問題委員会は、2016年度から「教育・社会貢献委員会」と改称した。

【安全靴などの提供】

2011～14年度に参加した学生やスタッフには、同友会会員企業の丸五（倉敷市茶屋町）から、長靴や安全靴が提供された。



明日を担う若い人たちへ

たかぎ ふみお
高木 二三男（岡山県産業振興財団産業プロモータ）元岡山県立倉敷南高校長

2011年3月11日―。東日本大震災が発生したその日の昼下がり、私は仕事で東京駅近くのビルにいた。今まで感じたことがないような激しい揺れと頻発する余震に、言いやうもない不安感に襲われた。全ての交通機関がストップし、やむなく歩いて家路に向かう人々の群れの中に私もいた。神田あたりに来ると、専門学校の中にあるテレビの前に人だかりができていた。何があったのかと、のぞいてみると、画面に街をのみ込もうとしている津波の映像が流れていた。東北の出身なのだろうか、そばで見ていた学生がぼうぜんとして「私の街が…」とつぶやいた。翌日列車を乗り継いでやっとの思いで戻った岡山は、同じ列島に住みながらまるで別世界のように、いつもと変わらないまったりした情景に戸惑いを感じた。

その頃、私は仕事の合間に岡山大学キャリア開発センターでキャリアカウンセラーとして学生の就職相談にのっていた。東北で未曾有の出来事があったにもかかわらず、企業の採用試験は予定通り行われている。学生にアドバイスをした後、今回の震災に対する思いを尋ねた時に、学生から返ってきた言葉に困惑した。学生の多くは自分の就活に精いっぱい、そこまで考えられない、考えたことがないと言うのだ。同じ日本で、同世代の多くの若者が亡くなり、最愛の家族を失った人がたくさんいるのに…。なにか違うと感じた。岡山の次代を担う若者がこんな感性でいいのだろうか―。このことをきっかけに被災地への学生ボランティア派遣を思い立った。

当時、岡山経済同友会には、私が三井物産の岡山支店長だった時から懇意にしていた方がたくさんいらした。その縁で以前在籍していた教育問題委員会に、思い切ってボランティアの派遣を提案した。被災地の現状を肌で知り、悲しみに沈んでいる人に寄り添い、復興に向けた何がしかの手伝いをすることで、「当たり前の幸せの大切さ」や「これからの生き方」、さらには「この国の在り方」などをじっくり考えてほしい。その一念だった。

幸い原憲一委員長、黒住宗道副委員長から前向きなお話をいただき、大学コンソーシアム岡山の大崎紘一・岡山商大副学長、金森満廣・同友会事務局長と3人でワーキンググループを組織し詳細を詰めた。そして、中島基善・泉史博両同友会代表幹事のご了解を得て、8月24日から4泊5日、岩手県大槌町に39人の学生を派遣することができた。

学生たちのバスとは別に、同友会の方々と私は新幹線などを乗り継いで現地に向かっ

6年間の軌跡

た。5カ月たった被災地はまだ手付かずの場所が多かった。^{がれき}瓦礫の片付けを学生たちと一緒にしていた時に、小さな赤い靴が出てきた。「これを履いていた子は助かったかな」と誰か言った。こうした気持ちを抱いてくれただけでもこのプロジェクトは成功だと感じた。言い出しっぺなのに、参加したのが最初の一回だけの私に比べて、金森事務局長は5回全て若い学生たちと同じ夜行バスに乗って行動されたことに頭が下がる思いだった。

民間人校長として岡山県立倉敷南高で3年間生徒たちと過ごした際に、心掛けたのは「気づき」と「きっかけ」づくりだった。直接的にアドバイスをするのではなく、広く周囲を見渡し、自らで問題点を見つけて行動できるように、感性を磨いてほしかった。そのためにはさまざまな手法で「きっかけ」を与えていったが、学生ボランティア派遣はその流れから出たものだった。

江戸時代以降、島国で自然に恵まれた日本は、自らが国のかたちを変えたことはなく、一新したのは外圧と天災によるものだった。東日本大震災をきっかけに変えるべき点が多々あったにもかかわらず、先に延ばしただけの我が国は今、この二つが複合的に混じり合ったコロナ禍の中にいる。

コロナは大震災と同じような衝撃を日本に与え、終息した時には、おそらく私たちは様変わりした世界を見ることになるだろう。今までの延長線上での考え方が通じなくなるかもしれない。多くの若者があの東北を訪ね、被災された方々の話に耳を傾けることで、これからの自分の生き方やこの国の姿を考える「きっかけ」になると思う。

同友会とコンソが協働して

いじり 井尻	あきお 昭夫	(大学コンソーシアム岡山2010～11年度会長) 岡山商科大学学長
おおさき 大崎	ひろかず 紘一	(大学コンソーシアム岡山2011年度運営委員長、岡山商科大学副学長) 岡山商科大学特別顧問

2011年3月11日東日本大震災が発生し、10年が過ぎようとしている今日、(一社)岡山経済同友会(以下、同友会)と大学コンソーシアム岡山(以下、コンソ)とが協働して取り組んだ災害復興ボランティア活動について、活動の立ち上げ時の経緯をその時のコンソの会長が岡山商科大学の井尻昭夫学長であり、運営委員会委員長が大崎紘一(岡山商科大学副学長)であったことから当時の状況をまとめておく。



同友会では、2011年6月22日開催の教育問題委員会（現在の教育・社会貢献委員会）に、当時の中島基善、泉史博両同友会代表幹事、原憲一委員長、黒住宗道副委員長等出席のもと、岩手県上閉伊郡大槌町で復興支援ボランティア活動を行う計画が高木二三男氏（岡山県産業振興財団）より提案され、特定非営利活動法人アムダ（以下、AMDA）の菅波茂代表、岡山大学キャリア開発センターの三浦孝仁副センター長の意見を参考にして、8月中旬に同友会が主催で計画案を作成し、学生ボランティア40人程度の参加をコンソの協力のもとで早急に具体化することにした。

ワーキンググループを立ち上げ

7月6日開催の教育問題委員会で派遣期間は8月24日から28日までの4泊5日、派遣先は岩手県大槌町、ボランティア学生の募集はコンソを通して各大学に依頼する、学生の負担金は1万円、詳細はワーキンググループ（高木、大崎、金森・同友会事務局長）で進めることで合意した。7月8日ワーキンググループでは、ボランティア活動の内容調整、学生ボランティアの募集内容、申込先、事前研修会を8月7日に開催等の詳細を決めた。

そして、同友会中島、泉両代表、原委員長名でコンソ井尻会長宛てに「東日本大震災復興ボランティア学生募集について」の7月8日付依頼状が、計画書と共に送付されてきた。本来であればコンソとしては代表者会議を開催して決定すべき事項であったが、参加学生募集の締め切りが差し迫っているため、7月12日付で正会員16大学長宛てに、コンソ井尻会長の主旨説明文、同友会からの応募資料、行程表、学生の申込書、承諾書、学生の参加条件、参加費用、事前研修会の日時等をまとめ7月25日締め切りで学生の応募の依頼を送付した。募集人員は30～40人であり、達成できるのか不安であったが、会員大学の協力で7月25日までに112人の応募があり、人数調整をする必要が生じた。7月26日付で、応募のあった各大学最低2人とし、多数の学生の応募のあった大学には、上限の人数を示して8月1日までに再度参加者を各大学で決定するように依頼した。

参加を決定した学生には、8月7日の研修会に必ず参加すること、災害保険に必ず加入すること等の確認を各大学にお願いした。最終的にはコンソ11大学、1専門学校から39人が参加することを決定し、出席者名簿を同友会に連絡した。そして8月7日の研修会までに、同友会10人、AMDA 3人、5大学教職員6人、バスへの搭乗者、公共交通機関で現地での合流者が決定した。

8月7日岡山国際交流センター研修室で研修会を開催し、高谷昌宏教育問題委員会副委員長、井尻会長の挨拶に続き、AMDA 菅波代表、大政朋子氏によるボランティア

6年間の軌跡

活動の心構え、現地での活動、地域の方々との対応について、研修を受講することができ、災害ボランティアを行うための精神面での準備ができたと感じた。

8月22日コンソ運営委員会が開催され、原委員長から、同友会主催「東日本大震災復興ボランティア」の趣旨、ニュース特集としての放映について説明があった。大崎委員長より、8月24日より実施されるボランティア活動について資料に基づき説明がなされ、各大学への周知がなされた。

無事に活動を完遂

8月24日14：00林原モータープールで出発式が開催され、中島代表幹事、井尻会長との挨拶の後、学生の発声で一致団結し、学生39人と同友会会員が搭乗し、黒住団長のもと岩手県上閉伊郡大槌町での復興支援ボランティア活動が開始された。なお、大学の教職員は、別途公共交通機関で現地に行き宿舎で合流してボランティア活動に参加した。

8月28日全員無事にボランティア活動を終えて帰岡したので、活動の立ち上げ、運営はできたものと安心した。なおボランティア活動に参加した学生たちの現地での活動は、各大学や地域での報告会、大学祭等で発表され、大槌町の現状及びボランティア活動について具体的に多くの方々に伝えられたと感じている。

9月6日コンソの代表者会議が開催され、中島代表幹事が本活動の主催者として経緯と謝辞が述べられた。そして、本事業の経緯、活動内容について、大崎委員長より資料に基づき説明がなされた。

支援と協力のたまもの

第1回のボランティア活動の立ち上げについて、短期間で十分な議論もできずに始まりましたが、同友会のご支援と、各大学のご協力、学生のボランティア活動への参加意欲が非常に高く、スムーズに実行に移せたことに感謝申し上げるとともに若い学生たちの前向きな考え方には感動しました。このような（一社）岡山経済同友会、特定非営利活動法人AMDA、大学コンソーシアム岡山、学生の協力の下で、6年間、特に2016年の熊本地震の際の学生の参加申し込みは4月26日で5月2日出発、応募できる大学を12大学、定員を24人のみに限定した依頼でしたが、実施できたのは5年間の経験の積み重ねであります。

その後も日本各地で災害が発生し、特に岡山県内でも不幸にも西日本豪雨の大きな災害が発生し、これまでのボランティア活動の経験を生かして、各大学で学生、教職員がボランティア活動を行えたと考えています。



被災地で学生たちと学んだこと

くろずみ むねみち
黒住 宗道（6年間にわたる派遣団の団長）一般社団法人岡山経済同友会教育・社会貢献委員会副委員長

東日本大震災が発生した2011年（平成23年）から2015年まで毎年8月に計5回、そして熊本地震発生から2週間後の2016年5月に、岡山経済同友会が大学コンソーシアム岡山とAMD Aの協力を得て被災地に6年間にわたって派遣した大学生ボランティア団の団長として、私はほぼ全日程を同行参加しました。

被災地から遠く離れた岡山の大学生に、東日本大震災という大惨事を「^{ひとこと}他人事にさせてはならない…」という経済界の大人たちの“親心”が発端になり、県内の大学の協働体であるコンソーシアムがボランティアを募り、震災直後から被災地で救援活動を展開していたAMD Aが現地でのプログラムを計画し、“言い出しっぺ”の同友会が資金援助と同行世話役を担当したプロジェクトでした。

渋滞に巻き込まれ

大震災発生から半年も経たない初回は、岡山を出発して早々に事故渋滞に巻き込まれ、中国自動車道の西宮名塩サービスエリア（兵庫県）まで5時間を要した“試練”のスタートでした。はるか1200km先の岩手県上閉伊郡大槌町^{かみへいぐんおつちよう}まで、20時間のバス移動を覚悟して挑んだ最初の食事休憩が、日没後の西宮市であった学生たちの心中を想像してみてください…。結果的に、コース変更等の策を講じて目的地到着が2時間遅れで済んだことは担当スタッフの努力のたまものでしたが、当初予定していた午前中の活動はキャンセルせざるを得ませんでした。

そして、やっとの思いでいよいよ到着した被災地での作業は、被災した人々の傷んだ心を癒やしたいと願う地元の人々の求めで、河原で石を拾う“菜の花プロジェクト”でした。一行は事前学習会で「地元の人々の声を聞き、被災者の心に寄り添って行動すること」を徹底して学んでいましたから、依頼された作業を黙々と行って2時間足らずでミッション・コンプリート。大槌町から2時間離れた花巻市の宿に移動するため、初日の活動は早々に終了となりました。初年度から参加するほど気合の入った学生諸君が、やむを得ない事情とは申せ、初日の実働内容に物足りなさを感じたのは当然でした。

彼らの熱意が通じたのでしょう、翌日は犠牲者多数のため瓦礫^{がれき}や汚泥の撤去が大幅に遅れていた大槌湾近くの安渡^{あんど}地区の作業がボランティア・センターから依頼され、

6年間の軌跡

現役大学生ならではの若さ全開の献身奉仕の2日目となりました。

この安渡地区の“氏神さま”が、翌年の一行の宿泊先であり、研修会場となった大槌稲荷神社でした。宗教施設が避難所として機能した良き実例であったこの神社を拠点にして、2年目のボランティア団は活動を展開しました。

大槌中学校での大掃除

20時間の“夜走り”を物ともせず、一行は作業現場である大槌中学校に直行し、年内に解体される校舎の片づけを行いました。“大槌っ子”の思い出そのものである町内唯一の中学校は、1年半前に被災したまま時間が止まっていました。思い出の品々の仮設校舎への搬出作業と、最後のお別れ会のため的大掃除を終日行いました。そして、夕食後の研修は、翌日に行う被災児童たちとのバーベキュー大会をいかに盛り上げるかという班別ワークショップでした。仮設住宅での生活は薄壁一枚の隣人への気遣いの毎日で、仮設校舎に通う食べ盛りの中学生たちに「おなかいっぱい焼き肉をごちそうして元気づけよう…！」が2日目のミッションでした。ただ、1年前の被災の記憶も生々しい子供たちとどう向き合うか、自分の言動に最大の配慮をしながらの一日だったと思います。

石巻市雄勝町でも活動

3年目は、「東北地方太平洋沖地震」の震源地に最も近い宮城県石巻市雄勝町おがつでの作業と地元の人々との交流、そして被災した海岸沿いを視察しながら北上して大槌町に入り、山村地域で行った作業と研修が活動内容でした。

大槌町で聞いた「目の前の海がなくなって、海底がむき出しになっていた」、「真っ黒い大きな波の壁が押し寄せて来た」という迫り来る津波の恐ろしさとは異なる、震源地近くの雄勝町桑浜地区での津波被害は「海がいきなり盛り上がってきて、みるみるうちに水位が屋根の上までになった」という、話を聞いて初めて知る恐ろしさでした。旧桑浜小学校をコミュニティーセンターとして活用できるように土砂の撤去と草取りを集中して行った後、南三陸町、気仙沼、陸前高田、大船渡等を通して釜石から大槌町に入った移動が貴重な車内研修でした。

3年目の大槌町では、被災しなかった山村地域を訪れました。震災直後、海岸地域の人々ために備蓄食材を中心とした物資提供を惜しまなかった山村地域の人々は被災者扱いされず、支援・救済の対象にはなりませんでした。知られざる震災の苦しみを学んだことでした。



草取りに海岸の清掃

4年目も、初日は雄勝町で地元の憩いの場であった波板海水浴場の復旧のための整備と草取りを行い、夜は地元の人々との夕食交流会、翌日も早朝から草取りに汗を流した後に、被災地視察を行いながら北上して大槌町へ移動。地元の人々に、岡山からの毎年の来訪をことのほか喜んでいただき、吉里吉里海岸の清掃作業という活動もしっかり行いましたが、手作りの郷土料理をふるまってもらった昼食交流会が有り難くもうれしい思い出です。

また、この年の車中での“参加動機（往路）&体験感想（復路）発表会”（何せ、時間はたっぷりありましたから…）で実感したのが、4年目という時間の経過でした。「東日本大震災が起こった時は、まだ中学生だったからボランティアとか考えられなかったけど、大学生になったので、やっと参加できた」という1年生からの声が印象的でした。

5年目は研修が中心に

最終年は久々に大槌町に直行し、初日は隣町である山田町と2カ所の漁港での養殖のカキやホタテ貝やホヤの仕分けがミッションでした。いずれも「活動を再開した地元漁師を手伝う」という名目でしたが、仕分けしたホヤが夕食の食卓に上がっていたことに明らかなように、実際は学生たちに貴重な体験をさせていただく研修の場でした。

2日目は早朝から浪板海岸の清掃を昼まで行いましたが、その時に拾得した車のナンバープレートが、いまだ発見されていない犠牲者の自家用車の物であることが後日判明し、ご遺族からお礼の連絡があったという出来事がありました。

その後、東北各地で人々の心を癒やし、復興の原動力になった郷土伝統の祭りが地元で行われるということで、江戸時代中期から伝わる獅子舞や虎舞を見学して交流を行いました。研修が中心となったプログラムからも、そろそろ復興支援ボランティアのしまい時を実感した5年目でした。

悲嘆という立ちによる“2週間現象”

終了したはずの学生ボランティア団を急きょ編成して実施したのが、2016年の熊本地震に際しての活動でした。一行が被災地である熊本県益城町に入ったのは震災から2週間後の5月3日でした。私は、専門家から教えられて知るとともに実体験もあった「2週間後からの難しさ」を車内で学生たちに伝え、言動に細心の注意を払って作業しようと呼びかけました。

6年間の軌跡

「被災直後の非常事態（非日常）による緊張・興奮期から、過酷な現実を受け入れざるを得ない実感と心身の疲労困ぱい（日常化）による沈滞・消沈期への移行が2週間を目安に始まる」という、情味のない研究データに基づく指摘ですが、実際にボランティア活動を行った広安小学校で被災者からの理解を得にくいという現実を一行は経験しました。

校舎の廊下で掃除機をかけていた学生は「うるさい！」と怒鳴られ、共同喫煙所で休憩するスタッフは「ボランティアが占拠してたばこも吸えない」と文句を言われました。いずれも悲嘆という立ちによる“2週間現象”でした。もちろん、「仮設トイレの清掃中に、わざわざ部屋から出て来てお礼を言ってくれたのがうれしかった」という報告のような、被災者との心温まる交流もありました。

結びに

1年に1度の現地での2泊3日の作業と車中往復2泊というボランティア活動が、被害甚大な被災地の復旧に貢献した“仕事量”は微々たるものですが、はるばる岡山から訪問し続けた事実は、私たちの想像以上に被災地の方々に喜ばれ感激され感謝されました。それ以上に、参加した学生たちにとって被災地で学んだことは大きかったと確信しています。

私自身、“役得”による尊い宝物をいただいた体験になりました。東日本大震災から10年、そして熊本地震から5年を機に「記録・提言集」としてまとめられることになり、^{ざっばく}雑駁すぎる振り返りですが、6年間の全体像を把握していただければ幸いです。

末筆ながら、まだまだ途上にある被災地の復興と被災した人々の安心・安全、そして犠牲者の御霊の安寧を謹んでお祈りしますとともに、2016年を除く全行程を通して団長の私を支えて下さった元岡山経済同友会専務理事の故金森満廣事務局長の御霊に感謝の誠をささげます。



事務手続きと後方支援にあたって

やのぶ さおり
矢延 里織 大学コンソーシアム岡山 事務局 事務長

まず、東日本大震災ならびに熊本地震により亡くなられた方々のご冥福をお祈りしますとともに、そのご家族や被災された方々に心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

東日本大震災復興支援ボランティア活動の後方支援

2011年3月11日午後、岡山商科大学の会議室で見た衝撃的なテレビ映像が脳裏に焼き付いている。突如東北地方を襲った大地震により沿岸部で巨大な津波が渦巻き、車が濁流にのみ込まれながら激しく漂流する光景は惨憺^{さんたん}たるものだった。

直ちに義援金や支援活動が各所で発動される中、産学官連携組織「大学コンソーシアム岡山」（以下「コンソーシアム」）の正会員団体である社団法人岡山経済同友会（現「一般社団法人岡山経済同友会」、以下「同友会」）は、夏季休暇期間に被災地へ貸し切りバスで大学生を派遣する東日本大震災復興支援ボランティア活動を主催することを決定した。復興支援活動は、2015年まで5年間継続した。同友会会員企業によるブルーシートの提供や安全靴の支給、バスの段取り、別便で現地へ合流する教職員への切符の手配、時間調整や送迎等、震災復興への熱意とご尽力、現地へ向かう学生への心遣いに深く感謝を申し上げたい。

コンソーシアム事務局（2011年度は岡山商科大学に事務局を設置、2012年以降は岡山理科大学に設置）は、会長と運営委員長の指導の下、正会員校16大学から参加を希望する大学生と教職員を募集した。当時の会長校は次の通り。

2011年度 岡山商科大学、2012～2013年度 岡山理科大学、2014～2015年度 ノートルダム清心女子大学

同友会の代表幹事ならびに黒住宗道派遣団長、故金森満廣事務理事・事務局長と大原嘉奈子事務職員の指示を仰ぎ、協働事業を遂行した。同友会は教育問題委員会（現「教育・社会貢献委員会」）とワーキンググループを開催し、活動期間、行程、移動手段、作業内容、食事、宿泊先、ボランティア保険、費用と精算、参加希望学生の選定と周知方法、事前研修会等を協議する打ち合わせに参加した。コンソーシアム事務局は、学生と教職員の募集書類と掲示ポスター作成、応募と参加人数の連絡調整、参加申込書と保護者同意書、食物アレルギー調査、保険加入有無と靴サイズの調査書の回収、

6年間の軌跡

事前研修会の配布資料作成と研修会録画、ボランティア参加費の徴収、学生アンケート用紙と腕章を出発式で配布、学生が記入したアンケートと腕章を解散式で回収、アンケート集計結果と実施報告書の作成、同友会関係者と各大学へ御礼状の送付等、一連の事務手続き業務を行った。

ボランティア活動の参加は事前研修会に出席することが必須だったが、研修会に無断欠席した学生により定員を下回ったことは、参加応募が多数で抽選に外れた学生に対して申し訳なかった。ボランティア活動を希望する学生が看護研修、定期試験、就職面接等の理由で研修会に出席できない場合も辞退してもらった。2013年以降は学校行事や冠婚葬祭でやむを得ず研修会に出席できない学生に参加資格を与えるために、別日に講話研修を実施またはDVD視聴によるレポート提出の措置を取った。

保護者が海外在住により同意書を提出できない留学生は、保護者の署名のみ送付してもらった。現地で学生1人がけがをしたことがあったが無事だった。復興目的で学生運営部署の立ち上げを提案する熱心な学生もいた。ボランティア活動証明書が必要な学生は同友会事務局が発行した。

学生の参加申込書から志望動機や過去の参加有無を聴取し、事前研修会で決定する班別や同友会が主催した教育フォーラムへの参加依頼の参考とした。2013年11月23日山陽新聞社さん太ホールで「震災復興と岡山のボランティア学生たち」をテーマに「第13回岡山経済同友会教育フォーラム」が開催され、各大学4～5人以上の学生と教職員参加の動員を加盟校へ周知した。実習準備や授業、部活動等で参加できない学生が大勢いた。コンソーシアム事務局は、当日会場ロビーで3年間の復興支援活動写真の展示会を開催した。

5年間を通してボランティア活動に参加した延べ193人の学生（一部非加盟校の短期大学生、専門学校生、高校生を含む）をはじめ、一丸となり活動を共有した延べ24人の教職員に御礼を申し上げたい。参加大学の教職員数は次の通り。

2011年度 6人：岡山大学 教員2人、岡山商科大学 教員1人、岡山理科大学 教員1人、倉敷芸術科学大学 職員1人、ノートルダム清心女子大学 教員1人

2012年度 6人：岡山大学 教員1人、職員1人、岡山理科大学 教員2人、倉敷芸術科学大学 教員1人、ノートルダム清心女子大学 職員1人

2013年度 5人：岡山大学 教員1人、職員1人、倉敷芸術科学大学 職員1人、岡山理科大学 教員1人、ノートルダム清心女子大学 教員1人

2014年度 3人：岡山大学 教員1人、岡山県立大学 職員1人、ノートルダム清心女子大学 教員1人

2015年度 4人：岡山大学 教員1人、職員1人、山陽学園大学 教員1人、ノートル



ダム清心女子大学 職員 1 人

熊本地震復興支援ボランティア活動の後方支援

2016年4月14日と16日、熊本地方で巨大地震が発生し、同友会は特定非営利活動法人AMDA（以下「AMDA」）と共同で、熊本県益城町の早期学校再開のために清掃を行う大学生ボランティアを募集することを決定した。4月25日同友会事務局でワーキンググループに参加し、既に現地で救護活動を行うAMDAから被害の状況や被災者の精神状態を聞き、現地で注意する言動、清掃に必要な物、参加定員数等を協議した。

コンソーシアム会長校（就実大学）の指導の下、2015年の東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加した12大学から定員25人として4月26日加盟校へ学生を募集した。5月2日の出発まで準備期間が短いため、同友会の代表幹事から直接携帯電話で指示を受けた。学生の申込書と保護者の同意書はFAXで同友会へ提出してもらった。参加学生は10大学・2短期大学24人、教員1人（山陽学園大学）がボランティア活動に参加した。活動中幾度も震度3ぐらいの余震があり、現地の同友会関係者から随時状況報告のメールを共有した。

出発式と5月6日の解散式で参加学生のアンケート用紙を配布した。アンケート集計結果によると、ボランティア活動の在り方、被災者の心情を考慮した行動、やりがい等、現地で学生が感じ、学んだ経験は計り知れないことがくみ取れた。

最後に

学生は被災地の現状を目の当たりにしながら大学間で協力し合って作業に取り組み、被災者の経験談を聞き、地元の方と交流できたことは、かけがえのない体験となった。6年間の災害復興支援ボランティア活動は、学生自らの視野を広げ、生き方や社会との関わりについて深く考えるきっかけとなったに違いない。

貴重な機会を与えてくださった同友会、各大学のご理解と協力、懸命に取り組んでくれた学生たちに厚く御礼を申し上げたい。

災害対策は他人任せにしない

なかむら せいかん
中村 盛観（岩手県大槌町在住）元大槌町桜木町自治会長

※中村さんは、今回の派遣事業で、被災地の大槌町でボランティア学生を受け入れ、体験談を話されるなど、ご協力をいただきました。①被災地のいま、②県外の方へ訴えたいこと、③息の長い支援の在り方—の3点について、ご寄稿をいただきました。

現在、我々の周辺で起きている災害は「50年前には経験があったかないかは関係なく」、地球の地殻変動と温暖化等に起因する自然現象の振れ幅が拡大していることにあるようです。

2012年の年賀状に、私は「あの心配していた津波がついに来てしまいました…一瞬にして多くの友を失い、辛い日々がありました…地球上を借りて生きる我々の宿命です…どなた様もお互いにご油断なく…明けない夜はない…日はまた昇る…頑張っている！…」と書いて、互いに励まし合いました。

被災地のいま

大槌町は復興10年を迎えました。国や県、町の街づくり計画は、住民参加の計画策定から予算化、住民との合意形成まで、多数の全国からの応援職員の助けをいただきながら、当初はやや遅れ気味でしたが、7年後には計画に沿って実行され、街づくりが進められています。

交通関係の三陸海岸の鉄道は久慈駅～盛駅に三陸鉄道とJR線が合体し直通となり、一方、三陸沿岸の高速道路は、仙台から三陸沿岸各都市をつないで八戸までの縦の幹線と、内陸の東北道とつながる肋骨幹線も完成し、鉄道・道路とも大きく改善されました。

また、5,000戸以上、緊急で用意した仮設住宅も完成を経て入居、現在は役目を終えて解体、住民は自宅再建等のため忙しく、地場産業への求職者減少、一方で水産業はサケやサンマの不漁等があり、養殖サーモンや海産物の品種の変更など、いろいろ模索しており、沿岸漁業や地場産業の立て直しが急務となっております。

大震災を境に大きく変化したのは人口減少です。全国的な傾向でもあります。少子高齢化が急激に進んで若者が減少しています。加えて、新型コロナウイルスの全国的感染のまん延があります。幸い、大槌町内にはまだ感染者がおりませんが、復興が



進んで新しい街ができて商店が寂しく、今後、産業再生の大きなエネルギーが必要になるでしょう。そのためにも、一日も早い新型コロナの終息が望まれます。

県外の方へのメッセージ

私の立場ではなんといっても、災害対策は他人任せにしないこと。海拔が記された地図（例えば、国土地理院の5万分の1の地図）で、普段自分の立つ場所がどんな高さにあるのかを認識し、風害・水害・地震・津波の時に慌てずに避難し、ぜひとも命を大切にしてほしい。

息の長い支援とは

災害直後は、生活を元に戻すことが大きな支援となりますが、息の長い支援とはやはり、精神的な安定を確保するため、個人特有の物心両面、特に、心の問題を解消すること、そのために連絡と交流を継続することが効果的ではないかと考えます。



岩手県陸前高田市の「奇跡の一本松」＝2013年8月26日

2021年(令和3年)4月25日 日曜日

山陽新聞

東日本大震災10年 宗教界

祈りと行動 支援息長く

東日本大震災は宗教界に大きな変化をもたらした。被災地での幅広い活動は各地の社会的弱者の支援につながり、防災・減災などの観点から行政や地域との連携も進む。震災から10年、宗教者の支援の在り方とは。

顔見える関係

4月1日、震災直後に設立された「宗教者災害支援連絡会」(宗援連、島蘭進代表)の10周年シンポジウムがオンラインで開かれた。宗教者や研究者の有志による宗援連は、教団や立場を超え、オープンな情報交換を積み重ねてきた。島蘭さんは「情報交換が、それぞれの活動を横につないだ」。そんなふうに10年の活動を振り返った。

発表者がシンポで共通して訴えたのが「顔の見える」支援の大切さだ。

「寄り添い型のサポートに宗教者の役割があった」と語ったのは縁原祥哲さん。紛争の解決や人権、環境問題に取り組む世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会事務局長で、2011年に開設された仙台事務所で16年まで支援のために走り回った。その経験から「つながりが災害後の回復力を生む。顔の見える支援が重要」と強調した。

縁原さんはシンポに先立つ3月13日、仙台市の荒浜地区で「東日本大震災の追悼と鎮魂ならびに復興合同祈願式」を開いた。

悪天候の中、イスラム教から神道、仏教、キリスト教、新宗教の代表が、震災モニュメント「荒浜記憶の鐘」の前で祈りをささげる。あいさつに立ったWCRP日本委員会「災害対応タスクフォース」責任者の黒住宗道さんは、猛烈な

風に抗するよう、声の調子を上げた。「いつまで祈るかい。いつまでも祈るんです」

社会貢献活動

1982年生まれの黒住さんは黒住教(岡山市)の7代教主。2017年に就任した。黒住教は江戸時代、神職の黒住宗忠(1780～1850年)が立教した。明治期以降、国教的色彩を帯びた神社神道が祭祀を中心に国家神道としての道を歩む中、民間の神道教団として認められたのが黒住教

や金光教、扶桑教などで、こうした教団は教派神道と総称される。黒住教は社会貢献活動に熱心な教団として知られ、「人道援助宗教NGOネットワーク」(RNN)の事務局も教団本部にある。RNNは、国際医療援助団体「AMDA」(岡山市)と協働するなど、宗教を超え、祈りと行動で国内外の被災地支援に携わってきた。黒住さん自身、1995年の阪神大震災では50日間にわたる炊き出しを行ったり



東日本大震災犠牲者の追悼と復興祈願式。「荒浜記憶の鐘」の前で、神道や仏教、キリスト教、イスラム教の代表者が祈りをささげた＝仙台市の荒浜地区



漁港から海に向かって頭を下げる黒住教教主の黒住宗道さん(右端)ら＝岩手県大槌町

黒住教教主も被災地訪問 「縁を結び直した」

ど、社会的な困難に直面する人々を助ける活動を長く続けている。

東日本大震災では、岡山経済同友会が派遣した大学生ボランティアを引率、バスで一緒に岩手県大槌町に入り、5年連続で学生と共に汗を流した。今回、コロナ禍で1年ぶりに岡山を出た黒住さんは、荒浜地区での追悼の後、何度も通った大槌町に久しぶりに入った。

学生と雑魚寝

朝の漁港。海に向かって低頭した黒住さんは、犠牲者に黙とうし祈りをささげた。その後、慰霊祭のため大槌稲荷神社へ。神社は震災の翌年、学生と一緒に雑魚寝をした思い出深い場所という。

地元の人々を前にした黒住さんは「ここに泊り、片付けなどのボランティア活動に当たった。着物で来るのは初めて」と話した。祈りと、信仰をベースにした行動の双方を重視するのは「宗教者の信頼を伝える一人でありたい」と願うからだ。

歓迎の言葉を述べたのは、黒住さんと協働してきた大槌町の鍼灸師、佐々木寛奈子さん。経営する鍼灸院が津波で流され、自ら被災しながらも地元でケアを続け、熊本地震の際は車で現地に駆け付けた。「世界中の人に支えてもらって。困っている人がいたら助けられるようにしたい」。黒住さんは「何かあったらどうしているかと気遣う。そんな、お互いさまの関係が長続きする。多くの人と再会を果たした今回の訪問『縁を結び直した』『忘れられない』は結果であり、つながりがあれば忘れるはずありません(共同通信編集委員 西出勇志)」

2021年4月25日付 山陽新聞記事(共同通信社配信)

2011年 (平成23年)

8月24日(水)～28日(日) 岩手県大槌町へ

車中2泊、花巻温泉2泊の計5日間

宿泊場所は、岩手県花巻市の花巻温泉「ホテル花巻」※注1

【行程表】

- 8月24日(水) 14時、岡山市の林原駐車場に集合⇒岡山IC⇒山陽自動車道
⇒中国自動車道⇒名神高速道路⇒北陸自動車道／車中泊
- 8月25日(木) 北陸自動車道⇒磐越自動車道⇒東北自動車道
⇒大槌町7時30分予定が約2時間遅れで到着／花巻温泉(泊)
- 8月26日(金) 大槌町で支援活動／花巻温泉(泊)
- 8月27日(土) 大槌町を出発 東北自動車道⇒磐越自動車道
⇒北陸自動車道／車中泊
- 8月28日(日) 名神高速道路⇒中国自動車道⇒山陽自動車道
⇒林原駐車場6時30分着

(注1) 花巻温泉を宿泊地にしたのは、大槌町に近接した市町村の宿泊場所が
避難場所や復興支援の拠点として活用され、空きがなかったため。





出発式で学生を激励する中島基善・岡山経済同友会代表幹事（左端）＝2011年8月24日、岡山市・林原駐車場



「菜の花プロジェクト」で黙々と小石などを拾う学生たち＝2011年8月25日、岩手県大槌町



ヘドロの除去に悪戦苦闘＝2011年8月26日、岩手県大槌町



「チーム岡山」の学生39人を岩手県大槌町に派遣

かなもり 金森 みつひろ 満廣 元一般社団法人岡山経済同友会専務理事・事務局長

※本稿は、2011年8月発行の会報『おかやま経済同友』458号から転載させていただきました。
金森さんは2017年9月30日、ご逝去されました。

岡山経済同友会は東日本大震災の復興支援のため2011年8月24日、5日間の日程で、岡山県内11大学・1専門学校の学生ボランティア39人（男子25人、女子14人）を被災地の一つ岩手県上閉伊郡大槌町に派遣した。被災地の復旧・復興を促すのと、ボランティア活動を通して学生たちに生きること、働くとは何かを考えてもらうというもので出発式の後、1200キロの道のりをバスでスタートした。なお、同友会会員、大学教授ら9人も新幹線など別便で現地に向かった。

出発式は岡山市北区のJR岡山駅前、林原駐車場で行われた。中島基善代表幹事は学生たちに「被災地を自分の目でよく見て、これからの復興はどうあるべきか、日本の将来はどうあるべきかを考えてほしい」などとあいさつ。黒住宗道教育問題副委員長を団長に46人がバスに乗り込んだ。今回の大震災で被災地が福島、宮城、岩手県などに広がる中で大槌町を選んだ理由は町長が津波にのみ込まれて死亡、復興が大幅に遅れているのと、岡山に本部を置く特定非営利活動法人AMDAがいち早く現地入りし活動していることから「チーム岡山」として同町を支えるためだ。

一行は、高速道でトラック事故による交通渋滞に巻き込まれ予定より2時間遅れの翌25日昼前、大槌町に入った。車窓の両側には巨大な津波にのみ込まれ礎石だけになった住宅団地、鉄骨がむき出しになったオフィスビル、震災直後に発生した火災で焼けたただれた商店街、山の木々など無残な姿を車窓から見、息をのんだ。後片付けを急ぐ重機の音はするが、廃虚となった町は静まり返っていた。

菜の花プロジェクトに参加

一行は一足先に到着していた別働隊と合流、大槌町社協ボランティアセンターで手続きをした後、指示に従い、同町を流れる大槌川の河口から4、5キロさかのぼった河原で展開中の「菜の花プロジェクト」に参加した。大槌町人口の約10分の1に当たる1200人余りの死者・行方不明者の鎮魂のため、幸せを示す黄色い花を付ける菜の花を植えるプロジェクトで兵庫県の高校生、化学薬品メーカーのボランティアも多数参

加していた。サケがさかのぼってくるというこの美しい川には震災時、自動車、住宅の残骸が押し寄せていたというが、それは既に撤去されていた。学生たちは新聞やテレビでは伝えることのできない海水の生臭いにおいにとまどいながら1時間半、スコップなどで河川敷を掘り起こし、小石やガラス片を拾っていった。9月初めには別のボランティアにより種まき作業がおこなわれるという。一行はこの後、宿舎のある岩手県花巻市に帰った。

ヘドロを除去

翌26日は大槌湾近くあんどの同町安渡地区に移動、ボランティア活動を行った。ワカメなどの水産加工工場や住宅地が混在する同地区は6.4メートルもの防潮堤を乗り越えてきた津波で壊滅、ポツンポツンと鉄骨ビルが残り、漁船も陸地深く山際に打ち上げられ放置されていた。学生たちは終日、手作業で側溝などの泥出し、がれきの撤去、草取り作業を行った。廃材を運ぶダンプカーが行き交い、砂ぼこりが激しい。

ヘドロをスコップで掘り起こしていると時折、カチンと音がする。丁寧に掘り進むとコーヒークップ、皿、ぐい飲みなどの陶器、時にはカメラ、子供の習字道具なども出てくる。どの街にでも見られる穏やかな日常生活がここにあったが、それが突然襲ってきた津波によって無残にも断ち切られた現実一同言葉を失った。昼食前、全員で黙とうをささげ、午後も作業を続けた。

次に、大槌湾にぽっかり浮かぶほうらいじま蓬萊島(ひょうたん島)がある赤浜地区では、ワカメ養殖業者から、まさか高い防波堤を超えてくるとなどないと侮っていた津波にのみ込まれ、渦の底で何とか息継ぎができ、流され流されたところで高木につかまり九死に一生を得た体験談、さらに、生産設備を失い運転資金も乏しい中だが、あきらめず、今後も養殖にかける意気込みを聞いた。

大槌町の被災者と交流

27日は前夜駆けつけた原憲一・教育問題委員長も合流。AMDA調整員の元持幸子さんの紹介により、一行は3、4人のグループに分かれ、被災者の人たちの話を直接聴く“ミニホームステイ”を行った。14台の車にそれぞれ分乗、高台にのぼって被災地を遠望、つい2週間前まで利用していた避難所などを巡ったり、つらい記憶をたどり涙ながらに訴える被災者の生の声を聞いた。2時間後、公民館で大槌町の美しい海、山の素晴らしさ、人情の良さなどを話し合い、また、生活の安全・安心をどうすれば確保できるかなど町の将来像についても意見交換した。



学生たちは帰岡するバスの中で「被災地の人たちのために何か役に立つことがしたいと思っていたが、わずかだがやっとかなえることができた」「被災者の人たちは思った以上に明るく“前に進まなければ変わらない”という強い姿勢に心を打たれた」「被災地には雇用の場を確保することが重要で、それは現地の人に昼食を頼むという小さなことからでもできると感じた」「地震、津波、火事の怖さを岡山で身の回りの人に伝え、きっと来る南海・東南海地震に備えなければならないと思った」などと話し合った。

石井十次につながる慈愛の精神

はら けんいち
原 憲一（一般社団法人岡山経済同友会教育問題委員会委員長）RSK山陽放送会長

2011年、東日本大震災の年、岡山経済同友会教育問題委員会は岡山の学生たちを東北の被災地に派遣すると決めた。テレビやインターネットで被災地の状況は刻々と伝えられていた。スマートフォンの普及で、被災者が自ら撮影した津波映像は、おそらく人類が初めて記録した膨大な津波映像だったかもしれない。膨大な量の被災映像や被災証言が流されていたが、それは、あくまでメディアを通した2次情報であり、実際に起きていることの一部分でしかないのである。テレビやインターネットは、映像は伝えるが、津波が残した大量の泥の臭い、その泥の中に残っている小さな生活用品、さらに、ふと見せる被災者の一瞬の深い悲しみの表情などは、実際に現地に入らなければ分からない。やはり現地に行かなければ分からないのである。

若い学生さんが現地に行き、自分自身で感じたことを、友人に話せば、より強いメッセージとして伝わってゆく。東北地方だけでなく、日本列島は過去、大地震や大津波に何度も襲われてきた。若い学生にとっても今後、50年以内に大災害に見舞われる可能性は高い。そうした災害に直面したとき、過去の体験をどう生かしてゆくのか。

日本人は大災害の時でもパニックを起こさない災害先進国ともいわれている。2011年の東日本大震災の起きた夜にも、大勢の帰宅困難者は列を乱すことなく寒さの中でバスを何時間も待っていた。また、停電で真っ暗闇になった瓦礫^{がれき}の中で夜空を見上げ、なんと美しい星空かと思ひ、輝く星に失った家族を重ね、手を合わせたとも伝えられている。南海トラフによる、ここ30年以内の大震災の発生する可能性は、80%ともいわれている。

2011年、岡山経済同友会とともに東北の被災地を訪れた若者は1回目が39人で、6年間で合計すると200人を超えた。多くは、すでに30歳を超えており結婚して、父親や母親になっているかもしれない。参加した学生たちは、自分たちが東北の被災地の惨状を前にして感じたことを多くの友人や、両親に伝えたに違いない。また結婚していれば、妻や子供たちにも被災地の状況を伝えたかもしれない。たった一人のボランティア学生が何十人もの人に伝え、さらに現地の様子を聞いた人々も、災害の怖さを多くの人に話したに違いない。もしかすると、たった200人の学生たちは、1万人近くの人々に大震災の怖さや、備えについて伝えたかもしれない。これからの災害発生時に、その後のボランティア学生たちは、家族や、隣人を守る力となる可能性もある。

当時は、東北の被災地を訪問する若者は、それほど多くなかった。被災者側からすると、1,000キロ以上離れた岡山から数十人の若者がボランティアでやってくるというのは驚きでもあり、励ましでもあったに違いない。AMDAの菅波代表は、学生たちへの事前研修で、被災者にとって、もっともありがたいメッセージは「世界はあなた方被災者のことを見捨てません、決して忘れていません」というメッセージだと聞かされていた。岡山からの学生たちに被災状況を説明していたのは、現地の老人たちの役目だったが、若者を見る、老人たちの目に、明るい輝きを感じたのは私だけだったのだろうか。

100年も前の明治時代に、岡山に孤児院を開設した石井十次は、自ら東北に出かけ、冷害や災害で、親を失った子供たちを1,000人以上も集め、岡山に孤児院を開設した。岡山市民が協力して育て上げた孤児たちは、理髪業、建設業などの技術を身につけ、故郷に帰ってゆき、やがて東北の力になっていった。そうした岡山の慈愛の精神が今回の、岡山経済同友会の学生ボランティア派遣につながったのかもしれない。

人とのつながりを大切に

つねうら
常浦 あいり (環太平洋大学1年) 小学校教諭

2011年、私がボランティアに参加したのは大学1年生の時です。災害地の岩手県大槌町に行きました。大槌町に行ったときは、「何もないところだな」と思いました。しかし、バスから降りると鼻をつまみたくなるきつい臭いがしました。掃除をしている



と出てきたものは、茶碗や人形、写真などでした。ここで生活していた人たちがいたと確かに思わせる物がたくさん出てきました。それから立ち上がって周りを見てみると何もないはずなのにそこには、家の基礎が見えました。ここは津波に家がのめられたところか？　と思うとぞっとしました。

ボランティア活動中に現地の方の話を聞く機会がありました。「家族と連絡が取れなくて…」「津波に巻き込まれて、なんとか逃げ切れて今ここにいる」「ゴゴゴと大きな音がしたと思ったら遠くの海の底が見えて、そこから大きな津波がやってきた」等、想像をはるかに超える出来事がここで起きていたということを聞きました。

ボランティアをしていると現地の方が来てくださり、笑顔で「ありがとう」と差し入れを持ってきてくれました。震災があっても呑^{のん}気に過ごしていた私は申し訳ない気持ちになりました。東北の方たちはとてもつらい経験をしたにもかかわらず、いつも笑顔でした。そして、たくさん「ありがとう」と言われました。私たちが元気をあげないといけないのに、いつも笑顔にさせてくれるのは東北の方たちの温かい言葉や笑顔でした。

それから岡山に帰りなにかできることはないかと考え、いくつかのボランティアに参加しました。また災害コーディネーターの勉強にも行きました。東日本で起きたことは忘れてはいけない、私が見たこと聞いたこと体験したことを伝えていかなければならないと思いました。

ボランティアの経験を通して、毎年3月11日に東日本大震災のことをクラスの子どもたちに絵本を通して伝えたり、現地で体験したことを話したりしてきました。そんな中、西日本豪雨があり、勤務先の近くの川が氾濫し、多くの子どもたちが避難をしました。私と勤務先の子どもたちも自然災害は恐ろしいと感じる体験をしました。自然災害は怖いです。つらいこともたくさんあります。ですが、そんな中でもたくさんの人たちに助けられることがあります。東北で仲良くなった家族が「岡山のみんなにお世話になったから」とボランティアに来てくれました。私は、本当にうれしく思い、人とのつながりの大切さに気付きました。

自然災害は、予想しきれないことが多いです。ですが、災害が起きた時どのようなことが起こるかということを知っているとその後の行動が変わってくると思います。そのためにも私はこれからも自然災害のことについて伝えていきたいと思います。また、今まで出会った方々とのつながりを大切にし、助け合っていきたいと思います。子どもたちにも人とのつながりを大切にしていてもらいたいです。

風化させない

すみだ 炭田 ゆうや 優也 (環太平洋大学2～3年=2011年から2年連続で参加) 広島市立本川小学校教諭

「東北で、大災害！」

私がこのニュースを知ったのは、翌日2011年3月12日の早朝であった。当時岡山の大学に在籍していた私には、全く実感のないニュースであった。しかし、一日一日と時がたつにつれ、その甚大な被害に衝撃を受けたことを今でも覚えている。

同年8月、岩手県大槌町へ災害復興のため、学生ボランティアとして活動に参加した。テレビでしか分からない被災地の様子を実際に見たいという気持ちと自分の力が少しでも人の助けにならないかと考えて参加した。

災害発生から半年後の現地。第一印象は、「何もない。」だった。ここに本当に街があったのか？ と疑いたくなるような景色が目飛び込んできた。そして、次に感じたことは、なんとも言えない「匂い」であった。普段かぐことのない、ヘドロなのか、ガスなのか、、、不快な匂いであった。活動をしていく中、足元で見つかるのは、人々が生活をしていた証。写真や服や食器などが土の中、草の隙間から出てくる。ああ、ここに人々の生活があったのだなと実感した。人間は自然の前では、無力だと感じたことを覚えている。しかし、現地では、復興という希望をもった人々の姿や互いに助け合う共助の姿がたくさん見られた。自分にできることは何かを繰り返し自問自答したボランティア活動であった。

翌年8月、再度大槌町を訪れる機会をいただいた。ここでは、「再会」。人とのつながりを大きく感じた。1度目のボランティアで共に活動した現地の方々との再会に喜びを覚えた。私の中で、2度目のボランティアのテーマは「心に寄り添う」と決めていた。現地の方々の喜びや苦勞、悲しみなどに共感し、受け入れることに全力で取り組んだ。現地の中学生の笑顔や漁師の方の活気あふれる様子を目の当たりにし、逆に私が元気付けられたこともあった。被災して学んだことを「風化させない」ということを多くの方がお話しされていたことも覚えている。

私は現在、広島市で小学校教員として勤務している。私にできることは、この実体験を風化させないように、語り続けること。学習を通して、子どもたちに伝えていくことだと考える。近年、広島市でも多くの自然災害が起きている。その都度、今回のボランティア活動で学んだことを思い出す。どうすれば自然災害を防ぐことができるか、被害を最小限にとどめられるかを子どもたちと共に考えている。

私は、今後の自然災害による被害を最小限に食い止めるために、どこまで備えるこ



とができるかが重要であると考えます。現地の方が「近代文明さ、おごってしまったのかな」とおっしゃっていた。大型堤防や機械など文明は発達している。しかし、災害の発生時期や大きさなどは正確に把握することが難しい。どんな状況で発生したとしても、人間が冷静に行動できる必要がある。そのためには、正確な情報の収集や事前に避難場所・避難経路などを確認するなどして、日頃から災害に備える意識を高めることが必要となってくると考える。人間は災害に勝つことができない。命を一番に備える行動をとってほしい。

自助・共助を意識して

いしかわ かずき
石川 和樹 (川崎医療福祉大学3年) 消防士

2011年3月11日14時46分頃、東北地方を襲う大地震が発生しました。テレビでは津波の映像が繰り返され、車や家、逃げ惑う人々、そして街を飲み込む津波のスケールの大きさに衝撃を受けました。被災して困っている人のために何か力になりたいとの思いを抱き、学生に呼びかけたところ、100人余りの有志が集い、災害ボランティア団体を結成することができました。川崎医療福祉大学及び岡山経済同友会の支援をいただき、同年5月と8月の2度、被災地に災害ボランティアとして赴くことができました。被災地での活動を終えるまで、その過程の記憶、またご協力いただいた人々とのつながりは私の宝物です。

卒業して今、私は消防士として働いています。東日本大震災、災害ボランティアの経験から消防士を目指し、職務に目的を与えています。自治体を管轄する消防ですが、大規模な自然災害等が発生すれば、緊急消防援助隊として被災地に出動します。私は2018年の西日本豪雨で愛媛県八幡浜市に出動して、土石流に見舞われた一家の救助活動に入りました。到着してすぐ『早く土砂の中から出してあげたい』その一心で掘り続けました。残念ながら、その一家はお亡くなりになっていました。残された親族の方々は泣き崩れました。その悲しみが私に流れ込んできて、涙が止まらなくなったことを今でも覚えています。大学生のときに見た被災者の復興に向けた強い表情とは違い、災害発生直後は見ていられないような弱々しい表情でした。自然災害は一瞬で人の人生を奪い、残された人の人生をも狂わせます。

2021年、またしても線状降水帯がもたらす豪雨により、静岡県熱海市で土砂災害が発生しました。それから立て続けに西日本各地でも土砂災害警戒情報が頻繁に発表されています。地球温暖化の影響でしょうか、土砂災害の頻度は確実に上がってきています。

自助・共助・公助ということばがあります。自助は自らを助ける。共助は地域住民で助け合う。公助は消防、警察、自衛隊、自治体が助けるという意味です。防災意識の高まりから、防災備蓄や避難持ち出し品の準備、避難経路の確認等をされている家庭は多くあると思います。大規模な自然災害が発生した場合、公助にあたる機関の対応はどうしても遅れてしまいます。自助が整ってきている今、共助を意識してみてください。隣人に避難を促す、この行動だけでも命を救います。

私の願いは、多くの人に災害から自分や家族を守る力を身につけてほしいということです。父親となった今、我が子を、さらには次世代の大切な命を自然災害で失いたくはありません。災害はいつ起こるか分かりません。『備えあれば憂いなし』簡単なようでなかなかできない、生きる上で大事な教訓だと思います。

何事も小さなことから

みやまえ ゆきこ
宮前 祐喜子 (旧姓：小川) (岡山大学3年) 岡山市立芳泉中学校養護教諭

岩手県大槌町へ震災復興支援ボランティアとして参加した。当時のことを振り返り、自分が今心掛けていること、今後自然災害が起こったとき最小限に被害を食い止めるために自身が考えていることをここに記したい。

①被災地でのボランティア活動では、大槌町菜の花プロジェクトの一環として大槌川の河川敷の整備をした。菜の花を植えるための下準備として、土の中の石やガラスなどを探して集めた。終わったときに「きれいになった」というよりも「何もなくなってしまった」と感じた。しかし、ここに菜の花が植えられ咲くと後ろにそびえたつ山とのコントラストでとても美しい景色になるだろうなと思った。またいつかここへ戻ってきて菜の花畑を見に来たいと思った。

住宅の中に入り込んだ泥の撤去や清掃などをした。清掃をしていると、割れたお皿やコップ、泥まみれの衣類やカバン、思い出の写真やプリクラなどが出てきて、胸が



痛くなった。『あの瞬間』までは、ここでいつも通りの日常があり、人が暮らしていた。それを一瞬にして奪い去っていった自然の怖さを思い知らされた。

しかしボランティア活動中、地元の人に「ありがとう」「助かった」と笑顔で声をかけてもらう場面が多くあった。休憩時間に地元の名産品のおまんじゅうを食べたときは涙が出そうになった。被災してつらく悲しい状況にある人たちが、ボランティアとしてきている自分たちにここまで良くしてくれて、感謝の言葉をかけてくれる。被災者の人たちは強いな、(心を強く持たないといけなかったのかもしれないが) 私もそんな人間になりたいと思った。

②何事も小さなことから、自分でもできることから、と感じている。そのため、物理的な部分でいうと、非常用の防災バッグを家族分準備している。自宅の備蓄庫にも何かあったときに2週間は家族で過ごせるだけの準備をしている。

また子どもと近所の散歩をするときにここは危ない、ここに逃げるなど有事があったときにどうしたらいいのか、話すように心がけている。

③自分の住んでいる地域のことをよく知ること、地域の人との関わりをもつこと、何かあったときにどうするか家族と共有することが大切だと感じる。

地域を散歩したり、マップを見たりして自分の地域のことを知り、何かあったときにどうするか自分で考え、家族と共有しておくことを、何かの節目や思い出したときにしておくことは災害時、十分役に立つと考える。またコロナ禍で地域の行事が減っているが、地域の清掃活動や行事に可能な範囲で参加し、地域の人と顔見知りになることも大切なことだと思う。特別な何かをしなくても、日々自分たちがしていることにプラスアルファで何かを付け加えて取り組んだり、災害が起こったら…と別の視点から物事を意識したりすることが大切なのではないか、と考える。

「忘れちゃ駄目なんだよ」

もりわき だいろく
森脇 大陸 RSK山陽放送 報道部記者

2011年3月11日…被災した東北地方から遠く離れた岡山、香川の地で記者活動をし

ている私にとっても仕事への向き合い方などが大きく転換した日です。震災が発生した翌日から私はこれまでに5度にわたり岩手、宮城、福島 の3県取材しました。そのうちの一つが岡山経済同友会の学生ボランティアへの同行取材ですが、その取材中に今でも忘れることができない一つの言葉があります。

被災地での取材活動は被災した人への取材が中心となります。押し寄せる津波を見た人、家を失った人、最愛の家族を奪われた人…カメラを前に当時の様子を語ってくれる人たちに私は自身の心が痛む感覚がありました。『思い出したくもないことを無理やり思い出させているのではないか…』。もちろん伝えることの使命を感じてこの場所に来ていますが、その一方で相手にさらなる傷を負わせているのではないだろうか？常にその葛藤がありました。

2011年8月、学生ボランティアの同行取材時に現地を案内してくれた岩手県大槌町の男性が移動する車中で、ある思いを打ち明けてくれました。「ボランティアと話をする機会がたくさんあるが『思い出したくないでしょ？ だから聞かない』と言われる」「自分自身の考えだけど…発信したい。忘れちゃ駄目なんだよ」

もちろん全ての被災した人々が同じ思いだというつもりはありませんが、少なくとも伝えてほしいと思っている人がいる。それならば自分は少しでもその思いに寄り添って届ける役割を担えるようにできることを考えよう。震災から10年が経過しましたが、この思いは災害報道だけでなくあらゆる取材に関して私の大事な指針となっています。

冒頭で被災地に5度訪問したと書きましたが、実は2012年以降は1度も足を運べていません。恥ずかしながら少しずつ記憶が薄れていっているのも事実です。当時ボランティアに携わった人も少なからずそのような感覚はあるのではないのでしょうか。現地に立ったものしか分からない空気を感じ取り、さまざまな光景を目に焼き付けた者ですらそうなのですから、多くの人にとって東日本大震災は過去の出来事になりつつあるのではないのでしょうか。

ここ数年、日本では大規模な自然災害が多発するようになりました。しかしその多くの場所は過去に同じような災害を経験しその記憶や記録が残されています。南海トラフ巨大地震の発生確率も高まっているなか、さまざまな記憶を呼び覚まし未来につなげていく…それが災害の被害を最小限に食い止める一番の方法だと私は思っています。



岩手県大槌町まで片道1,225km、所要約20時間

たか た まさひろ
高田 昌弘 (株)リョービツアーズ 岡山支店観光事業部 マネージャー

(株)リョービツアーズにて、自治体・組織団体・大学・一般企業等への旅行営業いたしております。

(一社)岡山経済同友会様の営業担当者として、2011年の東日本大震災ボランティアの旅行企画ならびに2013年からの3年間は、添乗員として学生さんと一緒に現地に赴きました。

当時のエピソードを思いつくまま箇条書きにいたします。



2011年5月頃、岡山経済同友会事務局よりボランティア派遣の方法についてご相談をいただいた。JRや航空機など所要時間や費用等を検討し、現地での移動等を勘案した上で全行程、貸し切りバス利用となった。

大型バスの座席が、11列45席のため、乗務員の仮眠用、事務局、添乗員席を除く40席で、大学コンソーシアム岡山により、ボランティア学生を募ることとなった。^(注1)

東北までのルートは、混雑する首都圏を避け距離的にも短くなる、名神、北陸、磐越道回りで東北に至る行程となった。^(注2)

岡山から岩手県大槌町まで、片道1,225km、2～3時間ごとにサービスエリアで休憩しながら所要時間は約20時間、通過県は片道11県に及んだ。^(注3)

AMDA様により現地受け入れがなされたが、主な現地行程は、宮城県石巻市に入り、津波で被災した海外線を約150km北上、南三陸、気仙沼、陸前高田、大船渡、釜石から大槌に至るまでの各地の震災遺構を見学するとともに、自治会や復興商店街の代表者と交流をした。

宿泊は、震災当時避難所だった各地の自治会施設や、青少年の家、また、体験で仮設住宅へも泊まった。

ボランティア活動は、2011年第一回の派遣時、もうすでに、自衛隊等の出動によりある程度整理されており、がれきの撤去などはなかった。ボランティアの目的は、震災を風化させないことで、現地の人たちが危惧していたのは、忘れ去られることだった。そのため、仮設を訪ねての交流や、廃校の校舎や海岸の清掃が主な活動だった。^(注4)^(注5)

長い移動の車中の過ごし方として、事務局からの提案で、全員一言ずつ、往路はボランティア志望の動機や震災当時は何をしていたかを。復路は、実際に現地の様子を見て、人々と交流しての感想、そしてこれからどう生かしていくかの発表をした。当時の金森満廣・岡山経済同友会事務局長が、その一人ひとりに丁寧にコメントしていたのが印象的だった。恒例となり、毎回実施された。

せっかく東北まで来ながら、ボランティアのみで何の観光もしていない学生たちに、復路、金森事務局長からサプライズで、世界遺産・中尊寺の見学を実施した。現地ガイドによる金色堂の説明やお土産を購入する時間もあった。

2012年4月、関越道ツアーバス転落事故を受け、国道交通省の夜間高速バスの運行規制が強化された。

バスの値引き競争が一因ともいわれ、バス代の適正価格指導も行われた。ボランティアバスも直接影響を受け、バス代が1.5倍近くに高騰した。また、乗務員の運転時間も厳格化により、1日15時間を超えての運転は不可となり、最終日には自前のバスが足りながら、現地でも貸し切りバスを手配せざるを得なくなった。^(注6)

2015年、岩手陸中海岸青少年の家で、被災された方に参加いただき体験談を聞いた。福祉系の先生がお話しされたが、話の途中で口ごもった時「私も、当時のことを忘れた…」と一言。人は過去の災害を忘れるものだと感じた。また、海岸線の国道45号線には、いたるところに「過去の津波浸水区域」の看板を目にする。他に各地に石碑もある。にもかかわらず、人は海岸に移り住む。まさに震災は忘れたところにやってくる。

夏の真っ盛り、活動中の熱中症対策として参加者への水供給が欠かせない。バスのトランクに水満載の大型のクーラーボックスを積み込み、おひとり1日2本を目安に、現地調達も含め約400本、15ケース以上を手配した。水配りが添乗員の大事な任務だった。



(注1)

バスの定員を超えて乗車できない、大学の先生、同友会会員企業の方々は、別動隊として、JR、航空機等で現地合流となり、現地での移動は別途ジャンボタクシーを手配し同一行動をした。



(注2)

2014年7月若狭道全通により、以後は舞鶴若狭道経由となり京阪神地区の混雑地域も回避した。2011年第1回の派遣時には、山陽、名神の大渋滞により、神戸まで4～5時間を要した。

(注3)

2013年の復路は、交通規制のため関越、中央道周りとなり復路の通過県は16県になった。

(注4)

2014年、石巻市波板海水浴場の整備（草抜きや漂流物の撤去）をした。地元の老人会の方々がお礼に茶菓をふるまってくれた。冷たいお茶とともに、じゃがいも（きたあかり）をふかした素朴な味がとてもおいしかった。

(注5)

2015年8月23日、山田町の吉里吉里^{きりきり}海岸を清掃した際、学生たちが自動車のナンバープレート^{ナンバープレート}を海の中から拾った。それを大槌町の交番に届けたところ、所有者は海岸の近くに住む人で、家も津波で流され、車は翌年10月車検切れの状態になっていることが判明した。その1週間後、釜石警察署から、所有者の電話番号がわかったので自宅へ連絡したところ家族につながり、「本人は車もろとも津波で流されいまだに発見されていない。せめてナンバープレートだけでも帰ってきた。お礼を伝えてほしい…」との電話があった。

(注6)

大槌町の有限会社・城山観光のバスを借り上げた。同社も被災し、保有していた貸し切りバス10台を津波で失っていた。運送業、タクシー事業もしていたので、観光バス事業から撤退するつもりであったが、くしくも、両備バスが被災した事業者にバスを寄贈した会社であった。当日は、専務自らかつての両備の車両だったバスを運転してきた。「震災の春、両備さんからバスが引き渡される日。山の上の避難所にいると、大型バス3台が連ねて走ってくる勇ましい姿が見え、思わず涙があふれた。バス事業再開の背中を押してくれた」

山陽新聞

2011年(平成23年)11月24日 木曜日

岡山経済同友会主催の教育フォーラム「震災復興と岡山の大学生」が23日、岡山市北区柳町の山陽新聞社さん太ホールで開かれた。同友会は8月下旬、県

被災地支援 取り組み紹介

岡山同友会がフォーラム



被災地の復興に向け、現地での取り組みなどを紹介したフォーラム

内大学生らをボランティアとして東日本大震災被災地の岩手県大槌町に派遣。派遣の企画に加わった森田潔岡山大学長やボランティアに参加した環太平洋大

2年炭田優也さんらが登壇し、現地での取り組みなどを紹介した。約150人が聴講。

パネルディスカッションには森田学長、炭田さんのほか、黒住宗道黒住教副教主、高木二三男県産業振興財団産業プロモータ、石川康晴クロスカンパニー社長の5人が参加した。

黒住副教主と炭田さんは「ヘドロの下からは衣類や写真が見つかり、突然壊された被災者の日常生活を実感した」と話し、森田学長は「被災地に行かなければ本当の惨状は分からない。現場を見ることは座学よりはるかに大切だ」とした。石川社長は被災地の雇用を支援するため、104人に内定を出した取り組みを紹介した。

フォーラムの様子は12月4日午前10時から1時間、山陽放送のラジオ番組で放送される。(難波孝光)

2年炭田優也さんらが登壇し、現地での取り組みなどを紹介した。約150人が聴講。

パネルディスカッションには森田学長、炭田さんのほか、黒住宗道黒住教副教主、高木二三男県産業振興財団産業プロモータ、石川康晴クロスカンパニー社長の5人が参加した。

黒住副教主と炭田さんは「ヘドロの下からは衣類や写真が見つかり、突然壊された被災者の日常生活を実感した」と話し、森田学長は「被災地に行かなければ本当の惨状は分からない。現場を見ることは座学よりはるかに大切だ」とした。石川社長は被災地の雇用を支援するため、104人に内定を出した取り組みを紹介した。

フォーラムの様子は12月4日午前10時から1時間、山陽放送のラジオ番組で放送される。(難波孝光)

2年炭田優也さんらが登壇し、現地での取り組みなどを紹介した。約150人が聴講。

パネルディスカッションには森田学長、炭田さんのほか、黒住宗道黒住教副教主、高木二三男県産業振興財団産業プロモータ、石川康晴クロスカンパニー社長の5人が参加した。

黒住副教主と炭田さんは「ヘドロの下からは衣類や写真が見つかり、突然壊された被災者の日常生活を実感した」と話し、森田学長は「被災地に行かなければ本当の惨状は分からない。現場を見ることは座学よりはるかに大切だ」とした。石川社長は被災地の雇用を支援するため、104人に内定を出した取り組みを紹介した。

フォーラムの様子は12月4日午前10時から1時間、山陽放送のラジオ番組で放送される。(難波孝光)

2011年11月24日付 山陽新聞記事

2012年

(平成24年)

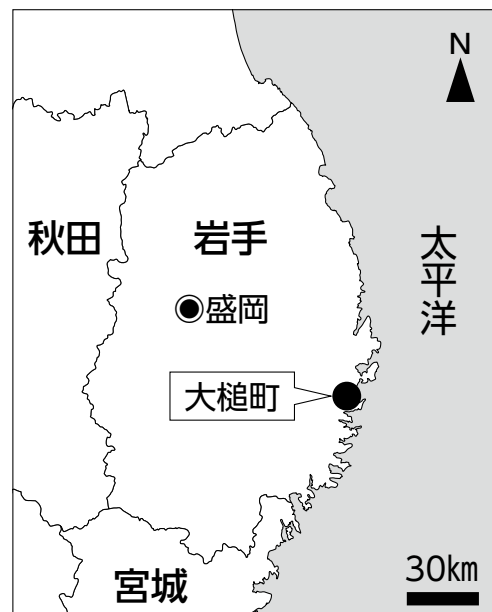
8月22日(水)~26日(日) 岩手県大槌町へ

車中2泊、神社2泊の計5日間

宿泊場所は、大槌町の大槌稲荷神社(寝袋泊)

【行程表】

- 8月22日(水) 13時30分、岡山市営駅南駐車場集合⇒14時30分、出発式⇒岡山IC⇒山陽自動車道・三木SA(兵庫県三木市)⇒名神高速道路・多賀SA(滋賀県多賀町)⇒北陸自動車道・尼御前SA(石川県加賀市)⇒北陸自動車道・蓮台寺PA(新潟県糸魚川市)／(車中泊)
- 8月23日(木) 北陸自動車道・黒埼PA(新潟市)⇒東北自動車道・前沢SA(岩手県奥州市)⇒釜石自動車道・東和IC(岩手県花巻市)⇒大槌町9時30分着⇒旧大槌中学校の片付け／大槌稲荷神社(泊)
- 8月24日(金) 大槌町で支援活動 大槌稲荷神社(泊)
- 8月25日(土) 大槌町を出発 東和IC⇒平泉⇒東北自動車道・国見SA(福島県国見町)／(車中泊)
- 8月26日(日) 多賀SA⇒三木SA⇒岡山IC⇒岡山市営駅南駐車場8時30分着





事前研修会であいさつする
原憲一・教育問題委員長
(右端) = 2012年8月6
日、岡山商工会議所

被災した大槌町安渡地区 =
2012年8月23日、木村宏
氏提供



丸五から提供された安全靴
= 2012年8月22日



自分の住む地域についてよく知る

かたおか だいすけ
片岡 大輔 (吉備国際大学大学院1年) 会社員

東日本大震災から約1年半が経った2012年8月22～26日にかけて、岩手県大槌町へ震災復興支援学生ボランティアとして参加した。当時のことを振り返り、派遣で学んだことや思い出、体験を踏まえ心がけていること、今後の自然災害で被害を最小限に食い止めるための提言を話したい。

被災地を訪れ、学んだこと

大槌中学校でのボランティア活動では、被災した校舎の中に入り、砂ぼこりの多さに驚いた。ボランティア作業では、保健室から棚や本、掲示物を運び出した。「津波で浸かった備品など、1年半も経ったのだから、生徒たちの手で早く処分してしまえば良いのに」と思いながら作業をしていたところ、校長先生が「備品一つひとつには、生徒たちの思い出がたくさん詰まっており、なかなか片付けられない」と話していた。その言葉を聞き、私たちが現地を訪れている意味を改めて理解した。当初、「気軽に被災地ボランティアに参加できる」と軽い気持ちで臨んだ。しかし、ボランティア活動の中では、それまでの考えが改まる体験がいくつもあり、実際に現地の人の話を聞いたり、感じたりすることの大切さを実感した。

ボランティアに参加して生かされていること

この震災復興支援学生ボランティアに参加して、被災地で見たことや聞いたこと、感じたことを周囲の人に伝えたいという意識を常に持っている。現地で涙ながらに話される女性の様子から、つらいにもかかわらず、話してくださったその思いを無駄にしたいかと思っただけだ。しかし、実際のところ、普段の生活の中では、このボランティアでの体験を周囲の人に話す機会がなかなか無い。被災地での実体験を伝えるという思いの一方で、このボランティアでの体験から、私の中では現場で現物を見て、現実を認識したうえで、問題解決を図るということを、モットーとしている。それは、仕事においても山陽新聞の読者投稿欄でも生かされている。

今後の自然災害で被害を最小限に食い止めるための提言

地震だけでなく、大雨や台風による災害、大雪による孤立、猛暑による熱中症など毎年のように自然災害が日本を襲っている。これらの被害を最小限に抑えるために、自分の住む地域についてよく知ることが重要だ。

2018年7月の西日本豪雨では、私の住む倉敷市真備町で増水した川の堤防が決壊し、町は濁流に呑み込まれ、大きな被害が出た。真備町を東西に走る井原線の吉備真備駅の橋脚には、西日本豪雨が起きる以前からオレンジ色の印がつけられている(写真)。「このオレンジのラインは何だろう」と疑問に思っていたが、昔、大雨で高梁川が決壊し、真備町がこのラインまで浸かったという印であることを、西日本豪雨を契機に知った。現在、そのオレンジのラインは西日本豪雨での浸水の深さを示している。

また、私が通った真備町立岡田小学校(現・倉敷市立岡田小学校)の授業では、町の歴史について学び、その中で昔、大雨で高梁川が決壊し、町が浸かったことを勉強した記憶がある。西日本豪雨では、井原線のオレンジのラインも、小学校で学んだ真備町の歴史についても生かされず、大きな被害が出た。このような被害を最小限に抑えるためには、自分が住む地域について、建造物や歴史など、さまざまな視点で理解し、それを安全安心な日々の生活に生かすことが大切である。



井原線の高架に記された横線＝2018年9月17日、倉敷市真備町箭田



情報と記憶を残す

ひさみ しんきち
久見 新吉 (吉備国際大学2～3年=2012年から2年連続で参加) (株いわま黒板製作所勤務)

「忘れてはいけない」「伝えなければならない」

過去に経験した苦難に対して、このような考え、結論が出されるのは、未来への投資という側面があります。教訓を糧に未来の被害を小さくするために情報を残し、伝えることは重要なことです。これは周知の事実でしょう。

私はこの原稿の寄稿をきっかけに、10年前に起こった東日本大震災の画像、映像を含めた資料のアーカイブを検索しました。インターネットが普及し、誰でもアクセスできる資料のアーカイブ化が世間の注目を浴び始めて久しいですが、果たして官民ともに十分な量の情報を系統立てて整理し公開しているサイトは見つけれませんでした。

忘れず、伝えるためには情報を残し、整理する必要があります。しかしそれには膨大な労力を必要とします。私が学生ボランティアに参加し、その直後に強く必要だと感じた「情報を残す」ということは多くの人の賛同を得られるでしょう。しかし、誰が、どうやってという視点が欠落しており他力本願だったと言わざるを得ません。

国や自治体をはじめ、有志の組織、個人に至るまで、情報を伝え残すための活動されている方は大勢いらっしゃいます。しかし一般に広く利用される前提のアーカイブは更新が絶え、なおも断片的な資料の陳列がなされるにとどまっています。

私は、つらい過去から目を背けたいという気持ちは尊重されるべきだと思います。忘れるということは前に向かって進むために必要なことのひとつとも考えています。しかし、振り返り手を伸ばせば手に入る場所に記憶を残すということの必要性をいまだに感じています。ある偏った見方をすれば、普段誰に見られるでもなく、後ろ向きな「過去」にフォーカスした、アーカイブという完成しない膨大な資料の山に向き合い続けることは想像を絶します。

一方で、未来に目を向ければ、人が生きていくうえで欠かせない衣食住に関しては比較的容易に言語化、数値化ができます。南海トラフではマグニチュード8から9の規模の地震が今後30年以内に70%から80%の確率で発生すると予測されています(NHK「災害列島 命を守る情報サイト」より)。さまざまなシミュレーションが行われていますが、いずれも差し迫った現状を楽観視できないものばかりです。しかし、ハザードマップの見直しや非常食料の備蓄、避難所の環境整備などは徐々にではあるものの整備が進んでいます。

その過程の中で、ふと疑問に感じることはないでしょうか。例えば家を建てる場所

にどんな危険があるのか。家庭で備蓄する道具、食料に不備はないか。避難所となる施設の環境整備は十分か。もし今ここで地震が起きたらどう逃げる？ 家族との連絡手段は？

緊急時でなかったとしても、考え、行動を決定するのは意外にも個々人であることが多く、手掛かりがなければ頼りになるのは自分や周りの人間の想像力ばかりです。そこに1枚の写真があればどうでしょうか。それは人間の想像力をはるかに飛躍させるものとなりえると私は考えます。

私が学生ボランティアに参加し、被災地に派遣されたのは震災発生から1年と5カ月がたった2012年の夏でした。学校からボランティア参加を募る旨の通知があり、参加を決意しました。

夜通しバスに揺られ、活動の拠点となる岩手県大槌町に到着すると、津波の被害にあった住宅の跡地では基礎だけが残されており、建物を支えていたコンクリートの残骸からは無数の鉄筋が伸びていました。

何日目かの活動を終えた夜に、偶然にも1人の地元の高校生と世間話をする機会がありました。談笑交じりの他愛もない会話の中で、高校生は私に質問しました。

「なんでここに来てくれようと思ったんですか？」

非日常が日常となった高校生の、好奇心や批判さえもが含まれる（私はそう感じた）この簡潔な疑問に、私はものの見事にたじろぎました。

傷を負った人に対する言葉はなによりも慎重に選ばなくてはならないし、そもそも目の前の一人の高校生のことを自分はなににも知らない。

「困ったときはお互い様だよ」

とは決して言えませんでした。今でもその疑問に誠実に、簡潔に答える言葉を思いつかないでいます。

一層の連携強化を期待

きむら ひろし
木村 宏（大学コンソーシアム岡山運営委員長）岡山理科大学名誉教授

2011年3月11日午後、会議中に軽い地震動を感じたが、これが東日本を襲ったマグ



ニチュード9.0の超巨大地震と大津波であったことを、その夜のTVで知った。さらに、翌日以降の福島第一原発での水素爆発と放射能汚染という、未曾有の被災拡大に日本中が向き合うことになった。そんな中、岡山においても、いち早くさまざまな救助・支援活動が始まったことをニュースで知る。

当時、岡山県下16大学では、発足6年目を迎えた産官学の連携組織「大学コンソーシアム岡山」（以下、大学コンソと呼ぶ）が岡山商科大学を会長校として活動を進めており、さらに2009年度からは15大学が参加し、岡山理科大学を代表校とした文科省の戦略GP事業「岡山オルガノンの構築」も進行中であった。大学コンソの設立時には、岡山経済同友会・教育問題委員会（現・教育・社会貢献委員会）の積極的な支援を受け実現した経緯があり、その後も緊密な連携のもと、さまざまな事業を展開してきた。

2011年に岡山経済同友会から、東日本大震災復興支援ボランティアとして大学生を派遣する活動への協力依頼が大学コンソに提案され、岡山商科大学を中心に尽力された結果、第1次ボランティア派遣が実現した。8月24日～28日まで岩手県大槌町での活動に39人の学生が参加した。

翌2012年、大学コンソ会長校および事務局が岡山理科大学に移り、小生は岡山商科大学・大崎紘一副学長から運営委員長を引き継いだ。前年と同様に岡山経済同友会から第2次復旧・復興支援プロジェクトの協力要請を受けたので、事務局を挙げて事業の準備に当たった。7月初めに企画案の提案を受け、7月10日から8月2日まで各大学への参加希望学生の募集および選定依頼を行い、36人の参加者を決定した。8月6日の事前研修会、8月22日の黒住団長以下の出発式、23日～25日のボランティア活動実施、26日の解散式まで、岡山経済同友会およびAMDAの方々の本事業にかける強い熱意が成功させたといえよう。

小生は少しでも震災復興支援に関与したいとの思いから、一行とは別便であったが、ボランティア活動に参加させていただいた。以下にその概要を示す。

8月23日：先に到着した一行は、旧大槌中学校での清掃・備品整理に従事。釜石駅から移動の間あらためて今回の大震災の甚大さを思い知った。宿舎の大槌稻荷神社は海岸近くの高台にあり、被災を免れ、100人を超える地域住民の避難場所として提供されたそうで、^{ね ぎ じゅうおうだて}禰宜の十王館勲氏から地域を大切にする思いと、復興が進まないありさまに対する悩みを伺った。

8月24日：バーベキュー提供を行う大槌町の小・中校5校を統合した仮設校舎へ移動。鈴木利典校長からボランティア参加者が知っておくべき基本事項などの話を拝聴。被災した中学生の多くは仮設住宅に住み、経済的にも住環境としても非常に厳しい中での生活を強いられているため、皆に好きなだけバーベキューを食べさせてやりたい

との思いから、この案を希望したとのことであった。その後、校庭で準備に掛かり、屋外ではあったが約1時間にわたり中学生たちにバーベキューを提供した。地元の有志やAMDA関係者の協力も得て、真夏の炎天下ではあったが充実した活動ができた。午後は鈴木校長のガイドのもと、今回の被災地域の見学を実施。大槌町内には多数の仮設住宅地区が設定されており、その多くは山間部の日照時間が少ない所に設置されているようで、本当にお気の毒な状況を知った。海岸沿いで地盤沈下した地区、建物が流されて更地になった広大な地域や、JR山田線の線路と駅舎がすべて流された跡地などを見学した。

夜、十王館禰宜と地区住民の方々による大震災当時の生々しい様子を聴く集会が開かれた。大槌稲荷神社を避難場所として地区住民に開放した理由や、当時避難された方々の厳しい生活の様子が克明に語られた。昨年の夏ではまだ、当時の様子を語る心の余裕が無かったとのことで、いかに想像を絶する体験をされたのかを知る。学生たちも真剣な表情で話に耳を傾けていたのが印象的であった。

8月25日：午前中、大槌稲荷神社を避難場所としていた際に設営された大きな仮設資材小屋内の収容物の搬出・移転と建物の撤去作業に従事。禰宜らだけでは人手不足で手つかずであったのを、今回、宿舎として提供下さったお礼を兼ねて作業に従事した。

岡山経済同友会は東日本大震災復興支援ボランティア活動を2015年の第5次まで、毎年継続され、大きな実績を挙げられた。この事業に対する関係者諸氏のご尽力と財政面でのご支援に対し、大いに感謝申し上げます。大学コンソの力だけでは到底実現できなかった事業でした。さらに、2011年～2013年の3回、教育フォーラムにおいて「震災復興とボランティア学生たち」を開催。県下に本事業の意味と成果を公開された企画・実行力にも敬意を表します。今日、産学官連携による大学コンソの社会的役割がますます重要となっており、一層の連携強化が図られることを期待しています。

2013年

(平成25年)

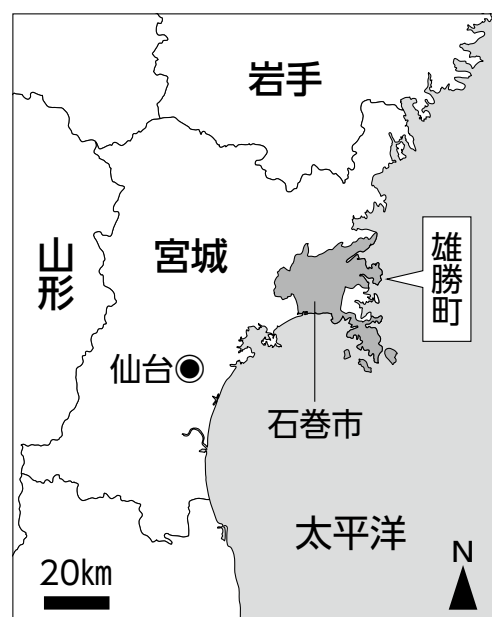
8月24日(土)~28日(水) 宮城県石巻市雄勝町、岩手県大槌町へ

車中2泊、被災地2泊の計5日間

宿泊場所は、雄勝町と岩手県下閉伊郡山田町

【行程表】

- 8月24日(土) 14時30分、岡山市営駅南駐車場を出発⇒岡山IC⇒名神高速道路⇒北陸自動車道／(車中泊)
- 8月25日(日) 磐越自動車道⇒三陸自動車道・春日PA(宮城県利府町)⇒三陸沿岸道路・河北IC(宮城県石巻市)⇒石巻市雄勝町6時過ぎ着 旧桑浜小学校の再生作業を手伝う／雄勝町で分宿(泊)
- 8月26日(月) 雄勝町の漁港付近で草取り⇒大川小学校⇒宮城県南三陸町⇒岩手県気仙沼市⇒陸前高田市⇒釜石市⇒上閉伊郡大槌町／下閉伊郡山田町の県立陸中海岸青少年の家(泊)
- 8月27日(火) 山田町を出発⇒大槌町⇒東北自動車道⇒北関東自動車道⇒関越自動車道／(車中泊)
- 8月28日(水) 中央自動車道⇒名神高速道路・多賀SA(滋賀県多賀町)⇒山陽自動車道・三木SA(兵庫県三木市)⇒岡山IC⇒岡山市営駅南駐車場8時30分着





岡山市営駅南駐車場で行われた出発式＝2013年8月24日

再生作業をした旧桑浜小学校の前で記念撮影＝2013年8月25日、宮城県石巻市



被災者の体験を真剣に聴く学生たち＝2013年8月26日夜、山田町の岩手県立陸中海岸青少年の家

アートは人の心を支える力がある

もとしま ちあき
元島 千晶 (倉敷芸術科学大学3年)

私は2013年に東日本大震災復興ボランティアとして被災地に派遣していただきました。ボランティアとして一緒に参加した学生は、看護師や救命救急士等の災害時に第一線に立ち即戦力となる職業や、教師やPT(理学療法士)等、人に直接的に関わる職業を目指す方ばかりの中、私は芸術学部で美術工芸を学ぶ学生で、「アートを使って人の心を支えることはできないか」、そんな思いで参加させていただきました。

①派遣で学んだこと

当時震災から2年以上が経過した被災地でしたが、建物には津波の爪痕が生々しく刻まれており、津波のすさまじさを実感しました。また復興事業が進む中で、多くの方が避難したため児童数が減少し、子どもたちの遊び場がなくなり、狭い仮設住宅で暮らす子どもたちのストレスや学習環境の確保が懸念されており、精神的に不安定になる子どもも出てきて、震災で体験した恐怖や環境の変化から心理的な影響を受けていることを知りました。またご自身も被災し家族中を失いながらも必死に励む被災者の方々がそれぞれ日々複雑な気持ちを抱きながら生活されていました。

そんなストレスの多い生活を送っている子どもたちに必要なのは、夢中で絵を描いたり色で遊んだり、子どもらしく過ごせる時間であり、また子どもだけでなく感動したり癒やされたり、誰しものが楽しめるアートには人の心を支える可能性があると思いました。

自分に何ができるのか、不安な気持ちで参加したボランティアでしたが、活動の中で被災者の方と対談させていただける時間があり、アートでできることについてお話しさせていただき、その中で「あなたにもできるよ!」とおっしゃってくださったお医者様がいらっしゃいました。被災地の方とお話しして力強さと言葉に、逆に私が元気を頂いてしまいましたが、自分にできることを精一杯しようと自信になりました。

②体験を踏まえて

ボランティアに参加させていただき、被災地で実際に見たこと、感じたこと、出会った人すべて忘れられない大きな体験になりました。この経験でアートは人の心を支える力があると自信を持てるようになり、より一層制作活動に励むことができ、2013年



の第64回岡山県美術展覧会で岡山県知事賞を受賞することができました。何よりボランティアでの経験、頂いた言葉が励みになり、多くの方に見ていただき、そこから広がった活動でたくさんの方とつながることができました。

③今後したいこと

東日本大震災後も熊本地震や広島土砂災害、西日本豪雨、今年も7月の豪雨や土砂災害等、自然災害が続いています。今もなお思うことは復興が進んでも震災で体験した恐怖や環境の変化から受けた心理的な影響は消えないということです。復興支援というと、モノやお金に直結して考えてしまいがちですが、アートには人の心を支える力があり、またアートをきっかけに被災地や災害、防災について知り、考える機会にもなると思います。今後は自身として微力ながら、アートでできる心のケア、防災について考えるきっかけづくりをしていきたいと思っています。

必ず来るその日に備えて

よこやま
横山 すみ^れ玲 (美作大学4年) 栄養教諭

大学4年の夏といえば、国家試験勉強と就職活動の真ただ中でしたが、居ても立ってもいられない思いでボランティアに応募したことを今でも覚えています。

東日本大震災の衝撃的な映像から2年、東北にはたくさんの震災の爪痕がありました。骨組みだけになった建物や海から離れた住宅地に流れ着いた漁船は津波の恐ろしさを物語っていました。「津波てんでんこ」の教えや避難中の葛藤、みんな命を守るために必死で行動をしたこと。さまざまな景色や言葉が胸に焼き付いています。大きな喪失感と多くの思いの中で、私たちに語り続けてくださるその様子に、「この先どのような道に進んでも、自分の目で確かめたことを私も伝え続けていこう」と心に決めました。

私は現在、高知県内で栄養教諭として勤務しています。高知県の小中学校では避難訓練や低学年からの継続的な防災学習などが進められています。学校給食においても、防災給食を通して災害時の食について考える機会を設けています。非常時においても

食は心の支えになるものであると、災害時だけでなく、これまでのさまざまな場面で感じました。食に関する指導や給食だよりを通して、実際お聞きした震災当時の様子や震災後の生活の変化などを伝え、食事面での備えの大切さを発信しています。防災に対する思いはもちろん、栄養教諭として働く中で、学校給食の味や献立の背景にある本当の姿を伝えたいという思いは、当時の経験で得た重要な学びのひとつとして、今に生きています。

自然には、穏やかさと恐怖の両面があることをこれまでに感じてきました。今後起きるとされている南海トラフ地震も、きっと予想をはるかに超えると思っています。助かりたい。助けたい。ここにいたい…。自分の命は自分で守ると頭では分かっているけれどもそれができない現実があるかもしれません。今ここで震災が起きたとき、どのような行動をとるのか、私は日々思いを巡らせています。繰り返し行う防災教育や、一人ひとりが自分の命を守ることに向き合い、高い防災意識を持つことがいざというときに的確に行動できる力を養うことにつながると 생각합니다。災害に関するさまざまな標識も普段からよく目にします。いつも自分事として日常にあるさまざまな情報に目を向け、自分の住む土地をよく知ること、自分ができる命の守り方を考え、とにかく生きること。今からできる防災はたくさんあると思います。防災をより身近にしておくために、私自身さらに学びを深め、さまざまな角度からより多くの人たちに言葉を尽くして防災の重要性を伝えていきたいと思っています。

最後になりましたが、震災でお亡くなりになられた方々に深く哀悼の意を表するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。そして多くの貴重な経験をさせていただきました東北の皆様、ボランティアに関わってくださった皆様に心より感謝申し上げます。10年経過しても、東日本大震災に節目はありません。私たちはこの日を忘れることなく、日々の防災に心を配っていくことが大切だと感じています。いつか必ず来るその日に備えて、自分にできることを積み重ねていきます。



当たり前と捉えず、日々備える

うえ た よしとも
植田 好智 (岡山商科大学2年) 会社員 (住宅関連)

2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年の月日を振り返り、あっという間だったと感じる人、辛く長い10年だったと感じる人、人によってさまざまな感じ方がある中で、私自身も当時のことを振り返るとともに、今後の自然災害への考えを見つめなおす機会にしたい。

当時、被災の現場を実際に目で見てそのとき初めて、災害は身近なものなのだと感じた。平地に打ち上げられた大きな船、骨組みしか残っていない建物など、テレビや新聞のニュースではどこか他人事のように感じ、実際に起きていることだと実感のないまま見ていた映像も、一瞬にしてこれが現実なのかと衝撃を受けた。

私自身を含め、おそらく多くの人は災害が起きた後に「こんなことになるとは思っていなかった。大したことにはならない、大丈夫だと思った」と言うのではないだろうか。東日本大震災後も熊本地震や全国各地での豪雨、地震被害など以前に比べ大きな災害が多く発生していると実感する。それだけ自然災害が身近になった現在だからこそ、災害の恐ろしさを再確認し、日々備えることが重要だと感じた。

「これまでも同じようなことはあったし大丈夫だ」と考えず、少しでも危険を感じたらすぐに避難すること、家族で災害発生時の決め事やルールをしっかりと話し合っておくこと、避難情報やハザードマップの確認など、今となっては当たり前のように周知されていることを当たり前と捉えず、一つひとつを確実に確認し、常に意識することが必要だと感じた。

地震や津波など自然災害を未然に防ぐことは不可能でも、できる限りの対策をすることが少しでも被害を抑えることにつながる。また、これまでの災害を風化させないこと、災害を経験した人や当時の話を聞いた人、私のように実際に被災の現場を目にした人は周りの人に災害の恐ろしさやそこから学んだ教訓を共有すべきだと考える。そのうえで、より多くの人々が自然災害について考える時間を少しでも持つことが、災害に対する意識や実際に災害が起こった場合の対応や被害の縮小に直結すると思う。

実際に被害にあわれた方にとっては単に10年という節目ではないことを感じながら、私自身の災害に対する心がけに努めていきたい。

災害の犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表すとともに、被災された皆さまにお見舞い申し上げます。

「減災」と「自助・共助」が重要

さとう あきら
佐藤 明 (倉敷芸術科学大学3年) 倉敷市消防局玉島消防署真備分署 消防士長

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。当時、高校3年生だった私は、巨大な津波が町を飲み込んでいく映像を、テレビで見ていることしかできませんでした。

大学3年生の時、岡山経済同友会が主体となり、岡山県内の学生を被災地へ派遣していることを知った私は、2013年8月24日から28日までの5日間、宮城県と岩手県で行われたボランティアに参加しました。このボランティアでは、宮城県石巻市雄勝町にある旧桑浜小学校の整備や、岩手県上閉伊郡大槌町の草刈りを行うとともに被災地の方との交流を行いました。

そこで被災地の方が強く訴えていたのは、「減災」と「自助・共助」の重要性です。災害の発生を防ぐ「防災」に対して「減災」は被害を減らすことをいいますが、減災で重要なことが自身の身を守る「自助」と、周囲の人と協力し助け合う「共助」です。岩手県釜石市では防災教育に力を入れていた鵜住居小学校及び釜石東中学校の児童生徒約570人全員が避難し助かり、釜石の奇跡と呼ばれていますが、これは児童生徒が自ら「自助・共助」を実践した奏功事例といえます。

ボランティアに参加した2年後、私は救急救命士の資格を取得し、消防士となりました。勤務して3年がたった頃、「平成30年7月豪雨災害」(2018年)が発生し、倉敷市真備町地区では河川の堤防が決壊して、多数の家屋が浸水する等、甚大な被害がありました。発災時、私も他県の消防本部、警察、自衛隊の方と協力し救助活動にあたりましたが、活動は困難を極め、倉敷市内では52人(関連死を除く)の尊い命が失われました。

被災後は慌ただしい日々が続きましたが、多くの方がご支援をしてくださった結果、復興が大幅に進みました。東日本大震災の復興に微力ながら携わった私でしたが、被災地で支援を受ける側となり、助け合うということの大切さを実感しました。ご支援いただいた方々、本当にありがとうございました。

同時にこの豪雨災害では高齢者の避難や情報共有の難しさなど、多くの課題が浮き彫りとなり、私が現在勤めている真備分署や倉敷市真備支所でも、庁舎や車両が浸水する等の被害がありました。そのため、河川の合流点付け替え工事や堤防の整備とともに、災害情報を共有できる新システムや水上バイクの導入など、災害に強いまちづくりに取り組んでいます。

近年、異常気象のため全国各地で洪水・土砂災害が頻発しており、南海トラフ巨大



地震も懸念されています。消防や警察等の公的機関による支援は「公助」と呼ばれますが、大規模災害時は人手が不足します。気候が変化した今、堤防整備等のハード面での対策や公的機関による支援だけではなく、普段からハザードマップを確認し、早めの避難を行うなど自身の命を守る行動を取ることが重要になっています。

私も東日本大震災復興ボランティアで学んだ「自助・共助」の重要性や、平成30年7月豪雨災害での経験を避難訓練等で発信し、市民の皆様とともに、今後の防災・減災の啓発につなげていきたいと思っています。

「まず現場に行ってみよう」

いでい まみ
出射 茉実 (川崎医療福祉大学2年) 看護師

①派遣で学んだこと・思い出

派遣で学んだことは「自分のこととして考えてみることの大切さ」「その場において自分の目で見て、肌で感じたからこそ気づくことがある」の二つです。

2013年の教育フォーラムにパネリストとして登壇した時には大川小学校で泣き崩れている方のことを印象深い出来事として話していたようですが、今になっていちばん思い出すのは、15時間近い移動を終えてはじめて宮城県石巻市雄勝町でバスを降りて見た光景です。海岸沿いの見渡す限り広い土地がありました。よくそこを見ると、コンクリートの塊がところどころにありました。最初は何かわかりませんでしたが、津波で流された建物の基礎部分のみが、一部残っていることに思い当たりました。ここは「何もない」場所ではない。「ここに生活していた人たちがいて、その生活がなくなってしまった」場所であるということに気が付きました。その時にその人たちがどうしているか、どんな思いでいるかを想像するだけで言葉にならない思いがこみあげてきたことを、覚えています。

②現在ここがけていること

「今もしも、災害が起きたら？」を時々、考えることにしています。買い物をしてい

る際も、非常口の案内などは以前より目につくようになりました。備蓄というほどではないですが、日用品等は少し多めに購入して生活はしています。

仕事面では現在は精神科看護師として病棟で勤務をしています。ナースコールなどですむ用事であってもなるべく患者さんの部屋やベッドサイドに行って顔を見て話すことは心がけています。ベッドサイドから見える患者さんの生活の片りん、ちょっとした表情の変化や様子の変化も手掛かりとなることもあります。直接、顔を見て患者さんとかかわることや患者さんの生活を想像すること。これらの「まず現場に行ってみよう」という意識は間違いなく、東日本大震災復興ボランティアに参加したからこそ培われた心がけだと思います。

③今後の災害で最小限にするための提言

特別な時に特別なことはできないと思います。自分のこととして、備えておくことが必要なのだと思います。自然災害はいつどこで起きるかわかりません。備えていてもどうにもならないことも、多くあります。それでも被害を少しでも減らすために、自分や周りの人を守るためにできることはないでしょうか。近所の人に、あいさつをして顔なじみになっておく、日用品を少し多く買っておく、そんなささいなことでもいいと思います。緊急時に見ず知らずのひとを、思いやることは難しいかもしれませんが、顔なじみなら違うかもしれません。日常生活から少し意識を変化することが、必要だと考えます。

身近な人々とのつながりをより強固に

ごとう たくや
五藤 拓也 (環太平洋大学2年) 総社市立清音小学校教諭

①派遣で学んだこと・当時の思い出

私が初めて被災地を訪れたのは東日本大震災から2年5カ月が過ぎた2013年8月。私たちがボランティアとして活動した内容の多くは新たな町づくりのための再生プロジェクトで震災の被害を直に感じるものではなく、町の瓦礫^{がれき}も片付けられていたため、



一見すると復興が進んできているように感じられるものでした。しかし、地域の方にを見せていただいた震災前の町の写真と当日の詳細な出来事をお聞きし、自分が想像していた以上に町の景色が様変わりしていることに衝撃を受けました。そして、町の復興は進んでいても、災害に遭われた方々の「心の復興」はまだまだ進んでいないということを強く感じました。

②その体験を踏まえ、現在までに心掛けていること

この岡山経済同友会主催の復興支援ボランティアに参加した後、心掛けていることは、「人とのつながりを大切にすること」です。毎年日本各地で発生している災害のニュースに触れ、ある日突然日常を奪われてしまうような災害がいつどこで起こってもおかしくないということを強く意識させられます。家族や友人、ご近所に住む方々など、身近な人々とのつながりを日頃から強固にしておくことで、そのような災害が降りかかってきた時、お互いに助け合い・支え合える関係ができるのではないかと思います。

③今後の自然災害の被害を最小限に食い止めるための提言・アイデア

被災地を訪れる中で多くの方が口にされていたのが、「災害は忘れた頃にやってくる」という言葉でした。過去に起きた災害に対し、教訓として生きているのか、過去のものになっているのかで大きな違いが生まれることを教えられました。東日本大震災に限らず、日本各地で起こっている自然災害をいかに自分事として捉え、自分たちの生活につなげられるかということが、いざというときに自分の命を守ることができるのかどうか直結するのだと思います。私は現在小学校教師として働いていますが、東日本大震災を知らない子どもたちが年々増えてきています。私が実際に被災地で見たことや教えていただいた事実をしっかりと伝えていきたいと思っています。

二つの「復興」

まつ お りょう じ
松尾 涼児 (環太平洋大学2年) 井原市立出部小学校教諭

濁流に飲み込まれている町、家屋の屋上で助けを呼ぶ人々、夜に広がる火の海、当時18歳だった私にとって、東北大震災のニュースはあまりに凄惨^{せいさん}だった。自分にも何かできることがあるのではないかと。そう感じたものの、受験勉強や日々の生活に追われ、その意識は徐々に薄れてしまっていた。

そうして時がたち、私は大学に進学し、2年生になっていた。大学は夏休みとなり、友人から「東北の震災復興ボランティアを募集しているから、一緒に行かないか」と声をかけられた。被災者のために、自分にも何かできるチャンスだと思い、参加することを決意した。

バスで約15時間。現地に着き、一番初めに受けた印象は、「震災から2年半が経過しているのに、復興は自分が想像していたよりも進んでいない」というものだった。地上に乗り上げた船、津波に飲み込まれた校舎を見て、少しでも自分たちが復興の力になれば、という思いがより強くなった。

現地での活動は、主に瓦礫^{がれき}の撤去と、被災地の人たちとの交流だった。一つでも多くの瓦礫を撤去し、「復興に貢献したい」と焦る私たちとは裏腹に、現地の被災者の方々は、笑顔で私たちを迎え入れ、昼食を用意して歓迎してくれた。食事を共にしながら、現地の方に「この場所にきてくれることが、私たちにとって心の支えになっているよ」と言われ、気が付いた。私たちにできることは、目に見えている瓦礫の撤去だけではない。復興のためには、目には見えない被災者の方々の「心の復興」にも携わることが大切なのだ、と。翌年には「復興グルメF-1大会」というイベントがあることを知り、友人と2度目のボランティア活動のため再び東北へ足を運んだ。「喜びの共有」をテーマに、スタッフとして、被災地の特産品を使ったグルメを提供する現地の飲食店の方々と協力し、イベントを盛り上げた。1度目の活動とは違い、被災者の「心の復興」により深く携わることのできる、貴重な経験となった。

自然災害は、目に見える物だけでなく、目には見えない「人の心」にも被害をもたらす。思いもよらないタイミングで、突然起こる災害。何もかもが非日常になってしまった世界で、復興の支えとなるのは、人と人とのつながりである。助け合い、励まし合える仲間がいることは、復興に大きな力を与える。防災の取り組みとして出来ることは、日頃から地域の人とコミュニティーを作り、いざとなれば声をかけ合い、助け合える輪を広げておくことである。教師として、未来ある子供たちと向き合っている今、



自分の経験を通じ学んだことをしっかりと伝えていきたいと思う。

学生が学び成長する

どうた しゅうじろう
堂田 周治郎 (大学コンソーシアム岡山2013年度運営委員長、岡山理科大学副学長) 岡山理科大学名誉教授

2011年3月に発生した東日本大震災に対して、大学コンソーシアム岡山は2011年8月から5年間、復興支援ボランティア活動を行ってきた。私は3回目の2013年に運営委員長として参加した。その時の参加者は学生40人（11大学からの応募者123人を応募数で案分して決定）、大学教職員6人、岡山経済同友会や企業職員など18人の総勢64人であった。

8月8日に事前研修会を行い日程・現地状況・活動内容・注意事項などの説明や班分け（8班構成）を行った。8月24日に岡山を出発し、8月25日から27日午前中まで土木、伐採、片付け、草取りなどの作業や見学、交流、研修を行ったあと岡山に向けて出発し28日の朝、無事岡山に戻った。学生と数人の職員はバスで、残りは新幹線などで行った。第3回であり作業開始までの準備や手順は確立されていたので、ここでは、活動を通して学んだことを述べたい。

（1）AMDAの方が言っておられたが、ボランティア活動は復興の手助けになるが、それ以上に学生が学び成長する。その通りである。講義室ではおとなしい学生が現地で昼休みになると率先してブルーシートを敷いて全員の昼食場所を作ってくれた。また、夜の研修会で涙を流しながら地元の人の生々しい被災時の話を聞いていた。震災後2年半が経過した時期でもあり、被災者の方もそれまで言えなかったことが話せる状態になっていた。学生の感想文に「普段あまり人と交流を持たない生活を送っていたが、勇気を出してこのボランティアに参加する決心をしました。他大学の人は皆、向上心と思いやりがあって初めの不安がウソのように楽しくて真剣な研修ができました」や「初めて人の役に立てたと思えた」などがあり、92%の学生が「また参加したい」と回答した。

（2）宮城県石巻市雄勝町桑浜でワカメ置き広場の草取り作業をしたあと地元の方々と交流し、おいしい料理をいただいた。現地は高齢者が多く震災後2年半が経過して世間の記憶が薄れてきた時期に40人の若者がやって来て作業や交流をしたことを心から

喜んでおられた。被災者のことを忘れずに被災地に行くだけでも喜ばれることを実感した。

（3）石巻市の旧大川小学校や旧防災センターなども見学し黙とうをささげた。特に多くの犠牲者（児童70人、教員10人が死亡、児童4人が行方不明）が出た大川小学校の裏山を見た時、なぜ裏山に逃げなかったのか。あとで知ったが現地のおばあさんの「先生がいなければ、孫は死ななかったのしゃ」という言葉は重い。校庭に避難後、約50分間、児童は校庭で待機していたとのことである。40人の職員が亡くなった岩手県大槌町役場でも黙とうをささげたがここでも、なぜ少数の人しか近くの中央公民館（海拔34m）に逃げなかったのか。「まさか、こんな大きな津波がここまで来るとは思わなかった」という認識が共通の問題点であろう。普段から危機意識を持って自分が住んでいる地域のハザードマップをもとに適切な場所に避難するということを教訓としたい。



2002年に廃校となった旧桑浜小学校に残る黒板の寄せ書き＝2013年8月25日、石巻市雄勝町

山陽新聞

がきの山に至る所で出くわした。コンクリートの防潮堤は倒れたまま波に打たれている。11日、東日本大震災から2年半を迎える被災地の光景は、復興はいまだ道半ばにあると訴えていた。8月25、27日、岡山経済同友会は被災地の宮城、岩手県奥へ岡山県内の大学生ら54人を派遣。記者として、ボランティアの一人として同行した3日間を報告する。(安部晃将)



被災地の至る所に点在するがれきの山。作業中の重機が小さく見えるほどうずたかく積まれている。8月27日、岩手県大槌町

高さ20尺の津波に襲われた宮城県石巻市雄勝町の、最初に訪れたのは旧桑浜小学校だ。復興のシンボルとなる交流拠点にと、再生計画が持ち上がり、津波被害は免れたが、裏山の崩落で木造平屋の大正建築は今も大量の土砂に囲まれる。

その土砂の撤去を中心とした作業は1時間に10分の休憩を挟み、計5時間。拳大の石が交じり、シャベルで一度にすくえる量は限られる。「でもめる誰かが、少しでもやらない



旧桑浜小学校で土砂を片付ける学生たち＝8月25日、
宮城県石巻市雄勝町

いと前に進まない」と、岡山理科大1年岡雄喜さん(18)が言った。

—

学校近くの桑浜港では
草取りをした。コンクリ
ートの基礎が整然と並
び、かつて住宅が軒を連

ねていたことをうかがわせる。あるじが不在となつた一帯の土地は腰の高さぐらいの草が生い茂

雄勝町の死者・行方不明者は約230人。人口は震災前の4分の1となる約千人に減った。「いつでも戻ってこられるように、いつかきつと戻ってくると思って」。作業に加わった漁師の永沼清徳さん(54)はそんな願いを込め、仲間とともに漁の合間に草取りを続け

雄勝町の中心部は整備が進み、大通り沿いの店舗はほぼ復旧。車が行き

る。」「ニュースで被災地のことを知ったつもりになつていて自分が恥ずかしている。倉敷芸術科学大3年東快昌さん(21)はそうつぶやき、厳しい現実を受けて止めようとしていた。

設のコビニがあるだけで、人の気配を全く感じない。

地元で建設業を営む河辺光吉さん(78)は「若者が流出し、年寄りしか残っていない。いつ町が消滅してもおかしくないや、危機感すら覚える」と嘆いた。

雄勝町から北へ約10

し、死者・行方不明者が初めてという学生たち。1200人超という岩手県大槌町を訪ねた。バスで3時間かけて到着した陸中海岸青少年の家では被災者4人の証言を聞いた。「真ッ黒な濁りを容赦なく押し寄せた」「燃えた船が波とともに山にぶつかり、辺りに炎が広がった」。一面に炎がまぶたに浮かび、惨状がまぶたに浮かび、に強く抱いた。

スーム 岡山経済生活
会の復興委員会

動 将来の復興を知ろう若者
被災地へ現状を知ってもら
うと、2011年は岡山県内大震災
企画、2012年は岡山県内大震災
・短大生・学生男女計40人、大
参加、国際医療ボランティア
AMDA（岡山市）の仲介で、
宮城県・登米市雄勝町、岩手県
大槌町を訪問、土砂の撤去、
草取りなどの清掃活動に、地元
組む、被災者と交流した。

交い、スーパ、洋服店
などで買い物をする人お
いて、町は少しずつだがも
活気を取り戻しつつある
ように見える。だが、一
度脇道へ入ると様子は一
変した。津波で更地と化し
た土地がどこまでも広が
っている。店と言えれば
バラック小屋のような仮

▽…「小学校の教師が夢。今回の活動で得た教訓を子どもたちに伝えたい」「消防士になって地元住民の防災意識向上に努める」一。ボランティアを終えた学生たちは、帰途につくバスの中で口々に感想を述べた。

▼…大震災の惨禍に触れた学生たちは「もし岡山で同様の災害が起きたら…」との不安も口にする。国などが想定する南海トラフ地震が発生し

た場合、岡山県は南部を中心に3m超の津波が押し寄せ、犠牲者は最大約3000人と推計されている。

▽…今回の活動の一環で、宮城県の大川小学校を慰問した際、慰霊碑の前でわが子の名を叫び、泣き崩れる女性を見て胸が締め付けられた。そんな悲劇が2度と起こらないようにするためには何をすればいいのか、何ができるのか。あらためて考えさせられた3日間だった。(安部晃将)

取材メモ

2014年

(平成26年)

8月23日(土)~27日(水) 宮城県石巻市雄勝町、岩手県大槌町へ

車中2泊、被災地2泊の計5日間

宿泊場所は、雄勝町と岩手県下閉伊郡山田町

【行程表】

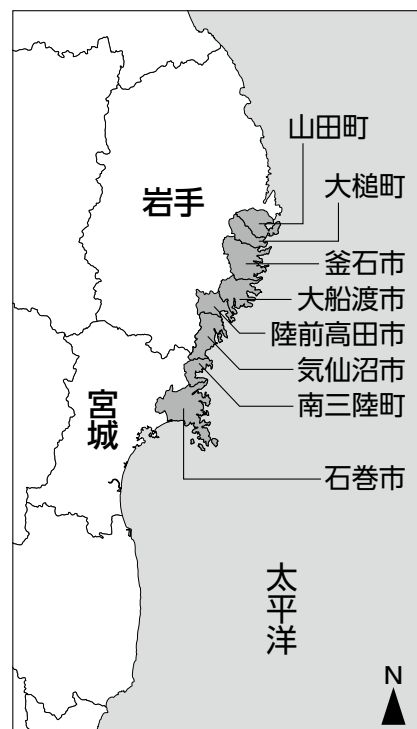
8月23日(土) 13時30分、岡山市営駅南駐車場集合⇒15時、出発式⇒岡山IC⇒山陽自動車道⇒中国自動車道⇒舞鶴若狭自動車道⇒北陸自動車道／(車中泊)

8月24日(日) 北陸自動車道⇒磐越自動車道⇒東北自動車道・国見SA(福島県国見町)⇒三陸自動車道・春日PA(宮城県利府町)⇒三陸自動車道・河北IC(宮城県石巻市)⇒宮城県石巻市雄勝町8時過ぎ着⇒雄勝病院跡⇒波板海水浴場周辺で草取り／雄勝町・波板コミュニティセンター(泊)

8月25日(月) 雄勝町⇒大川小学校⇒宮城県南三陸町⇒岩手県気仙沼市の復興商店街で昼食⇒陸前高田市⇒大船渡市⇒釜石市⇒岩手県上閉伊郡大槌町／下閉伊郡山田町の岩手県立陸中海岸青少年の家(泊)

8月26日(火) 山田町を出発⇒大槌町の吉里吉里海岸の清掃⇒釜石市⇒釜石自動車道⇒東北自動車道・安達太良SA(福島県本宮市)で夕食⇒北陸自動車道／(車中泊)

8月27日(水) 北陸自動車道⇒舞鶴若狭自動車道⇒山陽自動車道⇒岡山IC⇒岡山市営駅南駐車場8時30分着





地元との交流会＝2014年
8月25日、大槌町

吉里吉里海岸を清掃し、ご
みを積み込む学生たち＝
2014年8月26日、大槌町



平泉での集合写真＝2014
年8月26日

震災を自分ごととして捉えて行動する

あきやま なみ
秋山 南美 (ノートルダム清心女子大学3年) 公益財団法人岡山県産業振興財団職員
※同大2年時の2013年にも参加

2014年8月23日から27日にかけて東日本大震災復興支援学生ボランティアに参加しました。自然災害が頻発する昨今、あの時学んだことを教訓として、まさに今生かしていかなければならないと感じています。

バスの中で聞いた体験談

派遣の中で最も印象に残っていることは、移動するバスの中で、「災害が起こったら、どうやって逃げるかをいつも考えている。この瞬間も、地震や津波があったらどの道を通して逃げられるかを考えながら過ごしている」と現地の方がお話をしてくださったことです。

大学在学中、私は「東日本大震災支援ボランティアサークル」に所属し、2012年から毎年被災地に足を運び、見聞きしたことを文化祭などで発表していました。現地の方からこの言葉を聞き、これまで自分は、被災地の状況を伝えることばかりに意識が向き、自分や周りの人たちをどう守るべきかを考えられていなかったと気付きました。

これをきっかけに、防災に取り組み、災害による被害を減らすことが、岡山からできる支援の一つなのではないかと考えるようになりました。

教訓として防災に生かす

被災地で起きたことは決して他人事ではないと一人でも多くの人に感じてもらい、行動に移していかなければいけないと思い、日頃から自分なりの防災を心掛けています。例えば、防災リュックを購入し、そのままにしておくのではなく、常備薬や緊急連絡先を書き出したものを追加して入れておくなど、自分ごとに落とし込んだ備えを実践しています。

また、家族や友人などに対して、被災地で見聞きしたことを共有し、災害用伝言ダイヤルなど緊急時に使える連絡手段や、家の中の危険箇所の確認など、防災について考える時間を作るようにしています。本当に小さなことの積み重ねですが、ただ伝えるだけでなく、東日本大震災を教訓として生かせるように、まずは自分の身近な人と



ともに防災に取り組むようにしています。

地域全体で防災に取り組む

被災地では、現地の方から「避難訓練を定期的に行っていたある地区では、震災が起きた時に多くの人が助かった」というお話をうかがいました。このことから、災害時に被害を最小限にするためには、個人の備えだけでなく、地域全体で防災に取り組むことが重要だと考えます。

自然災害が少ないと言われてきた岡山でも、近年は温暖化などの影響で大雨に見舞われ、災害は今やどこでも起こりうるものになっています。また、私の住む地域をハザードマップで確認すると、干拓地ということもあり、津波や洪水に対応できる避難所はほとんどなく、自分一人ではいざという時にどこに逃げればいいのか想定するのが難しいと感じました。

今後は、こうした状況を改善していくために、個人、自治体、企業が一体となり、事業継続計画、いわゆるBCPを策定し、地域の機能を継続する体制を整えるなど、災害に強いまちづくりを進めていく必要があると思います。また、私自身も継続して周囲の人々に危機感を共有し、東日本大震災の記憶を風化させず、防災に取り組む「輪」を少しずつ広げていきたいです。

防災訓練を決しておろそかにしない

やまさき あやか
山崎 彪香（中国学園大学1年）会社員

2011年当時、中学生だった私が被災地のボランティア活動に参加できたのは4年後の大学1年生になった時だった。私と同じ中学生だった子たちがたくさん犠牲になっていることを知った。自分が望む未来に向かって進み、大学生活を送れていることがどれほど恵まれているのか思い知った。このボランティア活動に参加しなければこんなに深く震災について考えることも理解しようとすることもなかったと思う。

ボランティア活動に参加した私たちは今回の経験を、被災地の方の思いを受け継いで、教訓として伝えていく使命がある。つらくて思い出したくない当時のことを私たち

に涙ながらに伝えてくれたその思いを踏みにじってはいけない。「決して忘れてほしくないから話している」—そう言っていたからだ。

そして、被災地の方が本当に必要としていることを知った。それは、「私たちのことを知ってくれる人がいること」である。物資やお金もちろん必要である。それ以上に被災地に足を運んでくれる人がいることにとても心がすくわれると言われていた。私たちが現地で行った活動は微々たるものである。しかし、現地に足を運んだことにとても意味があると感じた。

たくさんのことを見聞きしたうえで私は提言したい。防災訓練を決しておろそかにしてほしくない。私が一番印象に残っているある方のお話を紹介したい。高齢者が多い地域では、防災訓練の時、高台に登るのが困難なため、練習では平地のところに集合するだけで済ませていた。ところが、実際に地震が起きて津波が現実になった時、練習の時のようにこの平地に集まり津波にのまれ、たくさんの尊い命が奪われた。練習の時にここに避難していたから、ここでいいと思ってここに集まる人がたくさんいた。「後悔してもしきれない」—そう話されていた方の表情は後悔の思いでいっぱいだった。

誰もが自分の身に起こるわけがないと他人事のように考えてしまいがちだ。自分の身に起こるかもしれないと思うと、本気で訓練もするはずだ。いつ、どこで起こるか分からないのが自然災害の最も恐ろしいところである。失ってから大切さに気づいて後悔はしたくない。大切なものを守るための準備をしっかりと大切なものを失わないようにしたい。

私も自分の住む地域の避難場所は家族と確認している。今回のボランティア活動で見聞きした経験を今の生活に生かしたい。そして何より、今当たり前のように生活できているこの恵まれた環境に感謝し、私の学んだことを伝えていきたい。

備えることで減災はできる

あずみ ひろや
安積 弘也

(環太平洋大学2～4年＝2014年から3年連続で参加) 消防官

私は、大学生時代岡山経済同友会の支援をいただき、東日本大震災及び熊本地震の復興支援ボランティアに参加した。各被災地では、さまざまなボランティア活動を行い、被災者から災害発生時の状況等をお聞きし、多くのことを学んだ。



一つ目は、災害は、人間の想定を覆すことだ。東日本大震災のボランティア活動終了後、被災者の方から当時の状況についてお話を聞く機会があった。被災地では震災前「10メートル以上の津波は来ない」「内陸部には津波は来ない」と言い伝えられていた。しかし、東日本大震災はその想定を覆す大災害であったため、言い伝えを信じ、避難せずにいた現地の人が津波に巻き込まれ、多くの人的被害が出てしまったと被災者の方がお話しされた。

この話を聞き、私は災害発生が予想される場合早めに避難をすることを平時から心掛けていた。早めに避難することにより、災害が発生しても被害を最小限に食い止めることができると考えるからである。近年、全国各地で異常気象による災害が多発している。災害を未然に防ぐことはできないが、備えることにより減災はできる。最悪の状況を考え、災害発生前に避難することでは、日本の今後発生する災害による人的被害を未然に防ぐ術はないと感じる。

二つ目は、被災地では被災者目線やボランティア目線を考えながら活動しなければならないことだ。熊本地震のボランティアでは、地震が発生してから2週間で現地に入り、仮設トイレの掃除や簡易ベッドの作製などさまざまなボランティア活動をさせていただいた。私は、避難所を運営されている方に「校舎を土足禁止にするから廊下の掃除をしてほしい」と指示を受けた。掃除機を使い、廊下の掃除をしていると被災者の方から「掃除機の音がうるさい」「土足禁止なんか聞いてないぞ」と苦言を呈されることがあった。被災者は、慣れない避難生活が2週間続きストレスがたまり、イライラされていた。災害現場では、被災者を思って実施したことであっても、被災者を怒らせてしまうこともあるのだと分かった。被災地では、そのような現実もあるのだと理解した上で、今後活動をしていきたい。

このように私は、実際に被災地を訪れボランティア活動を通して、多くのことを学ぶことができた。現在、私は災害から人の命を救いたいと思い、消防官として活動している。まだ、災害派遣を経験したことはないが、災害現場では、復興支援ボランティアを通して学んだ知識、経験を生かして活動していきたい。また、地域の防災意識向上に努め、災害に強い地域づくりをしていきたいと考えている。

周りに伝えることを大切に

ふじい ゆり
藤井 友里 (旧姓：伊藤) (就実短期大学1年) 契約社員

私は、東日本大震災復興ボランティアとして2013年から15年まで合計7回、主に岩手県・宮城県を訪問しました。

東日本大震災が起こって、自分に出来るボランティアは何だろう、何が出来るんだろうと考えている時に、友達が活動しているAMDА高校生会を知りました。そこで、聞くよりも自分の目で、肌で現地を知ることの大切さを知って、それ以来、行ける時には東北を訪れました。

1 派遣で学んだこと・当時の思い出

東北を初めて訪れたのは震災から2年後でしたが、震災の爪痕はそのまましっかり残っていました。普段の日常では見られない水圧で折れ曲がったフェンスや流されてしまった家の基礎、道の所々にある日用品の破片…震災から2年たっても復興はまだまだでした。

当時の話を聞いても、みんな言うことは「海は嫌いになれない」。津波で家や学校、会社、大切な家族を失ってもずっと過ごしてきたこの町のこと・海のことをこんなに大切に思っている被災地の皆さんが本当に素晴らしく、誇らしかったです。

一番印象に残っているのは、宮城県石巻市にある大川小学校を訪れた時です。そこは、津波が発生しても浸水被害などはないとされていた場所だったにもかかわらず、津波が押し寄せ、全校生徒の約7割が被害に遭いました。実際に訪れると、バスから降りた瞬間に空気が全然違って、興味本位で来てはいけない場所だと感じました。小学校には、慰霊碑が建てられていて、たくさんの花束や千羽鶴が供えられていました。建物の近くに近づくこともできず、少し遠くから見るだけだったのですが、ここで元気に生活していた児童の皆さんが、津波で一瞬にして奪われたこと、想像すると涙がこみ上げてきました。

2 その体験を踏まえ、現在、心がけていること

ボランティアに参加してからは、自分の体験を自分だけのままにせず、周りに伝えることを大切にしてきました。被災者ではないから、つらさを共有することはできな



いけれど、体験を伝えていくことはできます。この東日本大震災の出来事を絶対に風化させてはいけない。そんな思いでこれまで出身中学校での出張講義や岡山西南ロータリークラブ主催のインターシティミーティング等で発表をさせていただきました。

社会人になってからは、なかなか東北を訪れることができない日々が続いています。それでも、当時出会えた東北の方々とは今も連絡を取って、絆はつながったままです。コロナが落ち着いたら、ゆっくり時間をとって夫婦で東北を訪れながら出会った方々と再会できたらなと思っています。

3 今後の自然災害で被害を最小限に食い止めるために

自然災害は事前に起こるかわかりません。だからこそ、前もって家族と避難場所を確認しておくこと、防災バッグをすぐに持ち出せるところに置いておくこと。起きてから考えるのではなく、起きてからすぐに持ち出せるところに置いておくこと。起きてから考えるのではなく、起きてからすぐに安全確保、行動できるように準備しておくのが大切だと思います。東日本大震災は岡山から離れたところで起きた地震だけでも、近年言われている南海トラフ地震は、岡山も被災想定地域に入っています。いざ災害に見舞われたときに、準備していなかった、こんなに被害が大きくなると思っていなかった、と言わなくても大丈夫な状態を作っておこうと思います。

想像を超える被害と心労

かとう まさはる
加藤 正春 (大学コンソーシアム岡山運営委員長) ノートルダム清心女子大学名誉教授

私は、ノートルダム清心女子大学が大学コンソーシアム岡山の会長校を引き受けていた2014年に、加盟大学の学生を引き連れてボランティア活動に参加した。岡山の大学生の支援活動の4年目であった。学生たちは、参加にあたって1万円の自己負担金が必要という条件にもかかわらず、多数が応募してくれた。それは、この活動に対する学生たちの関心の高さをうかがわせるものであった。

学生たちは、8月23日午後に両備運輸のバスで岡山をたち、翌24日朝、石巻市雄勝町に到着。雄勝病院で黙とうをささげ、雄勝小学校を見学して、波板地区の海水浴場

広場で草抜き作業を行った。夕刻、コミュニティセンターで夕食をとり、地区の人々との交流会を催した。25日は海岸線伝いに北上して大槌町に向かった。途中、大川小学校に立ち寄り黙とうをささげ、南三陸町ではバスのなかで地元の方から被災体験をうかがった。この日は宿舎の岩手県立陸中海岸青少年の家で研修。町内会役員の方が避難所運営の苦勞を話され、地元AMDАの〇さんの被災体験談があった。最終の26日はあいにくの小雨であったが、午前中、2グループに分かれて海岸線の清掃と草抜きを行い、昼に地元の方々の心尽くしのにゅうめんをいただいて、大槌を離れた。

雄勝町でも大槌町でも、あちこちに工事用の土砂が積まれた丘が作られ、バスの車窓からは、数多くの工事用ダンプ車がみられた。復興工事が進められていることがみてとれ、支援活動は被災後の片付けという状況からは変化していた。

雄勝町の交流会では、町の復興が遅れていること、住民がなかなか戻ってこれないことが語られ、復興の苦勞がしのばれた。当日の昼間、プレハブの商店街で月に一度の芸能祭が開かれていたが、それは、住民の集いの場を創る試みの一つであった。

25日のバス旅と夜の研修会では、震災当時の状況をリアルに知ることとなった。大川小学校では、北上川にかかる橋のトラスの鉄骨の上を越える高さの津波がきたという。南三陸町では20メートルの高台にある中学校に海水が押し寄せている。バスで話されたご婦人は、この年から出来事を語りはじめたという。それまでは、あまりにもつらくて話すことができなかつたとおっしゃるのである。震災被害と被害に見舞われた方々の状況の厳しさは、私たちの想像力を超えていた。

震災4年目の支援を振り返ると、活動の中心は震災被害状況の学習と地域の人々との交流に移っていた。そこで私たちの学んだことは多い。そして、その学びは、他の多くの災害ボランティア活動の内容を学び知ることによって、私たちのなかのより深くに位置づけられることになろう。2018年7月の西日本豪雨災害に際して、大学コンソーシアム岡山が「学生ボランティア報告会」を催したのは(同年11月)、そのような契機を提供するものであった。このような支援体験の理解と共有は、来るべき災害の際に私たちが取るべき行動を教えてくれるだろう。そして、それは私たち自身の備えにもなるにちがいない。

月旦

員ら15人が参加。8月24～26日の3日間、宮城、岩手両県で清掃奉仕に取り組み、被災者と交流した。被災地で学生たちは何を感じたのか。同行取材を基に報告する。(太田孝一) = 1 面関連

東日本大震災から3年半

津波の教訓

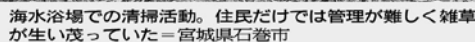
家族、知人に伝えたい

感じた」。

交流

清掃奉仕

残っていない。建物のコンクリート基礎はむき出しのまま。あちこちに雑草が生い茂ったた光景に、岡山商科大4年五島和輝さん(21)は「ここに街があり、すべて津波に流されたなんて想像できない」とうなずいた。



訪れた先々で多くの被災者と交流。1200人以上が死亡・行方不明となった若手県大榎町では住民と語る場が設けられ、松原清さん(71)がある言葉を紹介してくれた。

「津波でんでんこ」
「津波でんでんこはおのの」「めいめい」を意味する方言で「津波の際は、ばらばらでいいから全力で逃げろ」との教訓という。

松原さんは「家族を捜す」とも大事」と語り合った参加者に帰つてすぐに行動を起こした学生もいる。

岡山大2年橋崎裕介さん(19)は広島市の土砂災害で、被災者支援を仲間と呼び掛けた。

JR岡山駅前などで6日、15人が参加し募金活動。橋崎さんは「東を訪れ、災害はひとごとではない」と思った。これからも自分たちでできることを考えていきたい」と決意を語った。

している途中に津波に巻き込まれたケースも多かった。あらかじめ避難所を決めておくことが必要だと、家族や地域で災害時にどうすべき行動を共有しておくことが大切」と説いた。

岡山への帰路、バスの中ですぐに「家族を知りに来ないことを伝えたい」「ただ伝えるだけでなく、実際に被災地へ足を運んでも

東日本大震災による津波などで車を失った被災者に車の貸し出しサービスを行っている一般社団法人日本カーシェアリング協会（宮城県石巻市）が、復興支援のボランティアや旅行客らを対象としたレンタカー事業を手掛けている。収益をサービスマンに充てるのが目的。被災地を訪れる岡山県民にも利用を呼び掛けている。車の貸し出しサービスは、共同利用するカーシェアリング向けに2011年11月に始めた。協会によると、仮設住宅の住民グループなどが通院や買い物で活用したり、引きこもっている被災者をドライブに連れ出すなど孤立解消にも役立てているという。

現在、企業や個人から寄付された計65台を保

訪問にレンタカー利用して

有。利用者はガソリン代や保険料といった実費のみを負担する仕組みのため、協会は事務所運賃や車の保管などにかかる必要経費を賄ったため、レンタカー事業を今年1月からスタートさせた。レンタカーは乗用車やミニバンなど5台程度で、料金は6時間3500円から。協会と提携する復興ボランティアやNPO団体の活動に参加するとレンタル料金が半額になるメンバー制度もある。

吉澤武彦代表は「現在、貸し出し用の車が足りなくなっている。もし使っていない車があれば寄付してほしい」と呼び掛けている。問い合わせは日本カーシェアリング協会（025-251453）。（吉尾夏紀）

2015年

(平成27年)

8月21日(金)~25日(火) 岩手県大槌町、山田町へ

車中2泊、青少年の家2泊の計5日間

宿泊場所は、岩手県下閉伊郡山田町の「岩手県立陸中海岸青少年の家」

【行程表】

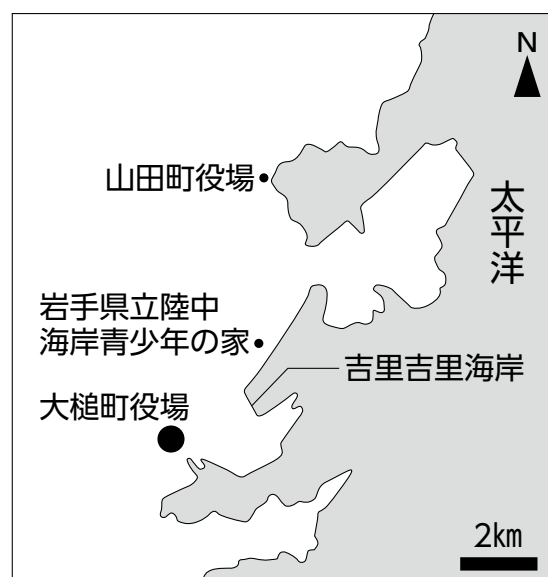
8月21日(金) 13時、岡山市営駅南駐車場集合⇒岡山IC⇒舞鶴若狭自動車道・西紀SA(兵庫県丹波篠山市)⇒舞鶴若狭自動車道・三方五湖PA(福井県若狭町)⇒北陸自動車道・尼御前SA(石川県加賀市)で夕食⇒北陸自動車道・小矢部川SA(富山県小矢部市)／(車中泊)

8月22日(土) 北陸自動車道・米山SA(新潟県柏崎市)⇒東北自動車道⇒岩手県大槌町9時着 大槌町と山田町で2班に分かれ、カキとホタテの養殖業者の手伝いと草取り／山田町の県立陸中海岸青少年の家(泊)

8月23日(日) 山田町⇒大槌町の吉里吉里海岸の清掃／山田町(泊)

8月24日(月) 山田町を出発⇒大槌町⇒金沢地区生活改善センターで交流会と昼食⇒釜石市⇒釜石自動車道・釜石西IC(釜石市)⇒平泉(平泉町)⇒東北自動車道・安達太良SA(福島県本宮市)で夕食／(車中泊)

8月25日(火) 北陸自動車道⇒名神高速道路⇒山陽自動車道⇒岡山IC⇒岡山市営駅南駐車場8時30分着





養殖カキの付着物や汚れを取り除く学生たち＝2015年8月22日、大槌町、澁谷俊彦氏提供

吉里吉里海岸での清掃活動
＝2015年8月23日、大槌町、澁谷俊彦氏提供



大槌町吉里吉里地区の祭り
＝2015年8月23日

自然災害からの学び

～地域住民のつながりと防災力の向上に向けて～

ふじわら やすふみ
藤原 康史 (川崎医療福祉大学1年) 看護師

①派遣で学んだこと、当時の思い出

東日本大震災から4年後、私は岩手県大槌町を訪れました。実際に現地に行ってみると、津波に飲み込まれた町も、被災した人々も、自分たちと何ら変わりのない、同じような日常を送っていた中で起きた震災だったことを実感しました。被災した男性の体験談で、津波が押し寄せてくる中、逃げ遅れた高齢者を背負って高台を目指したという話がありました。男性のとっさの行動により津波に飲まれそうになりながらも、2人の命は助かりました。私は、この話を聴きながら一人暮らしをしている自分の祖母のことを重ねました。多くの方が犠牲になったこの震災は、決して他人事ではないと強く思いました。派遣を通して、災害時に取り残されやすい高齢者や障がい者などの要援護者が安全に避難できるようにするにはどうすればいいのか、若い世代である自分たちができることは何か、これから考えていく必要があると感じました。

②その体験を踏まえて、現在自身で心掛けていること

2018年、岡山県も西日本豪雨による甚大な被害を受けました。岩手県への派遣の経験が後押しとなり、とにかく自分ができることをしてみようと思い、災害ボランティアに参加しました。地域の方に「ありがとう」と感謝されたことが励みになり、それから学生最後の夏休みはほとんど、家屋の解体や片付けなどの手伝いをしました。県外のボランティアの方と一緒に作業することもあり、中には東北や熊本から「自分たちが大変だった時にボランティアに助けてもらったから、今度は手伝いに来ました」と駆けつけてくれる方もいました。困っている時に手助けをすることは、回りまわって自分やその周囲の人を助けることにもつながるんだと実感しました。人間関係が希薄になりやすい現代だからこそ、その輪を作り、顔と顔を合わせてつながれる社会が防災や復興においては重要になると思いました。私自身、これらの体験を踏まえて、今後も各地での復興支援に積極的に携わっていきたいと思っています。現在は看護師として働いているので、医療的な側面からも被災者の支援ができるように、専門性を高めていきたいとも思っています。



③今後の自然災害で被害を最小限に食い止めるための提言、アイデア

- 地域の特性を踏まえた定期的な防災訓練を実施し、個人、地域住民が災害時の想定外をできるだけ回避できるようにする。
- 自主防災組織の強化と自己防災意識の強化；学校の休み期間等を利用して、住民全体で避難場所での宿泊体験を行う（夏、冬）。実際の避難を想定した移動手段や経路の確認、簡単な応急処置、AED（自動体外式除細動器）の練習などを行う。また、避難場所での宿泊を通して、不便な点や今後留意しておきたい点を自己や住民間で共有する機会を作る。

東北の温かさに触れて

もり べ あおい
森部 葵（就実大学1年）会社員

私は、東日本大震災復興ボランティアとして高校生の時に2度、大学生の時に2度、東北に訪問させていただきました。ボランティアに興味を持ったきっかけは、高校生の時にAMDAのスタッフの方がボランティア活動について講演してくださったことです。

当時ボランティアといえば、海外の貧困問題や戦争などに苦しむ海外の方への支援をイメージしていましたが、AMDAは2011年に起きた東日本大震災への支援活動も行っていることを知りました。実際に現地に足を踏み入れた先輩の話を聞き、私も行ってみたい！ と思い、活動に参加しました。

①派遣で学んだこと・当時の思い出

私が東北を初めて訪れたのは2013年。震災から2年が経過してからでした。

草が生い茂る場所も、以前は住宅街だったことや、ゆがんだガードレールがそのままになっていたことなど、震災の爪痕が残る被災地の状況は、今でも忘れられません。

東北の方々との交流を通して、仲良くなった方々が、家族や友人を津波で失ったと語ってくださいました。津波で大事な人を失ったけど、それでも海は大好きなんよ、と笑顔で話をされる姿に心を打たれました。

全校で約7割の児童と教職員が亡くなったという大川小学校（宮城県石巻市）にも訪問させていただきました。

その風景はひどく、前までその場所で子どもたちが元気に過ごしていたとは到底思えないほどでした。そんなデリケートな場所にもかかわらず、遺族の方々がお参りにくる中、毎日のように見知らぬ人が、観光地のように写真を撮って帰っていくのは気持ちのいいことではありません。被災地によっては撮影禁止の場所もあります。被災してない自分には到底、理解しがたい悲しみがたくさんあるということも改めて感じました。

自分の目で見て、感じて学ぶことは本当にたくさんありました。

②その体験を踏まえて、現在、自身で心がけていること

震災を受けた人の悲しみは私がどんなに人に伝えようとしても、「辛さの体験」をお話しすることはできません。数回の訪問で自分が理解できたのは、その悲しみのほんの一部でしかありません。しかし、私自身も「東北に行った体験」はずっと心に残っています。震災を忘れないように心がけています。自然と思い出す、遠くにいる友達を気遣う、そんな気持ちで東北を思うことができるのはボランティアに行く機会をいただけたからです。

社会人になった今、ボランティアを通してできた友人たちと、次はバスで15時間、ではなくリッチに飛行機で東北に旅行行こうねと約束しています。

③今後の自然災害で被害を最小限に食い止めるための提言、アイデア

東北、熊本、広島、岡山、あちこちで起こる災害。

いつ起きてもおかしくない状況で、一人一人がきちんと防災意識を持つことが大事だと思います。少しの地震が起こった時や、大雨が降った時にふと思い出す。私も常に意識出来ているわけではありません。

しかし、近くの避難所やハザードマップをチェックするなど家族や友達、会社の人と共有して、みんなが知っていれば、より迅速な対応ができるのではないかと思います。

みんなで共有、それが一番大切です。



「復興地」という言葉

なかもと ちはる
中本 千晴 (川崎医療福祉大学1年) 看護師

私は高校生の頃にアムダ高校生会に所属していて、震災があって1～2年ほどたって初めて現地に足を踏み入れ、3回ほど現地をボランティア活動で訪れました。

大学生になってからなかなか現地を訪れることができなかった時、岡山経済同友会の派遣募集の案内を見つけてすぐに申し込みをしました。現地での体験を思い出すと、不思議と笑顔ばかりがあふれていました。つらい経験をされた方が私たちに当時の状況を伝えてくださったのですが、どの方もすごく明るく生き生きと接してくださるんです。津波が押し寄せ、車の中にいる家族が目の前で沈むところを見た方、思い出や夢が詰まった家やお店を失った方、いろんな方とお話しました。私だったらきっと立ち直れない程の経験です。それでも、「家族の分まで生きる」「みんなは県外に住む人も多いけど、それでも地元で生きたい」という強い思いが東北の未来を支えていました。

ボランティアに参加した当時、ニュースでは「まだ復興には時間がかかる」「現地の人は苦しんでいる」という暗い報道がされていました。当時の思い出として現地の人の言葉で印象に残っている言葉の一つとして「僕たちは前を向いて進もうとしているのに暗いニュースが報道で取り上げられるのがとてもつらい」という言葉でした。私は、ニュースや新聞だけの情報だけでなく、実際に現地を訪れ、自分の目で確認することの大切さを学びました。

被災状況は報道で把握は出来るかもしれませんが。しかし現地の人がどのような思いで暮らしているかは直接現地を訪れ、現地の方と話すことでしか「本当の意味で理解する」とは言えないのではないのでしょうか。

もう一つ印象的だった言葉があります。私はボランティアを継続していく中で被災地と呼ぶことにどこか違和感を覚えていました。そんな時、現地の人との何気ない会話で「復興地」という言葉が出てきました。被災地という言葉でどこか別世界かのようにならざるに無意識に分けていたことに気付かされました。震災が起こる前は私たちと一緒に暮らしていた大切な地元であること。ボランティアに行くことで新たな発見をすることができました。

私が普段から気をつけるようになったことは、このボランティアの経験で「何か起きたときに人の役に立てるような知識や技術を身につけたい」と感じたことです。私

が看護師を目指したきっかけも高校生の頃に参加した東日本大震災のボランティアでした。「災害は忘れた頃にやってくる」、常に私たちは災害と隣り合わせで生活をしていることを忘れてはなりません。避難経路を確認する、災害時はどこに避難するのか等、まずは自分の身を守ることを意識しています。そして私は医療従事者として震災時には安心していただけるような看護の提供を行いたいと思っています。

正直な話、事故や災害というものは実際にその現場に立ち合った人でしか分からない経験があります。なので実際に自分が経験したことがないと、どこか他人事となってしまうがちです。けれどその時気付くのでは遅く、明日は我が身として捉えられるようにしていくことが大切だと思います。その一つとして震災での出来事を風化させないことがまず第一歩だと思います。岡山県は災害が少ないと言われている分、災害時の知識は浅く、いざという時どのように動いたらいいかわからない人も少なくないと思います。自分や家族、友人の身を守るためにも今住んでいる地域の避難場所や起こりやすい災害について、把握できるようなチラシやホームページを確認しやすいような工夫も必要だと思います。

ボランティア、災害時におけるやさしさ

おかば りん た ろ う
岡馬 凜太郎 (山陽学園大学1年) 岡山県立成徳学校職員

2015年に岩手県大槌町、山田町、2016年に熊本県益城町での活動に参加させてもらった。岩手での活動は震災から5年、熊本での活動は震災後すぐであったため、現地での時間の流れが大きく異なっていた。岡山から西へ東へと離れた地で、日常とはかけ離れた時が流れる地で、活動できたことは今につながる経験となった。

やさしさは必要なのか

ボランティアに必要なのは「やさしさ」である。同時に不必要なものも「やさしさ」である。私が、本活動に参加して最も考えさせられたことの一つだ。

ボランティア、とりわけ災害ボランティアに参加すると周囲の人に言われる言葉は



「やさしい」だ。ボランティア＝やさしさはしばしば共通認識として日常の中にあることが多い。確かに、第三者の立場からすればそれに近い心情を抱くことはあるだろう。しかし、それは日常に身を置く者が持つ共通認識であり、非日常に身を置く者が持ち込んではならない。ここでいう非日常とは、被災にあった地や人に流れる時間のことを指す。現地でよく耳にしたのは「してあげよう」の精神からくる行動はストレスになる、ありがた迷惑なのだということだ。

やさしさは人間関係において必要だと学んできたが、やさしさとはボランティアにおいて最も不必要なものなのだ。

必要なやさしさとは、不必要なやさしさとは何か

「してあげよう」の精神は日常においては必要となるだろう。しかし、非日常になると人の心は感度が増すもので、ささいな言動に反応する。日常でも同じことは言えるが、非日常ではそれは比にならないものになる。不必要なやさしさとは日常におけるやさしさなのだ。だからこそ、前述したように日常を非日常に持ち込んではならないのだ。

では、必要なやさしさとは。それはとても単純である。一緒にいること、共に過ごすことがやさしさとなる。そして何より、忘れないということがやさしさになる。与えられるばかりは甘えになる、そう現地の方が言っていた。与えるだけがやさしさではない、共感ばかりがやさしさではない、ささいな言動は不必要なやさしさにもなり得るが、必要なやさしさともなり得るということ。そうして私たちは、日常においても非日常においてもやさしさとは何かを探し続けるべきだ。

今、やさしさについて考えることができたなら

私たちに災害を止めることはできない。災害を食い止めるようなものは作れない。しかし、私たちは災害後すぐに動くことができる。そのために私たちは今、考えることができる。復興には膨大な時間が必要だ。その時必要なやさしさとは何なのか、1年後と5年後では違っているはずだ。やさしさとは常に変化し続けるのだから。その瞬間だけの付け焼き刃のやさしさでは、誰も救えない。突然日常の全てを持っていかれてしまう。日常の当たり前は非日常では当たり前ではない、という前提でいなければならない。そうすれば、非日常のみならず日常での言動が変わるだろう。そうすれば、やさしさとは何かが見えてくるだろう。

災害を自分事と捉え、普段から備える

みずの まさふみ
水野 雅文 (山陽新聞社報道部記者) 山陽新聞社赤磐支局長

岡山経済同友会が2015年に派遣した最後の東日本大震災復興支援ボランティアに同行し、甚大な津波被害を受けた岩手県大槌町で養殖カキやホタテの水揚げを手伝ったり、被災の爪痕が残る海岸のごみを拾ったりする学生取材した。更地となった大槌町中心部や津波を耐えた建物を見学した際、ある学生が「実際に見ると被害の大きさに圧倒される。テレビや新聞を通じて被災地を見てきたけれど、表面的にしか理解できていなかったのかも」とつぶやいた言葉が印象に残っている。

地元の若者3人を囲み、震災発生直後の体験談も聞いた。「家や車を押し流す真っ黒な津波が目の前に迫り、誰もがパニック状態で国道を走って逃げた」「がれきの下敷きになった人が手を延ばし、『助けて』と声を掛けられた」「高齢女性を背負って逃げる途中、腰まで水に漬かり、墓石にしがみついて耐え続けた」…。人々の叫び声や津波の轟音が聞こえるような生々しい証言に、息を殺して聴き入った。3人は震災を風化させないよう語り継ぎ、命を守るための教訓を広めたいと語った。被災者にとって震災は過去ではなく、これから一生背負っていくものだと実感した。

記者として働き始めて1年足らずの時期だった。一連の取材を通じ、自分自身が災害報道の在り方を再考するきっかけにもなった。

同行取材から3年後、岡山でも未曾有の災害が発生した。18年7月の西日本豪雨。本社経済部に所属していた当時、被災から間もない倉敷市真備町地区に入り、被害状況や復旧作業を取材する機会があった。家屋や道路が泥に覆われ、砂ぼこりが舞う真備のまちを歩きながら、東日本大震災の被災体験を聞いた時のことを思い出した。自分がその時感じたように、豪雨に遭った人が語る水害の恐怖や避難の緊迫感、今までの生活を失った絶望感を少しでも読者に伝えることを意識して取材した。力不足で表現しきれなかった部分が多かったと思うが、被災者に限らず、当事者が持つ言葉の重みをどう伝えるか考えるようになった。遠く離れた二つの被災地を取材した経験は今後も忘れないでいたい。

地球温暖化に伴う異常気象で、豪雨による河川氾濫や土砂災害がいつ、どこで起きてもおかしくない時代になった。近い将来、南海トラフ地震が発生する可能性もある。誰もが被災者になり得ることを心に深く刻まなければならない。住民側は、自分が住む地域の危険度をハザードマップで確認▽災害発生時の行動を家族で共有▽非常食や飲料の常備▽自宅の耐震診断一など、できることから始める。行政や報道は、災害を



自分事として考えてもらう工夫が大切だと思う。地域別に災害のシミュレーション映像を制作してはどうか。CGを使い地形や建物の配置を精巧に再現し、河川氾濫や土砂災害、地震、津波を表現すれば、災害の存在を実感しやすいのでは。聞き飽きたフレーズかもしれないが「災害を自分事と捉え、普段から備えること」が最も大切だと思う。

新聞を含む報道機関は、被災地の大きな動きや震災から〇年目といったニュース性がなければ取り上げる機会が次第に減っていく。一方、報道は防災啓発や災害への注意喚起という役割もあり、繰り返し危険性を報じることが住民の防災意識を向上し得る。全国各地で災害が頻発する中、時間経過と報道頻度のバランスが適切か検証する必要があるかもしれない。岩手県大槌町への同行取材で、多くの被災者から震災の風化を危惧する声を聞いた。被災地に寄り添いつつ、教訓を広く行き渡らせ、結果として大勢の命を救うような報道が求められていると思う。



地元との交流会＝2015年8月23日、大槌町

2015年(平成27年)9月10日 木曜日

山陽新聞

第1版

第1版

第1版

岩手・大槌に派遣 学生ボランティア

復興へ長い道のり実感

東日本大震災の発生から11日で4年半を迎える。岡山経済同友会は国際医療ボランティアAMDA(岡山)の仲介により、今夏も8月22・24日に県内の大学生らによる復興支援ボランティアを岩手県大槌町へ派遣した。同ボランティアは5回目の今回でいったん終了となる。この間、町は何か変わり、何がかわっていないのか。同行取材で見た現地の「今」を報告する。(水野雅文)

「ここに町があったなんて、津波に襲われ、死者・行方不明者が1200人を超え、思うと復興はまだ遠い。た。今なお町人口の約3割が大槌町中心部を一望できる城に当たる3400人ばかり。山公園。就実大2年の大岩賢一(20)は眼下の風景に言葉を失った。

「(ここに町があったなんて、津波に襲われ、死者・行方不明者が1200人を超え、思うと復興はまだ遠い。た。今なお町人口の約3割が大槌町中心部を一望できる城に当たる3400人ばかり。山公園。就実大2年の大岩賢一(20)は眼下の風景に言葉を失った。

川崎医療福祉大1年の中本千晴さん(18)は「建設業の人手不足で復興が鈍っている」と聞かされた。発生から4年以上たっても、震災の跡はこんなに残っているのに」とつぶやいた。

前日役には、宿舎で20代の被災者3人から震災の様子を聞いた。



城山公園から見下ろした大槌町中心部。今なお被災地が広がる。



カキの水揚げ作業を手伝う学生ボランティア。被災者の言葉に復興への力を感じた。

海岸清掃や水揚げ作業 被災者の力強さも

「あちこちの倒壊した家屋のそばで助けを求める声が聞こえた。私たちの経験を無駄にしないで、普段から災害の際に生き延びる方法を考えてほしい」。

渡辺賢也さん(28)の話しは、生き残った者としての使命感を感じた。

確実に進む

被災者の力強さも垣間見えることができた。22日に訪れた同町安渡地区の漁港。震災で船や作業小屋は壊滅的な被害を受け、新おつち漁協は組合員約860人から300人に激減したが、懸命に立ち上がっていた。

もなる。学んだことを岡山で広めるのもボランティアの役目」。被災地を心に焼き付け、震災を忘れないことが何より大切なのだと気付かされた。

▽「家族や友人と災害が起きたときの行動を話し合おう」「風化を防ぐため、被災地の情報を発信する活動はできないか」。帰りのバスの中、意見を交わす学生たちを心強く感じた。5回に及んだ同友会のボランティア派遣は一区切りとなるが、被災地への思いはつないでいきたい。(水野雅文)

取材メモ

▽…4年半を経た被災地を見て、学生ボランティアたちは多くのことを感じ取ったことだろう。自分たちに何ができるか、悩みが深まったかもしれない。岡山大4年の金城奈々恵さん(23)は「被災地とどう向き合うべきか考えたい」と話していたが、答えは見つかったのだろうか。

▼…一つのヒントを与えてくれたのは、被災体験を話してくれた渡辺さんだった。「私たちが重ねた失敗や苦労は、皆さんの見本に

養殖カキやホタテの水揚げ作業を手伝った学生25人は、般に付着した貝や海藻を取り除き、重さによって分別した。作業に慣れるにつれ、組合員とも打ち解けた。

2015年9月10日付 山陽新聞記事

2016年 (平成28年)

5月2日(月)~6日(金) 熊本県^{かみ まし き ぐん まし き まち}上益城郡益城町へ

車中2泊、ホテル2泊の計5日間

宿泊場所は、菊池市の菊池グランドホテル

【行程表】

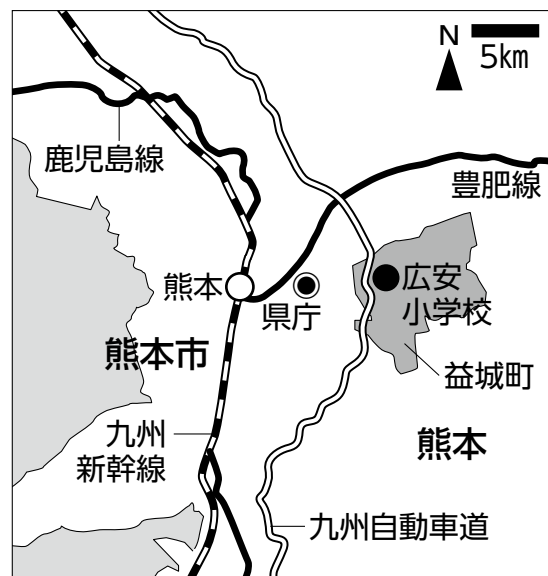
5月2日(月) 20時30分、岡山市営駅南駐車場に集合⇒21時、出発⇒岡山IC
⇒山陽自動車道⇒九州自動車道／(車中泊)

5月3日(火) 九州自動車道・北熊本SA(熊本市)⇒JR熊本駅で黒住宗道団長が
合流⇒9時、熊本県益城町に到着⇒同町立広安小学校の清掃・
片付け／菊池市の菊池グランドホテル(泊)

5月4日(水) 広安小学校でトイレ掃除、運動場の整備など／菊池グランドホテル
(泊)

5月5日(木) 広安小学校の体育館の整備、段ボールベッドの組み立て⇒15時、
広安小学校を出発⇒九
州自動車道／(車中泊)

5月6日(金) 山陽自動車道⇒6時、
岡山市営駅南駐車場に
到着





熊本地震の復興支援のため、ボランティア派遣を協議する萩原邦章、松田久代表幹事（左から3、4人目）
＝2016年4月25日、岡山市の岡山経済同友会事務局

熊本地震が起きて急きょ結成されたボランティア学生たちの出発式＝2016年5月2日夜、岡山市宮駅南駐車場、澁谷俊彦氏提供



車窓から見ても悲惨な被害状況＝2016年5月3日、熊本県益城町、澁谷俊彦氏提供



平常時からの備えを

しみず きょう
清水 響 (旧姓：渡辺) (岡山県立大学4年) 公務員

熊本地震から約2週間が経過した2016年5月2日～6日まで、AMDAが拠点とする益城町立広安小学校での復興支援ボランティアに参加しました。

山形県出身の私は高校時代、東日本大震災を経験し、身近に避難者や家族を亡くした知り合いがいました。しかし、高校生であった当時は何の復興支援もできなかったという思いがありました。

現地で見た光景

益城町で見た当時の光景は今でも覚えています。家々の倒壊を目にして、現実だと受け入れるには大変時間がかかりました。

小学校での私たちの活動は、仮設トイレ等の共用スペースの衛生管理や、小学校再開に向け、避難所となっている校舎内の清掃でした。

仮設トイレを清掃していると、避難者から「トイレがきれいだと気持ちいい」と声をかけていただきました。鋭い臭いのした校舎内のトイレは雨水を使用して清掃しました。清掃活動や避難者との交流を通じ、感染症や脱水症による健康被害を防ぐため、停電・断水の中であっても、工夫して衛生的なトイレを保つ必要があると感じました。

校舎内の清掃中には、避難者からボランティア活動に対する不満の声が挙がりました。過酷な現状を受け入れながらも先が見えない、つらい感情にある避難者にとって、私たちの活動がかえって精神的苦痛となることを知りました。自分にできる復興支援をしたいという思いでボランティアに参加しましたが、思うように支援できない現実がありました。

一方で、広安小学校の校長先生が、避難者と私たちボランティアの間に入り、調整してくださる場面がありました。校長先生をはじめ、自治体職員等、自らが被災者でありながら地域のために懸命に働く方々の姿を目にしました。まさに公助の重要性を知った瞬間でした。

地元山形に戻ってから

大学卒業後は地元山形県に戻り、県職員として働いています。4年間、保健所に勤

務し、この4月から病院に異動となりました。保健所に勤務していた2019年6月には、山形県内で最大震度6弱を観測した山形県沖地震を経験しました。山形県沖地震では、津波注意報が発表された際、地域住民が声を掛け合いながら避難したと聞いています。幸いにも死者や家屋の全壊はありませんでした。また、保健所、病院において、新型コロナウイルス感染症対応に従事しています。さまざまな有事に直面し、地域住民や患者さんの安全を守るため、私には何ができるのだろうかと思問することが多くなりました。益城町の方々のように、地域に貢献できる人材になることは、私の生涯のテーマになっています。

病院においては災害時であっても、できる限り平常時と同じ医療の提供が求められます。平常時にできないことは有事にも困難であり、平常時から有事を想定した備えが大切であると感じています。しかし、実際には日々の業務に追われ、恥ずかしながら今回の寄稿依頼を受け、院内の災害対応について見直したところです。自然災害の被害を最小限に食い止めるためには、災害について考えるきっかけを、日頃から多く持つことが大切であると感じました。日頃からの備えにより、自助、共助、公助それぞれが災害対応力を高める必要があると思います。

「備え」も「もしも」も身近なところから

ひろはた としき
廣畑 利季（就実大学2年）会社員

私は2016年に熊本地震の復興ボランティアとして参加させていただきました。その当時私が参加させていただいた動機は、自身の防災意識を高めるためでした。普段、災害の少ない岡山という土地に生まれ育ち、生活してきた私にとってこの震災もどこか他人事のように感じてしまっていました。しかし、友人がボランティアに参加した話を聞くなどして、私自身も実際に災害現場に赴くことで、防災意識の低い私もきっと改めることができるのではないかと思います、参加を決意しました。

①派遣で学んだこと



当時ボランティアでは、避難所となっている広安小学校へ向かい、そこでは仮設トイレの清掃や、図書館の本棚の整理、グラウンドの整備、避難所にするための体育館の清掃などを行いました。その中で一番印象に残っているのが、仮設トイレの清掃でした。

現地で指揮を執っていたボランティアの方から、トイレが汚いことは、一番被災者にとってストレスになり、災害以外の感染症も引き起こす可能性があるという説明を受けました。それを受けて、もし自分が被災者の立場だった場合、トイレが汚ければ、利用したいとは思わないし、利用したとしても積極的には利用しないだろうと感じました。

こういった身近な不便や不快は、当事者にとっての一番のストレスになるだけでなく、二次的な感染症を防ぐためにも公衆衛生を保つことは重要だと学びました。

また、グラウンドの整備を行っていた時には、さまざまなボランティアグループが、同じ方向を向いて協力し合ってグラウンド整備を行ったことも印象的でした。住む場所は違っても、同じ目的を持つ者同士、道具を貸し合い作業していたことが、より早く復興したいとの気持ちを一つにした瞬間だと感じました。

②経験を踏まえ、現在自分自身が心掛けていること

熊本地震の復興ボランティアを経験した後、私が生まれ育った岡山でも大雨による災害が起きました。自宅への被害はなかったものの、私の住む地域でも土砂崩れが起きました。重機の入ることができない箇所での泥の撤去作業なども行いました。困ったときはお互い様の精神で協力し、撤去することができました。

就職して高知県に赴任した際には、県の防災意識の高さに驚嘆し、自宅でも、飲み水の確保をしたり、いざという時の非常食を確保したりしています。地域住民との協力は、重要ではありますが、まずは個人単位からできる災害への備えを行うようになりました。

実際に災害が発生したときの避難ルートを頭の中でシミュレーションするなどして、日々の防災意識は確実に高まっていると感じています。

③今後の自然災害で被害を最小限に抑えるためのアイデア、提言

毎年災害に見舞われる日本では、日々もしもの時のために備えておくことが何より重要であると考えます。しかし、若い世代はなかなか非常用袋を準備できないことも多いのではないのでしょうか。若者の趣味の中で、防災につながることであれば一番良いのではないかと考えます。最近ではアウトドアな趣味が流行^{はや}っている中で、防災

にも目を向けてもらえるような取り組みができればいいなと考えております。

ボランティアを通して学んだこと

たなべ しゅういち
田部 修一 (美作大学4年) 事務職員

あの日から早いもので5年の歳月がたちました。あの日のことは今でも忘れることはありません。またこのような機会をいただけるとは社会人になってから思いもしませんでした。至らぬところも多々あるかとは思いますが、私なりにあの日学んだこと等書かせていただけたらと思います。

日数としては短い期間ではありましたが、その一日一日は私にとって忘れることができないほど衝撃的な光景でありました。TV・報道で見ていた光景とはまるで違う内情。自分が少しでも力になればと思い参加した支援活動。一気に不安と心配が勝りました。それでもやるしかないその一心だったと当時の自分は思います。現実と想像は違う。けれどもその違いという戸惑いの中にも一つだけ変わらぬものがありました。それは「心」です。自衛隊の方・学校の職員。職種は違えど「皆」が「皆」のために自分ができる最大限のことを雨が降る中必死に活動していた光景。「助け合い」「人のため心腐らせず・心を生かす」この二つを学ばせていただきました。

思い出に残っていることをあげるとするならば、一緒に行った仲間との思い出もたくさんありますが、中でもグラウンドの砂をならした日。最後の仕上げにきれいな夕日を背に地元の子供たちが笑顔で走ってそれを見て笑顔の親御さん。あの日の光景は、大切な思い出の一つです。

あれから5年。私自身もいろいろありました。後悔・つらく、苦しいこと。楽しいこと忘れたい過去・大切にしたい過去。いろいろ経験をさせていただく中でやはりあの日の体験を踏まえ、人に感謝することは少しでも心がけていこうと日々過ごしています。まだまだ経験も浅く、迷惑ばかりかけてはいますが、それでも「ありがとうございます」。それだけでも言える日々が送れるよう努めていけたらと微力ながら感じています。

最後に今後の自然災害で被害を最小限に食い止めるための提言・アイデアをとのこ



とで、自分なりに感じることは、「どんな提言・アイデアがあっても正解はない」ということです。ある程度の基準・提言が提示され、それを守って行動に移していくこと。簡単そうに見えても非常に難しいことなのではと思います。皆が意識を日頃からもって生活をする。これも正しいとは言えず。正解を模索する中で少しでもいいなと思ったことを実践してみる。これも正しいかといわれてみれば自信をもって「正しい」とは言えないなと感じます。光が見えない中で少しでも光が見えるようお互いに助け合う。困っている人がいたら声をかける。簡単そうで難しい。勇気を持つことの大切さ。一人でも少しでも声をかけることのできる勇気を持てる人が増えることがもしかすると最小限に食い止めることができるのかもしれませんが。

困難の中に人を知る

あきやま ひろし
秋山 広司（岡山理科大学2年）会社員

熊本地震のボランティアに参加してから5年が過ぎた。記憶の多くが薄れてしまったなか、強く感情を揺さぶられた出来事は今でもはっきりと覚えている。

「少しでも被災地の方々の役に立ちたい」。強い意気込みで参加した私はバスの窓から見える町の惨状に圧倒されていた。ひび割れ裂けた家、倒れた家、つぶれた家、灯籠の倒れた神社、それらを覆う数々のブルーシート。活動場所の広安小学校にたどり着いても現実の出来事だと思えず途方に暮れかけていた。しかし来たからには呆けてばかりではダメだと目の前の仕事に取り組んでいると幾分か過酷な現実を忘れられた。トイレ掃除、車両誘導、物資の運搬、清掃などさまざまなことに取り組んだ。

活動中、ボランティア仲間が懸命に黙々と働く姿や互いに励ましあい助けあう声に力をもらったことがあった。半面、一部の人々の不用意な言動や身勝手さに憤りを覚える場面もあった。自ら進んで被災地へ入った人にそのような言動が見られたことに失望を覚えたが、これらの出来事から被災地という物資や環境、人手などさまざまなものが制限された非日常的な環境下では各人の思いや気遣い、決断がそれぞれのしぐさや表情、振る舞いにはっきりと反映され、ひいては普段隠れている各人の長所や短所、

尊ぶべきところや改めるべきところが^{あら}顕わになるのだと気づいた。

最近、そのことをあらためて認識する出来事があった。東京五輪である。今回私はボランティアではなく仕事で五輪の物流に携わったのだが、非常に厳しく過酷な仕事だった。コロナの影響、開催決定判断の遅れ等、あらゆるイレギュラーのあおりを受け、開催までそして開催後も日々困難と挑戦の連続であった。時間、人手、機材などあらゆるリソースが制限され、五輪に関わる誰もが肉体的、精神的な限界と戦っていた。そのような状況下で官民、また身分・国籍・年齢・性別を問わずありとあらゆる人と接したが、やはり尊敬すべき振る舞いの人もいれば恥ずべき振る舞いの人もいた。このことからつらく過酷な状況下でこそ人の真価が発揮される、長所も短所も顕わになるのだと再認識し、自分は恥ずべき振る舞いはするまいと、謙虚で辛抱強く、他人に進んで手を差し伸べることのできる人間であろうとあらためて心に誓った。

地震に限らず今後も災害は身近なものであり続けるだろう。だが冒頭で述べた通り人間は忘れる生き物だ。どれだけ衝撃を受けてもどんな恐怖を覚えても時がたてば薄れて忘れてしまう。ではどうすればよいか。忘れれば都度思い出せばよいと思う。再度学ばばよいと思う。そのためにマスメディアにせよ、口伝えにせよ経験を、思いを絶えず共有していくことが大切なのではないだろうか。私もこの寄稿依頼をうけ災害への意識、備えの必要性を再認識した。益城町で体験したこと、そこで感じた思いを、気づきと併せて今後も発信、共有していきたい。

忘れがたきふるさと ~ローカルイニシアチブがつなぐもの

なんば たえ
難波 妙 特定非営利活動法人 AMDA 理事

熊本地震から5年半が経過した2021年10月10日、私は、熊本地震の震源地となった益城町でこの原稿を書いています。母の米寿の祝いをするため戻ってきました。2016年、熊本地震の直後、母は時折、全壊した家の中に潜り込んでテレビを観ていました。悲惨な現状の中、無くした日常にすぎる老齢の母の姿に私は胸がつぶれそうでした。避難所と仮設住宅で5年暮らし、孤独と戦い、よくぞここまで生き延びてくれたと思っています。



前震直後の2016年4月15日、私は、被災地となった自分の故郷の悲惨な現状を目の当たりにし、言葉を失いました。私の母校の広安小学校の校歌は、益城町を「美しき里」とうたっています。「被災地」となったふるさと益城町。前震直後、自宅の母の枕に掛け時計が飛んで落ちていたのを見て、「母は、死んでいたかもしれない」と思いました。母が命拾いしたことに感謝して、私は、「AMDAの支援活動をするしかない」と頭を切り替え、地元での調整に入りました。その日の夜には、総社市とともにAMDAの医療支援のメンバーが駆けつけました。そのメンバーとともに、誰もが予想だにしなかった2度目の震度7の本震に見舞われました。後から支援に入ったメンバーの誰かが「死んでいるかもしれない」という恐怖は、全員の安否確認を終えるまでは、本震をはるかに超えるものでした。こうして私は、「支援をする側」と「される側」を同時に体験することになりました。

AMDAで災害支援を行う際に常に基本としていることは、ローカルイニシアチブです。被災地の物の見方や考え方を尊重し、被災地の人たちが一番大切な役割を担っているという現地主導の考え方です。混沌とした被災直後の人々は、不安と恐怖の中、外からの支援者に対しての疑念は少なからず持っています。その疑念を抱かせることなく、被災地の人間関係を最大限に生かすために、AMDAは常にローカルイニシアチブで活動を行ってきました。これまでもフィリピンで災害が起きた時には、岡山のフィリピーノサークルの方々に協力を仰ぎ、フィリピン出身者とともに被災地に向かい、現地の言葉で避難者の中に入って支援活動を行いました。インドネシアでは、インドネシアの医師である支部長と医学生がインドネシア語で診療し、東日本大震災の時にも、被災地岩手県大槌町の方々自らが中心となって、避難所を支えました。このように被災者との間に築かれた「信頼」が、支援活動の一番の妨げである被災者の疑念を解消していきました。国内外でのローカルイニシアチブの大切さを幾度となく経験してきた私でしたが、熊本地震では、最初から「疑念の壁」はありませんでした。

ただ、私が、ローカルイニシアチブを根底からの願いとして求める瞬間がありました。それは、復興に向けた国の行政担当者との避難所会議の時のことです。復興計画が説明され、現実の厳しさを突きつけられ、気落ちするふるさとの人たちを目の当たりにした時でした。会議終了の直前、私は、「益城の底力をともに信じたい」と訴えました。支援頼みの生活に流されようとしているふるさとの人たちを見るのがつらかったのです。これは避難所の方々との信頼関係ができていると信じていたからこそ私の心からの叫びでした。その後、広安小学校の避難所は避難者の方で自主的に運営され、AMDAは避難所が閉所する8月30日まで、熊本の鍼灸^{しんきゅう}チームによる災害鍼灸支援活動を通して、避難所の方々を支えました。

この過程において、益城町の復興の担い手として大きな役割を果たしたのが大学コ

ンソーシアム岡山でした。避難所を追われるのではないかという避難者から、不安な感情をぶつけられながらも、メンバーの学生は一丸となって広安小学校のすべての校舎の掃除をしてくれました。断水の中、避難所の人たちが湧き水を運んで、彼らの清掃活動を支えました。車中泊の車と雨で泥沼になった校庭もサッカーができるように整地してくれました。「大学コンソーシアム岡山の支援がなければ、学校の再開はありえなかった」と、当時の広安小学校の田中校長先生からこぼれた一言を私は忘れることはないでしょう。日常の学校生活を取り戻すことを一番に考えていた校長先生の思いを尊重したローカルイニシアチブでした。

あれから5年半、新しい復興住宅からは、阿蘇山が一望できます。美しき里、益城町は、多くの方々の力を借りながら、復興への歩みを着実に進めています。2018年の西日本豪雨の際には、当時の広安小学校の児童を含めた益城町からのボランティアが、総社市に駆けつけてくれたことをここに記さずにはられません。支援された側が、時を越えて支援する側となりました。これは、ローカルイニシアチブで立ち上がった、復興のあかしであると、私は心からの感動を覚えました。被災地の人たちの底力を信じる、「ローカルイニシアチブ」は、人と人の心をつなぎ、目に見える形で昇華するということを実感しました。これこそがふるさとを忘れがたきものとする原点です。今、感謝とともに私の心に深く刻まれています。

十二分な受け入れ態勢に感謝

しぶや としひこ
澁谷 俊彦 (2012年度～19年度大学コンソーシアム岡山地域貢献委員長) 山陽学園大学地域マネジメント学部教授

2011年東日本大震災の復興支援のため、岡山経済同友会が学生ボランティア派遣を立案されたことは、大学コンソーシアム岡山にとって実にありがたい企画でした。学生たちからは災害復興ボランティアに参加したいという熱意が高まる一方、被災地での受け入れ態勢・安全確保、岡山からは遠隔の地というハードルがありました。幸いにも岡山経済同友会に費用の大半をご負担いただき、一部のみ学生負担としていただくことで学生に呼びかけやすくなりました。

黒住宗道団長のリーダーシップと特定非営利活動法人AMDAの現地での受け入れのご尽力により、発災の5カ月後の8月という早い時期に学生たちを派遣することがで



きました。送り出す側としては「花巻に宿舍を取って現地までのピストン移動」とか「洗濯はできないから持ち帰るように」といった学生たちへの事前通知から、現地の状況の厳しさを感じました。

第1回の困難さについては、黒住団長から大学コンソーシアム会議への報告や、複数大学で開催した共同講義でレクチャーしていただき、各大学で語り継いでいます。

私自身は2015年8月の第5回派遣に同行することができました。地震発生から5年経過し、復興事業も進み、被災地の状況は発災直後とは状況が大きく変わっていましたが、AMDAが拠点を置かれていた岩手県大槌町の漁港で、カキ・ホタテ・ホヤ養殖の体験や現地の方々から災害時の体験談をうかがうことができました。学生たちは「津波に追われながらおばあさんを背負って墓地の斜面を丘の上に向かって駆け上った」という青年の話や、「園児たちを急な山道に引っ張り上げた」という保育スタッフの体験に真剣に耳を傾けていました。生活・生業の再建だけでなく心理面の回復についても、学生たちは現地に立たないと理解できないことを吸収できたと感じております。

岡山経済同友会から「熊本地震4月14日の発災から間もない5月の連休に、被災地に学生ボランティアを派遣したい」との提案があったときには正直あわてました。新学期早々でもあり募集期間も限られていたからです。AMDAが避難所を運営されていた熊本県益城町立広安小学校が連休明けに授業を再開することになり、構内復旧のためボランティア活動の要請が来たとのことでした。経済同友会から連絡を受けた大学コンソーシアム岡山は急きょボランティア募集を行い、集まった学生を送り出しました。

私の状況を申しますと、山陽学園大学から参加を予定していた学生がけがをしてしまい、急きょ私が学生の代理として参加させていただくことになりました。バスが益城町に近づくと車窓からは大きく傾いた住宅が見えだし、被害の深刻さを実感しました。広安小学校に到着するとボランティアリーダーから避難所でのルールと役割分担が示されました。私たちの班の配属された持ち場は仮設トイレの掃除と自衛隊給水車からの手洗い水運びでした。学生たちはテキパキと掃除をしていきます。立派です。格好いいだけがボランティア活動ではないのです。DMATや環境省の腕章を付けた調査団が、学生たちが磨き上げた仮設トイレを確認し、納得された顔で写真撮影をされました。トイレでの感染症防止が避難所運営の重要ポイントだとあらためて気づいた瞬間でした。

宿舍は熊本市の北にある菊池市に2泊取っていただき、ピストンで広安小学校へ通いました。渋滞はありましたが道路交通は機能していました。

学生たちの活動はこの他にも、校舎の廊下の土足から上履きへの切り替え掃除、図書室の書架から飛び出した本の整理再収納、自動車が入り^{わだち}轍でボコボコになったグラウンド^{なら}を均しました。体育館では地元のボランティアと力を合わせて、救援物資のカッ

プ麺・ジュース・衛生用品等の分別再収納、教室から体育館に移る避難者のための段ボールベッドの組み立てと、現地を離れる直前まで時間を惜しんでの大活躍でした。

震災直後にもかかわらず、岡山経済同友会・AMDA・広安小学校の十二分な受け入れ態勢の中でボランティア活動をさせていただいたことは、参加学生にとっては大きな糧になるとともに、さわやかな学生たちの活動は被災地の方々のご支援になったと信じております。震災復興支援のための学生ボランティア派遣を企画実施いただいた岡山経済同友会に感謝いたします。

本震から16日後に熊本入り

よこやま ひろし
横山 博 元萩原工業顧問

※横山さんは2016年の熊本地震でのボランティア派遣に、岡山経済同友会の一員として、同行されました。同年5月刊行の会報「おかやま経済同友」に横山さんが寄せた記事を抜粋して転載させていただきました。

熊本県熊本地方で、2016年4月14日（木）午後9時26分に前震、16日（土）午前1時25分に本震と、気象庁震度階級では最も大きい震度7を観測する地震が発生、その後も余震が相次いでいる。激震地となった益城町で4月15日（金）から緊急支援活動を行っていた特定非営利活動法人アムダより要請を受け、一般社団法人岡山経済同友会は大学コンソーシアム岡山の協力を得て、5月2日（月）から6日（金）まで、県内10大学2短大から学生ボランティア24人を同町へ貸し切りバスで緊急派遣、車中泊を除く実質3日間、被災者の避難所となっていた広安小学校で授業再開に向けての清掃作業や運動場整備作業等を中心にボランティア活動を行った。

実質2日間の募集

4月23日（土）、アムダより当会へ、益城町へのボランティア派遣の要請があり、萩原邦章、松田久両代表幹事、原憲一教育問題委員長らが電話等で協議、24日（日）、学生ボランティア25人を派遣することを決めた。25日（月）、当会事務局にて萩原、



松田両代表幹事や大学コンソーシアム岡山、アムダ、リョービツアーズの各担当者が一堂に会し、実務協議を行った。

2015年8月の東日本大震災復興支援学生ボランティアに参加した大学をベースとして参加を募り、3日後の4月28日（木）の午後3時を締め切りとし、実質2日間で応募者約40人から学生ボランティア24人（男子12人、女子12人）を決定した。一方、当会事務局では出発日の午後までにT字型ほうき20本、ドライモップ14本、薄ゴム手袋200枚、ぞうきん50枚、電気掃除機6台を集め、また、会員企業の(株)丸五からゴム引き軍手60双、両備ホールディングス(株)からマスク数百枚、萩原工業(株)からブルーシート30枚と土のう袋200枚をバスに積み込めるよう準備した。

無残な家屋に心を痛める

出発式は5月2日午後9時前、岡山市北区の市営駅南駐車場で行われ、萩原代表幹事は「わずか2日間のボランティア募集に応募してくれ、その被災地復興への心遣いと勇気に敬意を表します」とあいさつ、松田代表幹事からも「現地の地震は収まっていないので気を付けて。安全第一をお願いします」と激励のあいさつがあった。

バスは5月3日午前4時ごろには九州自動車道北熊本サービスエリア（熊本市）に到着。同8時過ぎに熊本駅前に着き、ここで団長を務める黒住宗道教育問題委員会副委員長をピックアップした。黒住氏は、過去5年間、東日本大震災復興支援ボランティアを引率した経験をもとに、ボランティアの心構えなどを説明した。熊本市内では車窓から地震の傷跡が散見され、さらに益城町に入ると1階部分がつぶれたり、傾いたりした無惨な家屋を多く見受け、目を覆いたくなる光景に、カメラを向けるのをためらった。目的地の広安小学校には大型バスは入れず、近くの県道沿いでアムダの方の出迎えを受け雨の中、約500mを歩き9時過ぎに同小学校に到着した。

同小学校は5月9日から授業が再開する。従ってそれに向けての活動が中心ではあったが、約300人の避難所であり、避難者にかかわる活動も含まれた。活動の全体指揮は、同小学校の田中校長が執り、担当個所の数人の各リーダーは各地のボランティアを経験した、いわばボランティアのプロ的存在で、その人たちから細かな指示を受けた。なお、5月の連休期間中のボランティアセンターでの熊本県外者のボランティア受け入れは中止していたとのことであった。

活動内容は、図書館の本の片付け、教室棟の廊下の清掃、既設トイレの清掃、仮設トイレの清掃、駐車場の入車整理、手洗い場のポリタンクへの水の補給、運動場の整備、段ボールベッドの組み立て、体育館の片付け・清掃等であった。我々が活動した期間中の同小学校のライフラインは、電気は通常通り使用可能、水道は断水により自衛隊

の給水車が体育館横に配置され、水は容器を持ち給水車まで取りにいかないと使用できない状況であった。

この3日間の主たる活動内容について、エピソードを交えふれておきたい。

教室棟の廊下の清掃

教室は避難所となっており、避難者が居る中での作業であった。廊下は避難所にしたとき土足歩行を余儀なくされたようだ。授業再開に向け、この廊下の清掃指示により、小学校教員とボランティアの大半が掃除にかかった。まずほうきで粗ゴミ掃き、細かいほこりを掃除機で吸い取り、モップで拭き、最後にぞうきん拭き仕上げする作業であり、学生のみならず真剣に取り組み、ぞうきんがけも丁寧に泥水化したバケツでのぞうきん洗いもいとわなかった。

作業中、避難所である教室には避難者がおられ、その視線が冷たいように感じ、気がかりであったが、それが的中する事態が程なく起きた。

活動に入る前、現地アムダの調整員からも注意を受けていたが、被災地は見世物でなく、自分たちの活動記録以外は写真を撮らないように、まして被災者や被災者の車、他のボランティアは絶対に撮らないでくださいといわれていた。

時折、廊下を通る被災者の方から、「ご苦労さまです」の声は聞いたが、一部の被災者から、「掃除機の音がうるさい」「掃除後は土足厳禁と言われた、不便になる」「我々を別な所へ移そうとしているのか」などの不満が出て、避難所の運営側と大声でのいざこざが起きた。これは、被災者の方へのコミュニケーション不足だったのだろう。「被災当初は、家は壊れたが命があったことでの喜びがあったが、20日ほどたつと、これからの不安が募る時期。被災者の方々へは細心の配慮が必要」と、ある経験者の方は語っていた。

トイレ掃除

トイレは既設と仮設があり、既設は断水のため使用できず、仮設が使用されていた。1カ所に約10ユニットが置かれ、校内に2カ所設置されていた。構造は全て和式、水洗（1回コップ約1杯）汲み取り式、3時間に1回の清掃を義務付けていた。

理由は、①ウイルスによる感染症の防止、②汚いと被災者の方がトイレに行きたくなく、水分を控え脱水症状を起こしたり食事制限をしたりするようになるから一と、経験豊富なボランティアリーダーから説明があった。



掃除方法はまず、ドアの取っ手に消毒液をスプレーし、きれいなぞうきんで拭きとる。次に内壁下部・便器・床に消毒液をスプレーし、便器内面はブラシで掃除、床と便器に如雨露^{じょうろ}で水をかけ洗い流し、ぞうきんで、内壁下部を拭き、便器外を拭き、床を拭き、最後に床と便器に再び如雨露で水をかける作業であった。

この清掃作業中に被災者の方が使用に來られたときも、作業を中断して学生から、「どうぞお使いください」とやさしい言葉が発せられ、済めたら、「きれいだった」「気持ちよく使えた」「ありがとう」などの言葉が返り、うれしく活動への意欲がより湧いたとのことであった。2日目だったが、環境省の方が3人、仮設トイレの運用状況を検査にこられ、「とってもきれいです」との言葉に、また、やりがいを感じた学生諸君であった。



仮設トイレを清掃する学生たち

仮設トイレの対面には手洗い場が設けられ、20リットル入りのポリタンクの口に簡易蛇口を取り付けて横向きに置いた形態であり、水位が減ると補充が必要で、自衛隊の給水車まで交換用のポリタンクを台車に乗せ、水をもらいに行った。ここでびっくりしたことがあった。ポリタンクは、手洗いをするため、地面から70cmほどの少し高い位置に置いていたが、細身の女子が、満タンに近いタンクを持ち上げ載せていた。女性にとって、約20kgを70cm高さの台へ腕力のみで載せるのはかなりきつい、周囲に何人かいた誰にも助けを求めずであった。ボランティアに対する本気度が垣間見られた一瞬であった。



手洗い場のポリタンクへの水の補給

運動場の整備

ボランティア期間中、広安小学校の運動場の約半分は被災者の車で埋まり、残り半分は運動場として使える状況にあったが、雨天の車の出入りによりタイヤによる凸凹が激しく、凸凹差は10cmを越すようなところもあり、授業再開に向け、グラウンド整備の指示により、大勢が汗を流した。あまりにも凹のところへは軽トラ（企業人が主体で）やりやカーで土を運び、凸の部分は削り、トンボをかけ、小石を拾い、土を入れたところはみんなの足で踏み固めた。

その足踏みのところへ被災した子どもたちが10人ほどやって来て、かけっこや鬼ごっこをはじめ、学生諸君も数人汗まみれになりながら一緒に走った。子どもたちからは笑顔がこぼれ、天真な姿を見せてくれた。

子どもたちからは、「グラウンドをきれいにしてくれてありがとう」「走ってもいいの？ 走りたかったんだ」と言われ、学生のひとりには、「涙が出そうになり、やってよかった」とうれしさを語っていたが、他にも同じ感覚を味わった人は少なくなかったようだ。

「震災後、子どもたちのあんな笑顔を見たのは初めてでした」という田中校長の言葉に、地震の揺れや家の半壊・倒壊は子どもたちの心を大きく傷付けたのだらうと思いを巡らすと、目頭が熱くなった。



荒れた運動場の整備

体育館の片付け・清掃

3日目の最終日5月5日は、体育館内の作業が主体となった。9日からの授業の再開に備え、被災者が避難所となっている教室から新たな避難所となる体育館へ移動のための準備作業であった。

まずは、2階に相当する高さの窓際にあるキャットウォーク部分の清掃を行い、ここへ体育館内に置いてあった跳び箱やマット等の備品すべてを移動した。床のスペースが空くごとにほうきで掃き、掃除機で吸い、ぞうきんがけ作業を繰り返した。ぞう



きんを両手で床に押え付け、裸足で小走りに一気に約30mを拭きあげるきつい作業をこなした。



体育館でぞうきんがけ。一気に30m

体育館での避難所は、段ボールベッドを設置するらしく、その資材が持ち込まれ、この組み立てにも携わった。誰も指示しないのに、組み立て効率が上がるように材料を供給する人、箱を組み立てる人、ガムテープを貼る人、出来た箱を整とんして積み上げる人と、数分のうちに最高効率が得られる組み立て体制が出来上がり、近くで同作業をしていた現地のボランティアを圧倒した。

次に、ステージエリアに山のように積まれていた大量の支援物資（食品・飲料や衛生用品等々）をいったん、体育館内に移動し、そのスペースを掃き、吸い、拭き掃除し、品種別に仕分けしながら積み込む作業であった。当日のボランティアのほぼ全員の約70人が携わり、支援物資の移動－清掃－積み込みの作業は、約2時間かかり、その支援物資の量は半端ではなかった。



汗だくで段ボールベッドの組み立て

×

×

×

大きな評価を受ける

5月5日午後3時、作業途中であったが、我々が帰路につくために終礼が開かれ、田中校長が感謝の言葉の中で「岡山の皆さんが来てくれなかったら、9日からの授業

再開は無理だったと思います」と述べられ、学生たちの活躍が大きく評価された。その終了時、現地ボランティアの方々から我々に対し自然発生的に拍手が湧き起こり、学生たちも心地よい感動を味わったことと思う。

学生たちは、募集期間2日間で集まっただけにボランティア活動に対して信念を持って参加しており、どんな作業内容であっても男女問わず積極的に行動した。積極さが半端でなかった。どんな作業内容であっても、誰一人後ろに下がることはなく、我先にやろうとする。2日目の田中校長先生の朝礼からは、我々に対し信頼感のある旨の作業指示になり、2日目、3日目の行動が、最終の終礼時の賛辞になったことは紛れもなかった。

最後に、学生たちのレポートから印象深いコメント（長いものは簡略化して）を順不同にて以下に列挙する。

「東日本大震災のニュースを見た日から長年抱えていた思いの一部が達成できた」「避難している人々はかなりストレスを感じているのが伝わってきた」「震災を他人事で済ませたくなく参加した」「ボランティアとしての姿勢を考えさせられた」「人々の助け合いの大切さを学んだ」「この3日間は自分の成長につながった」「誰かの役に立てればいいと思い、真剣に作業に向き合った」「被災者の方にありがとうと言われて、こみ上げるものがあった」「来てみないと分からないことばかりだった」「今回、経験したことはとても多く、自分の考えを改めて考えさせられた」「ボランティアで学んだこと感じたことを、学校や家族に伝えてゆきたい」「今回のボランティアで見たこと、聞いたこと、経験したことは、今後の生活や社会に出てから必ず活かされると感じている」



山陽新聞
2016年(平成28年)4月20日 水曜日

故郷を支えたい



避難所の小学校で診察を待つ親子に話しかける難波さん＝19日、熊本県益城町

熊本地震で甚大な被害が出た熊本県益城町で緊急支援活動が続ける国際医療ボランティアAMDA(本部・岡山市)のメンバーの中に、実家が被災した同出身の女性がいる。理事の難波妙さん(52)＝総社市宿。悲しみをこらえながら被災地となった故郷を支えようと汗を流している。

難波さんはAMDAの先遣隊として、熊本地震発生翌日の15日朝に現地入り。実家で1人で暮らす母親の無事は確認できたものの、がれきだらけの町並みや屋根瓦が落ち家具が散乱した実家を目の当たりにし、「古里がなくなった」と感じたという。

惨状に胸を痛める間もなく、AMDAと総社市が合同で編成した救援本隊の受け入れ準備に奔走。15日夜に到着した本隊と合流後、熊本市内のホテルで16日未明の「本震」に遭遇した。ご

AMDA難波理事 悲しみこらえ活動 益城町の実家被災

う音とともに鉄筋の建物にひびが入り、自室の浴槽が割れた。死の恐怖に襲われながらホテルのロビーで夜を明かした。

AMDAが拠点とする町立広安小学校の避難所は本震後、身を寄せる住民が約800人にまで増加。17日夕に電気が復旧したものの、水道とガスは不通のまま。保健室に設けた救護室には今も1日60人前後の傷病者が詰め掛けている。

難波さんは母を福岡県の妹に託した後も、学校の床で寝泊まりして支援を継続。AMDAと外部との調整役として本部から届いた救援物資を他の避難所に運んだり、不足する医薬品を地元薬剤師会と融通し合う態勢を築いたりと多忙な時間を過ごす。

偶然にも広安小は難波さんの母校で、支援活動の受け入れ先を相談した町職員は中学の同級生。AMDAで10年以上活動する難波さんも「故郷が被災するとは」と戸惑うが、「土地勘があるだけにスムーズな支援ができてい」と話す。

18日夜には、同小出身という30代の男性被災者が難波さんに握手を求め、初対面ながら共に涙を流して校歌を歌った。「みんな先行きが不安でたまらない」。難波さんは継続的な支援の必要性を痛感している。(大橋洋平)

2016年4月20日付 山陽新聞記事

防災・減災のために

くさ か ともあき
日下 知章 一般社団法人岡山経済同友会教育・社会貢献委員会委員長

この冊子には、被災地でボランティア活動をした元学生ら46人の方から、寄稿をいただきました。その中から、今後の防災・減災につながる提言を抜き出し、さらに新聞、テレビなどで報道された先進事例や、防災関連のウェブサイトも交えながら、「自助」「共助」という柱でまとめ、順不同で紹介します。

自 助

< 1 > 自分の地域を知る

まず、ハザードマップで自宅のある地域や、通勤・通学などの地域の危険度を調べましょう。ハザードマップは、各自治体のウェブサイトで検索すると、入手できます。

また、国土交通省が運営する「ハザードマップポータルサイト」という以下のサイトもあります。

<https://disaportal.gsi.go.jp/>

標高を知るには、国土地理院のウェブサイト調べられます。

<https://maps.gsi.go.jp/>

< 2 > 複数の避難場所を確認し、そこまで歩いてみる

ハザードマップには避難場所が記されています。最寄りの避難場所だけでなく、複数の場所や高台を確認し、自宅（あるいは、勤務先など）からどれくらい離れていて、どの道を通ったらよいか、確認し、歩いて行ってみましょう。

災害が起きたときには、車で移動できないことが想定されます。実際に歩いて、避難場所まで行ってみるという訓練が必要です。それも、日中だけでなく、悪天候や夜間の折にどうやって避難するか、シミュレーションもしてみましょう。災害時には停電していることが想定され、街灯が消えている中で避難すると、用水路や側溝に転落する恐れがあります。

特に、水害の場合は避難するタイミングが難しいとされています。2009年、台風9号による兵庫県佐用町で起きた水害では、死亡・行方不明者のうち9人が避難中に流されました。避難勧告の遅れがいわれる一方で、水位上昇のスピードを正確に予測す



るのは困難との指摘もあります。

専門家は道路が浸水していたり、夜間で見通しが悪かったりする場合は避難所への移動は必ずしも適切でなく、自宅の2階やビル内、あるいは親族や知人宅に避難するなど、状況に応じて判断すべきだと提言しています。

また、避難所までの経路に老朽化が目立つブロック塀などがないか、普段から身近な危険性を把握しておきましょう。

2018年の西日本豪雨で地区の99パーセントの住宅が浸水した倉敷市真備町川辺地区では、発災から3カ月後に、被災住民が中心になって「川辺復興プロジェクトあるく」という団体を設立。無料通信アプリLINE（ライン）を活用して、困りごとを相談し合ったり、復興に向けての情報交換をしたりするなど、「近所力」を生かした活動を展開されています。代表の槇原聡美さんは、災害時に、公的な避難所が定員オーバーになることを想定し、「マイ避難先」として3カ所ぐらい考えておくことを提唱しています。

「あるく」は、子育て世代向けに、わかりやすい言葉で防災の心得を記した「防災おやこ手帳」を作っており、好評を博しています。以下のサイトをご参照ください。

<https://aruku2018.org/oyako-notebook/>

<3> 「マイ・タイムライン」を作る

災害時に一人一人が取るべき行動を時系列で整理する個別避難計画「マイ・タイムライン」づくりが求められています。

特に、避難のタイミングが難しいといわれる要配慮者（高齢者、障がい者ら）に対しては、家族や近隣住民の支援が不可欠です。「平成30年7月豪雨」（2018年）で被害が大きかった倉敷市真備町の呉妹^{くれせ}地区では、「要配慮者版マイ・タイムライン」を作るなど、先進的な取り組みを続けています。

国土交通省中国地方整備局高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所は、実際に避難をされた倉敷市真備町地区の方々に協力してもらい、倉敷市、岡山県備中県民局などの監修のもと、「平成30年7月豪雨を踏まえたマイ・タイムライン検討ツール～逃げキッド～」を作成し、公開しています。

<https://www.cgr.mlit.go.jp/takaoda/mytimeline/nigekid.html>

<4> 防災グッズや備蓄食料などを備える

非常時用の持ち出し品は何が必要でしょうか。岡山県防災ガイドブック「ももたろうの防災」が参考になります。以下のサイトをご一読ください。

<https://www.pref.okayama.jp/page/547382.html>

災害発生後、救助が届くまで生活できる備蓄があるかも確認しましょう。最低でも3日分の食料や飲料水を用意することが望ましいとされています。家庭での備蓄には、普段の食料品の買い置きを少しだけ増やし、食べたものを買い足していく「ローリングストック法」がお勧めです。

<5> 家族や知人と、災害時の連絡方法を共有する

災害時には、携帯電話で通話できない恐れもあります。家族でよく話し合い、避難場所や互いの安否を確認する方法を決めておきましょう。災害時には、NTTが開設する災害用伝言ダイヤル(171)など、携帯各社が提供している災害伝言板を活用しましょう。これも、岡山県のウェブサイトの中に、紹介されています。

<https://www.pref.okayama.jp/page/508021.html>

<6> 正常性バイアス・同調性バイアスに陥らない

災害時には「正常性バイアス」が生じやすいとされます。身に危険が迫っても心の平静を保とうと、事態を過小評価する心理状態のことです。2018年の西日本豪雨の際、倉敷市真備町地区でも「自分は大丈夫」と思い、自宅にとどまった方の多くが逃げ遅れ、犠牲となりました。教訓としなければなりません。

また、「同調性バイアス」は、集団の中にいるとついつい他人と同じ行動をとってしまう心理を指します。日常生活では協調性につながるという良い面がある一方で、災害時には周囲の人の様子をうかがっているうちに避難が遅れる原因にもなります。

逆に周囲に率先して避難する人がいれば、より多くの人を避難に導くことができます。このように同調性バイアスは悪い側面ばかりではありませんが、くれぐれも避難の遅れにつながらないように、気をつけましょう。

<7> 地震に備えるために

耐震構造の建物かどうか、確認しておくのは当然ですが、自分の身の回りでできる地震対策は家具の転倒防止です。食器棚や冷蔵庫、本棚などが倒れないよう、金具で固定したり、扉が開かないようなストッパーをつけたりしましょう。

自然災害の中でも地震・噴火・津波による損害は、火災保険では補償されず「地震保険」で補償されます。ただし、地震保険は単独では加入できず、火災保険にセットして契約します。公共性が高いため、政府と損害保険会社が共同運営しています。



共 助

< 8 > 地域の人と防災を話し合う

「自助」からもう一步、進んで「共助」の在り方を考えましょう。居住地や通勤・通学地の地域ぐるみで、防災対策を講じることが大切です。ボランティア活動に参加した元学生からは「日ごろからあいさつを」「周りの人へ声を掛け合い、絆を深める」などの提言が寄せられました。

町内会・自治会の防災対策や、「自主防災組織」は機能しているでしょうか。地域で避難訓練を行っているでしょうか。

模範となる例があります。総社市下原地区です。2018年の西日本豪雨により、浸水とアルミ工場の爆発という二重の被害に見舞われましたが、地域ぐるみの迅速な避難で、1人の犠牲者も出さず、「奇跡」と呼ばれました。

同地区は、高梁川、新本川、小田川の3河川に囲まれ、過去には1893(明治26)年、高梁川の堤防が決壊し、32人が犠牲になった大洪水が発生しました。「災害は必ず起きる」という前提で、自主防災組織は「本気」の活動に取り組んできました。高台への避難道を整備し、非常持ち出し袋を全戸に配布。災害対応の“本丸”となる公会堂近くの倉庫には各種防災グッズを備えました。

中でも、重点を置いたのが年1回の避難訓練。子どもや高齢者にも参加を呼び掛け、さまざまな状況を想定し、雨の日や夜間にも行ってきました。

もう一つの好例を紹介します。西日本豪雨で浸水被害を受けた倉敷市真備町内のうち、尾崎地区では、高台(標高約40メートル)にある地区内の熊野神社に、付近の住民約200人が自主的に避難し、命をつなぎました。神社の麓にある黒宮団地は、2011年の東日本大震災を契機に、年1回、神社に逃げる訓練を住民主体で行ってきました。その積み重ねが役立ったのです。

総社市下原地区と倉敷市真備町尾崎地区。極めて高い「近所力」が命を救った実例はお手本になります。

< 9 > 救急や消火の基礎知識を学ぶ

ボランティア活動に参加した学生でその後、看護師や救急救命士となられた方も多くいます。専門知識がなくとも、心肺蘇生法や止血法、AED(自動体外式除細動器)の使い方などの講習とか、消火訓練があるときには、積極的に参加しましょう。

災害時の避難や救助などについて知識と技能を持つ民間資格に「防災士」があります。防災士の資格は1995年の阪神大震災の教訓を踏まえ、災害時に地域で活躍できる人材を育成しようと、認証機関のNPO法人「日本防災士機構」(東京)が2003年度に創設

したものです。人命救助や避難所運営に関する講座などを受け、試験に合格すると取得でき、自治会での防災活動や被災地支援に携わることが想定されています。東日本大震災以降、防災への意識が高まったことや、資格の取得費用を助成する自治体が増えたことから、ここ数年、防災士の資格を得た人は増え続けており、2021年1月には20万人を超えました。

<10> 「地区防災計画」について理解を深める

従来、防災計画としては国レベルの総合的かつ長期的な計画である「防災基本計画」と、地方レベルの都道府県、市町村の地域防災計画を定め、それぞれのレベルで防災活動を行ってきました。

しかし、2011年の東日本大震災において、自助、共助、公助が連携することによって大規模広域災害後の災害対策がうまく働くことが認識されました。

その教訓を踏まえて、2013年の災害対策基本法の改正で、自助と共助に関する規定がいくつか追加されました。その際に、地域コミュニティにおける共助による防災活動を進めるため、市町村内の一定の地区の居住者や事業者（地区居住者等）が行う自発的な防災活動に関する「地区防災計画制度」が新たに創設されました。施行は2014年4月1日。

岡山県では、2018年の豪雨災害の教訓を踏まえて、地域防災力を向上させるため、県内での地区防災計画等の作成を推進することを目的とする「岡山県地区防災計画等作成推進協議会」を県と県内全市町村で設置しました。同協議会は、モデル地区を毎年選定し、作成を後押ししています。

2021年1月、津山市城西地区の「城西まちづくり協議会」が、県内で初めて地区防災計画を策定しました。

<11> 被災やボランティアの経験を身近な人に伝え続ける

寄稿の中で、全ての人に共通していたのは、被災者のことを決して忘れてはならない、悲劇を風化させてはいけない、という強い思いでした。

人間は忘れる生き物です。まして、つらい経験や悲しい思い出は一日も早く忘却したいと思うものです。しかし、過去の経験が防災面では良い教訓となります。ボランティア活動の体験は極めて貴重であり、伝え続けることで、防災のネットワークはより太く、強くなっていきます。まさに「絆をつなぐ」ことが多くの命を救うのです。

<12> 企業・団体はBCP（事業継続計画）を策定する

企業・団体も地域防災では大きな役割を担っています。有事に備えて、BCP（事業



継続計画)を策定することが必要です。BCPづくりにあたっては、岡山経済同友会防災・BCP委員長を務める清水男^{だん}・総社商工会議所会頭が公開している同商工会議所のウェブサイトで参考になります。

<https://soja-cci.or.jp/cci/>

<13>「自分事」

国や自治体が行う「公助」は、河川改修や砂防ダムといったハード面の整備が主で、それだけでは不十分です。「公助」だけに頼らず、「自助」「共助」を進めるうえで、多くの寄稿者が触れていたキーワードがあります。

それは「自分事(じぶんごと)」です。他人事(ひとごと)、対岸の火事だと思わずに、自分事として、できることから実践すること。SDGsを進めるうえでも、「自分事」は大切なキーワードになっています。

++++++

第21回教育フォーラムから

岡山経済同友会は、「絆をつないで ～被災地での奉仕活動から10年」という題で、第21回 教育フォーラムを2021年11月18日午後、RSKイノベティブメディアセンター内、能楽堂ホール「tenjin 9 (テンジンナイン)」(岡山市北区天神町)で開催しました。

2021年は東日本大震災から10年、熊本地震から5年という節目に当たることから、当時、ボランティア活動に参加した学生たちは何を学び、現在にどう生かしているのか。また、今後30年以内に70～80%程度の確率で起こるとされる南海トラフ地震などの自然災害に対し、どのような備えをしたらよいか、を議論しました。

当日のプログラムと、基調講演、パネルディスカッションの登壇者(敬称略)は、以下のとおりです。

13:00 受付・開場

13:30 開会あいさつ (一社)岡山経済同友会 代表幹事 宮長 雅人

13:35 基調講演「忘れがたき故郷 ～ローカルイニシアチブがつなぐもの」

特定非営利活動法人AMDA 理事 難波 妙

14:10 パネルディスカッション

【登壇者】50音順

・香川大学特命准教授

いそうち ちかこ
磯打 千雅子

・(一社)岡山経済同友会教育・社会貢献委員会副委員長

黒住 宗道

- ・倉敷市消防局玉島消防署真備分署消防士長 佐藤 明
 - ・広島市立本川小学校教諭 炭田 優也
 - ・特定非営利活動法人AMDA 理事 難波 妙
 - 【司会】RSK山陽放送報道部記者 武田 博志
- 15:50 閉会あいさつ (一社)岡山経済同友会教育・社会貢献委員会委員長
日下 知章

登壇者のうち、黒住さん、佐藤さん、炭田さん、難波さんは、本冊子にも寄稿をいただきました。香川大学四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構地域強^{きょうじん}韌化^か研究センター准教授の磯打さんは、倉敷市真備町地区の復興にも関わる地域防災の専門家という立場から、地区防災計画の進め方など、数々の提言をいただきました。

詳細は、会報「おかやま経済同友」に掲載しますが、パネリスト（敬称略）の発言の一部を順不同で紹介します。



○炭田 優也

避難訓練はどの学校も行っているが、それだけでは座学だけの知識にとどまってしまう。災害の恐ろしさや互いの命を守る方法をいかに伝えるか。実際に被災した人やボランティア、防災の研究者らは生きた教材だ。まずはそうした経験がある方が家庭や地域、学校で伝え続けることが大切だと思う。私が被災地での体験を話すと、子どもたちもリアリティーをもってしっかり聞いてくれる。

子どもたちにもすぐできる共助の在り方で、授業の中でいいなと思ったことがある。一人の児童から「近所の人に『おはよう』といえればいいよ」との返答があったことだ。近所の方とコミュニケーションを取ることが災害の備えにつながる。私自身も日ごろから近所に声をかけるようにしている。

○佐藤 明

救命講習や避難訓練の中で、児童・生徒や地域の人たちに防災について講話をしている。防災や減災につながるように、災害の教訓を風化させないように努めている。

火災や地震が発生した時にどう行動するのかについて、子どもたちはよく理解している。これは、防災教育や防災訓練を繰り返し行っているからだ。今後は、今までの教育・訓練に加えて、自助や共助を教えていくことが大事だ。倉敷市消防局では、動画配信サイトやSNSを通じて、防災情報等の役立つ情報を発信している。インスタグラムで「倉敷市消防局」と検索してほしい。



○磯打 千雅子

気候変動の影響で、災害の激甚化が各地で顕著に見られる。こうした中、東日本大震災での小さな町の取り組みがその後、災害対策基本法の一部改正につながり、共助の考え方が盛り込まれた。地区防災計画といって、東日本大震災の教訓をふまえて創設された制度がある。地区居住者等が主体となって、地域の特徴を生かした災害時の“マイルール”をつくる取り組みだ。理由は、地域のことは地域の人が一番分かっているからだ。つまり、自助、共助、公助をどのように連携されるのかを明確にする制度だ。これらは、①地域に詳しい住民や企業、町内会、自主防災組織が作成する「地区の特性に応じた計画」②計画提案制度が採用される「ボトムアップ型の計画」③活動の継続を重視した「継続的に地域防災力を向上させる計画」だ。

例として、倉敷市真備町では、安否確認の方法として黄色いたすきを掲げている。また、津山市城西地区では、避難所の運営方法や防災マップづくりをしている。その地域の人が主体的になって、地域防災を考えることが重要だ。この取り組みは、西日本豪雨以降、加速的に広がってきている。

例えば、年に1回、避難訓練等を行っている地区も多いだろう。こうした時に誰が何をどう取り組むのか、文書化することをお勧めしたい。こうしたことも、大きな一歩になるだろう。ここまでに至らずとも、災害について心配なこと等を、家族や友人と話し合うだけでも大きな違いを生む。

自助や共助を考えるにあたり、「自分の家族が被災したら」と自分以外の誰かを基軸にして考えることから始めると取り組みやすい。体験を風化させない点では、1974、76年に、小豆島で大規模な土砂災害が起こった。被災された人は、昨日のことにように覚えていると言われる。体験者の話は大変大きな力を持つ。

○難波 妙

被災地では、被災後に地域防災への取り組みが加速する。こうした地域からの情報発信も大事になる。AMDAは、支援活動を災害の支援の記録として残している。教訓をどう次にいかすのかが大事で、後世に遺（のこ）すことを大事にしている。

助け合うという行動がなくなれば災害は風化する。被災者目線で付け加えると、自分から助けを求めることや伝える勇気を持つことも、被災者の真の復興に欠かせないことを、この場で言及したい。

○黒住 宗道

災害弱者である障がいのある人や高齢者を取り残されない取り組みが大事だ。祭り等地域の絆やつながりを日ごろからつくっていくことがあらためて重要になる。岡山

経済同友会や会員企業が、地域に何かがあったときは、具体的にどう動くのかをあらかじめ話し合っておく等、できるのではないだろうか。協定を結ぶなど、賛同する企業が増えるといいと思う。

「関わらなくてもいいから、忘れないでほしい」と被災地の声を聞いた。皆が被災地にいけるわけではない中、日常生活でできることとして、東北や熊本の産品を購入することがある。こうしたことなどを通して、被災地を忘れないでいてほしい。



なお、教育フォーラムの様子は、RSK山陽放送ラジオで12月4日に、同テレビで12月15日に放送されました。

++++++

岡山経済同友会の取り組みと、AMDAとの連携

岡山経済同友会とAMDAは2016年3月24日、将来発生が予測されている南海トラフ地震に備えるため、大規模災害時の緊急医療支援活動に関する連携協定を締結しました。AMDA医療チームの現地入り支援などを想定し、同友会が会員に資金や救援物資を募るほか、人員や物資輸送面でも後方支援する－という内容で、AMDAからの連携打診に応えたものです。

同年、岡山経済同友会は、委員会・部会を再編して、防災に関する研究やBCP（事業継続計画）作成を支援する「防災・BCP委員会」を新設しました。

2018年には、地域の防災に関する取り組みや提言をまとめた冊子「直面する南海トラフ巨大地震への備え」を刊行しました。AMDAと結んだ大規模災害時の支援協定に基づき発案した備蓄品管理の仕組みや、岡山県外からの避難者受け入れ支援などを紹介し、災害後の事業再開の手引きとなるBCPに関しては、意識を共有できる携帯用の個人カードを作るよう、企業や自治体に勧めています。700部作り、会員企業や岡山県内の図書館などに配りました。

2019年9月には、防災・BCP委員会が企画して、南海トラフ地震・津波をテーマにしたシンポジウムを岡山市内で開きました。

冊子「直面する南海トラフ巨大地震への備え」と、シンポジウムの内容は、岡山経済同友会の下記のウェブサイトで公開しています。

<https://okadoyu.jp/report/>

2020年、2021年は新型コロナウイルスの影響により中止となりましたが、毎年開催されている「AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議」には、岡山経済同友会からも出席し、支援準備に向け協議を進めています。

あ と が き

くさ か ともあき
日下 知章 一般社団法人岡山経済同友会教育・社会貢献委員会委員長

本冊子をまとめるにあたり、多くの皆様にご協力を賜り、心より厚くお礼を申し上げます。

当時、参加した大学生の消息を尋ねるため、大学コンソーシアム岡山の加盟校である各大学の担当窓口には大変なお手数をおかけしました。できるだけ多くの参加者から寄稿をお願いしたかったのですが、被災地でのボランティア活動から5～10年がたち、連絡がつかない方も少なくなく、原稿をいただけたのは全参加者の1割強にあたる25人にとどまりました。

学生時代の尊い体験を生かして、それぞれの立場で活躍されている皆様から寄せられたメッセージは重く、濃密で、今後の防災・減災・縮災に向けて、多くの示唆に富む内容でした。仕事を抱えた中で、ご無理を申し上げました。医療や消防の最前線で献身されておられる方、中には育休中の方もいらっしゃいました。貴重な時間を割いて、ご執筆をいただきました皆様に、あらためて深く感謝申し上げます。

6年間にわたる被災地での支援活動で、学生を派遣したのは大学コンソーシアム岡山に所属する計14大学・4短大に上りました。参加しなかった大学は決して消極的だったわけではなく、既に大学独自のルートでボランティア派遣をしたり、支援活動をされていたりしたからでした。また、参加された各大学から、少なくとも1人は寄稿をお願いしたかったのですが、編集者たる私の力不足のせいでそれはかないませんでした。その点はお詫び申し上げます。

団長として6年間引率された黒住宗道さんと、AMDAの菅波茂代表、難波妙理事には、この冊子の編集にあたって、的確なご助言をいただきました。澁谷俊彦・山陽学園大学教授、木村宏・岡山理科大学名誉教授には写真をご提供いただきました。また、岡山経済同友会の久山裕士専務理事、事務局の大原嘉奈子さん、喜多奈緒美さん、大学コンソーシアム岡山事務局事務長の矢延里織さんには、資料の提供で格別のご高配を賜りました。そのほか、お名前は挙げられませんでした、多くの皆様に、重ねてお礼を申し上げます。

私の会社の先輩でもあり、このボランティア派遣を裏方として支え続けた元岡山経済同友会事務局長の故金森満廣さんと、前委員長であり、代表幹事在任中に急逝された桑田茂さんの御霊にこの冊子をささげます。



一般社団法人岡山経済同友会 教育・社会貢献委員会名簿 (2021年10月8日現在)

代表幹事	宮長 雅人	(株)中国銀行	取締役会長
代表幹事	梶谷 俊介	岡山トヨタ自動車(株)	代表取締役社長
委員長	日下 知章	(株)山陽新聞社	常務取締役倉敷本社代表
副委員長	石川 康晴	(株)ストライプインターナショナル	オーナー
副委員長	黒住 宗道	黒住教	教主
副委員長	高谷 昌宏	(株)サンヨープレジャー	代表取締役社長
副委員長	福嶋 裕美子	学校法人福嶋学園	理事長
副委員長	横山 昌弘	(有)魚徳浜作	代表取締役
委員	青山 光弘	(株)近畿日本ツーリスト中国四国岡山支店	支店長
	井尻 昭夫	岡山商科大学	学長
	江原 新士	(株)HUGHUG	代表取締役
	大倉 宏治	(株)GLOCAL	代表取締役
	加計 孝太郎	学校法人加計学園	理事長
	小林 宏次	みずほ証券(株)岡山支店	支店長
	小山 壱也	ノーイン(株)	代表取締役
	齊藤 育子	山陽学園大学・短期大学	学長
	佐藤 公泰	佐藤建設(株)	代表取締役社長
	佐藤 兼郎	(公財)岡山県産業振興財団	理事長
	佐藤 正浩	医療法人養命会 佐藤医院	副院長
	鷹取 司	鷹取法律事務所	所長
	千葉 喬三	中国学園大学・中国短期大学	学長
	西 敏明	岡山商科大学	経営学部長
	西井 泰彦	学校法人就実学園	理事長
	馬場 勉	(株)馬場総合鑑定所	社長・不動産鑑定士
	原見 修司	RSK 山陽放送(株)	取締役営業局長
	藤木 茂彦	(株)丸五	代表取締役会長
	藤森 徹	RSK ホールディングス(株)	代表取締役副会長
	松山 正春	(公社)岡山県医師会	会長
	村上 喜郎	税理士法人おかやま創研	代表社員・所長
	室賀 康史	室賀ネジ機工(株)	代表取締役
	本原 康彦	(学)岡山瀬戸内学園 倉敷高等学校	理事長
	柳澤 康信	倉敷芸術科学大学	学長
	油谷 直幸	(株)研美社	取締役

2021年12月

発行 一般社団法人 岡山経済同友会

〒700-0985 岡山市北区厚生町 3-1-15 岡山商工会議所ビル 5 階

TEL 086-222-0051 FAX 086-222-3920

メール okadoyu@optic.or.jp

絆をつないで

被災地での奉仕活動の記録・提言集

